

---

# 転換！関ヶ原！

歴史転換

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転換！関ヶ原！

### 【Nコード】

N5562F

### 【作者名】

歴史転換

### 【あらすじ】

李氏朝鮮にいるその若き大名は思う（歴史はどう動くのか）っと。しかし、その若き大名こそが今後の日ノ本を動かす中心人物だとは自分は元よりまだ誰にも想像してはいなかった。

## 0 序章（前書き）

今回、初投稿をした歴史転換です。かなり雑な文になることも予想していますが、何卒ご理解して下さい。

さて、今回の作品については題名どりの関ヶ原の戦いを中心にしての転換…歴史シミュレーションです。

基本的にはオリジナルキャラクターは登場はしません。また、登場しても下っ端です。

また、作者が勝手に解釈した歴史観もありますので不愉快になることもあるかもしれません。そこもご理解をお願いします。

この他にも武将のイメージが違うなどのことも批判があると思われるますが、この小説上の性格なのでご理解をお願いします。

応援してくれると私は大変嬉しいです。

主人公については…そろそろこの辺にして、プロローグに入りましよう。（短いですけど）。

## 0 序章

### 0 蠢く歴史

時は一五九八年八月十八日、夏になって熱い日ノ本に心胆を冷やす事件がおきた。

京の伏見城にて、一人のか細く衰えてしまった老人が無念そうに息を引き取った。その老人の名は豊臣秀吉という日ノ本一の実力者にして、一番の権力者であった太閤その人である。死因は老衰で享年六十二歳。これがその事件である。

しかし、何故この秀吉が無念そうに息を引き取ったのか。勿論だ理由がある。それは一人息子のまだ五歳の幼い秀頼である。

（この秀頼を残して死んでいくのか・・・。）

これが秀吉の無念である。この秀頼が果たして天下を保てるか。

（無理だろう・・・。）

秀吉はこう心境で確信していた。

秀吉は農民からの成り上がり者である。農民が普通ならばここまです世はしないだろう。だが、第六天魔王と自称した、織田信長からの寵愛を受けて出世していった。そして紆余曲折があったが、太閤の座まで成り上がったのだ。

その成り上がり者の下に仕える奇立ちや屈辱感から、心から忠誠を誓う大名は少ないのも分かっている。これに、農民出の秀吉は譜代家臣が少ないのも拍車をかけている。もし自分が死んだら秀頼を心から助けようとする大名は少ない。もし乱世になれば秀頼の命は全く保障されないのだ。だからこそ無念で無念で仕方ないのだ。やつのことで出来た息子なのに、その未来が暗いことに無念なのだ。その秀吉には秀頼に出来ることは既に限られていた。

それは、自分が任命した五奉行の大名や五大老は無論のこと、各大名にも何度も何度も誓詞を書かせて忠誠を誓わせることだった。それこそ周囲が呆れ果てる程である。それしか、もう秀吉には方法は無かったのである。

「くれぐれも秀頼をお頼み申す。」

秀吉は様々な大名を呼ぶと必ずこう言い誓詞を書かせた。それが自分に出来る最後のこと・・・良心に訴えるしかないのだ。乱世になれば誓詞など空手形などは承知しているが、秀吉はこれに賭けた。・いや賭けざる得なかった。そして、それは命が尽きる寸前までいい続けた。

その秀吉も遂に死んだ。五大老達はこの秀吉の死去にあることを即決する。

それは後の慶長の役と後に呼ばれる戦に参加している大名達に聞いている。かの者達は日ノ本にはおらず李氏朝鮮という国で戦をしているのだが、その撤退を指示したのだ。秀吉がいる限りは永遠に無理だったろうが、秀吉の死後にこれだけは即決した。

そして、日ノ本は秀吉の死去により大混乱が始まろうとしていた。それは秀吉が死の間際に五大老や五奉行を任命するまでは独裁政治だからであつた。だが、天下統一後は秀吉には人徳などや能力も正常だったので問題はなかった。この直後に大人しく天下を統一して政治に力を入れれば良かったのだが、秀吉は大いに動いた。しかも悪い方向に・・・。

この後、秀吉は数少ない血縁者にして、能力もある弟の豊臣秀長が死去した後に少しづつ残虐性が出始めた。それまでは顔色を見ながらの行動してきた秀吉は嫌でも愛想笑いをし、我慢もした。だが、逆らうものがいなくなつて今までの反動が起きたのだ。傲慢だが有

能だった千利休の処刑や言うことを聞かなかった李氏朝鮮への出兵など暴挙を繰り返した。だが、誰も諫言しない。すれば首と家がなくなるからである。

更に甥の秀次に閨白を譲り自分が太閤になった後に暴挙中の暴挙を犯した。秀頼が産まれると秀次を狼藉を働いたなどと因縁をつけて処刑したのだ。秀頼を後に閨白にしたいが為である。この処刑は当時、どの大名も驚愕し顔を歪めた。明らかに理由が露骨なわがままだったからである。閨白という官位ながらこんな悲惨な死は先例になかったのもこの暴挙の惨さを際立たせた。

しかも秀次の妻子や側室達、三十数人も処刑して、畜生塚という塚を作って其処に遺体を葬った。これに続き秀次の政庁だった聚楽第も滅した。徹底的に秀次というのを、この世に残してなるものかという秀吉の狂気に世間は胸糞が悪くなったし、恐怖した。

このように秀吉は、世間から陽気な天下人から狂気天下人に成り下がったと言われるようになった。

だが、秀吉生存中は世は荒れなかった。それはどんな形であれ、秀吉という男が一番の権力者兼独裁者に誰も逆らうことはなかったからである。

しかし、その秀吉は死去した。その独裁者の死は公表してないのに、直ぐに民は敏感に気付いた。偉大な者の死はどうも隠すのは難しかったようである。

（太閤殿下は死去なされた。）

民はこの話題に恐怖したり驚愕したりと動揺しきりだった。夏で熱いにも関わらずに民達は汗をダラダラ流しつつも、井戸端会議を合い、あつと言う間に広がっていった。死去して数日たつと京は誰もが知ってる状況になってしまい、一方で次の天下人についての話題をする有様になっていた。だが、民達が秀吉の死を惜しんだのは少数であったのが共通点だった。それが、最後の秀吉に対する民達の哀しい評価だった。



## 0 序章（後書き）

李氏朝鮮にその若き大名はいた。若き大名が今後の戦乱の主人公になっていくころとはこの時は誰も知らなかった。

次回、転換！関ヶ原！第一章李氏朝鮮脱出『1、使者が釜山城にやってきた。』

「では、参ろうか……。」

## 第一章一節 李氏朝鮮脱出（前書き）

あくまで歴史シミュレーションであることをお忘れなく。

## 第一章一節 李氏朝鮮脱出

### 1 使者が釜山城にやってきた。

一五九八年十月十五日の李氏朝鮮。肌寒い正午の晴れのことである。空気は秋なのに、少々乾燥してて喉に空気が入ると少々痛い。そしてそんな空気からは、微かに磯の匂いがしている気がする。

（何で私がこんな処に行かなければならないのか・・・。）

そう愚痴を小声でいうのは五奉行の一人であり、筆頭の石田従五位治部少輔三成の使者だ。服装は青い平服だが、少しボロがある。どうやら、日ノ本からの航海や移動でボロになってしまったのだろう。その周りにいる、かの者を守る甲冑姿の護衛兵の数人には使者の小声は聞こえなかったみたいだ。そしてかの者は現在、李氏朝鮮の釜山城に向かう為に小山を登っているのだ。

五大老は李氏朝鮮からの即時撤退を即決してものの、その全ての道理は三成に任せた。・・・いや、推しつけて、丸投げにしたといってもいい。大体、五大老は秀吉の死による、他の会合で忙しいのが一応の理由らしい。三成自身も困惑したものの、五奉行の筆頭の誇りからか直ぐに行動した。三成の文官に即時撤退するように李氏朝鮮にいる大名達に命じて、実行させよと命じたのだった。無論、五大老と五奉行の連名書を持たせてである。

（しかし・・・暑い。）

使者はこの暑さにうんざりした顔をした。十月半ばでありながら、甲冑姿ではなく平服なのに暑い。ただでさえ危険な航海をして日ノ

本の杓岐から李氏朝鮮に来た時に、船は小船で揺れは酷く船酔いをして嘔吐をしたこともあり不機嫌だ。しかも船には帰国する時乗ることも思考すると鬱になりそうだ。

使者は周りをグルツと見渡した。小山だからか何処も殺風景であり、草木がボーボーと生えてるだけである。木は無論、たくさんあるが何処か悲しげだ。小山を登っているのに、フツと鳥や獣の鳴き声が聞こえないことに気付く。この鳴き声がないのは何故か嫌である。生物の言霊がないことが嫌なのだろうと勝手に結論づけた。

しかし、道にすれ違う人が少ないのに使者は奇妙がった。少々の足軽が通るぐらいで少ない。そういえば、李氏朝鮮に到着してから民達の姿を見ていない。

（何故だろう・・・。）

脳を全回転しても検討がつかない。どうやらこの使者はあまり李氏朝鮮の事情を知らないようである。三成様からの命を実行させればよいとだけ聞いたから、こんなことを考えても仕方が無いかと樂觀的に使者は思考を打ち切った。

ここで少し説明しておこう。李氏朝鮮の出兵を始めた時は、日ノ本の軍は快進撃を続けた。いつしか、戦になれば勝って当たり前となっていた。あまりに李氏朝鮮の軍が弱すぎたのである。日ノ本軍は調子の乗った。そして調子に乗って前線が伸びきるとある出来事がおきた。李氏朝鮮の民衆の武力蜂起である。日本風にいうと一揆である。

この武力蜂起によって日ノ本軍は混乱したのだ。民衆の武力に怖がったのではない。現地の兵糧や地理の案内などの援助がなくなったからである。

更に海上で日ノ本海軍が徹底的に負けたのが混乱が強まった。現地で兵糧が調達出来ない状況なのに、更に日ノ本からの兵糧補給が

出来なくなつたのである。これで、日ノ本軍は兵糧不足に陥る。

悪いことは続く。隣国の明から大勢の援軍を李氏朝鮮に派遣したのだ。これで、戦況が一気に劣勢になってしまった。この当時の日ノ本軍は四面楚歌といつてもよい境地に立たされたのだ。

しかし、この後一時的に講和の話が出て、休戦になる。これが日ノ本軍を救つたのである。一斉に日ノ本軍は李氏朝鮮から撤退した。渡りに船とはこのことである。

（もう懲り懲りだ。褒美はこの際いらないからもうこれで手打ちにならないだろうか・・・。）

この休戦前が後に文禄の役と呼ばれるが、それに出兵した日ノ本軍の大名達はこう思った。嫌気がでたのだ。あれ程の境地立たされたのだから仕方がない。ただでさえ、自分の領地がもう数年家臣任せで荒れている。

だが、その願いは完全に打ち碎かれる。秀吉が講和を破棄したのだ。

（またか・・・。）

出兵した日ノ本軍はもうこの戦に希望はないことを悟っていた。前回の戦で、嫌ほど実体験しているからだ。底なし沼に出兵した大名達は嵌っていく。

秀吉の命で本当に渋々出兵した、日ノ本軍の士気は低かった。もう李氏朝鮮の領地は望めないからである。

そして今回もまた、海上権を取られてた。また、日ノ本からの兵糧補給が出来なくなつたのだ。

現在の李氏朝鮮の民衆は、日ノ本軍を嫌い、兵糧を一切出さない。しかも、この戦からは戦費は実費になつたのだ。

食うものもない。褒美もない。金が無くなることにより、今後日ノ本に帰国したら金の為に逆に自分の領地を減らされるやもしれない。これでは兵の指揮はあがらない。こんな最悪な気分で、大名達

は必死に兵を鼓舞しながら戦をしたいのだ。

以上のことにより民衆に会えない訳なのだが、この使者にはそれが分からない。事情を知らないこの使者を罵ることは出来る。せめて三成に状況を拝聴した方が良かった。だが、日ノ本は李氏朝鮮の出来事は情報封鎖しているので、三成はどの道あまり話せない。結局は現地に行った事も無い兵は、日ノ本から想像するか噂で判断するしかなかった。

（やっと到着したか。）

暫く歩いていくと、漸く釜山城に使者は、息を荒くしながらも到着した。釜山城の旧名は釜山鎮城である。日ノ本軍が真つ先に、ここを攻め落とすと、この小山の頂上に日ノ本式の城を築城したのだ。これが釜山城である。小さい小山にあるが、中々の要害にある城である。

この時、偶然にもかなりの大名達が集結していた。今回は前回のことを教訓に、あまり前線が伸びずにいるのだ。だから、よく武將間でここで会議をしているのだ。釜山城が最終防衛拠点だからである。その会議が偶々あつて大名達がいるのだ。そのことを使者は城に入城するなり武装姿で仁王立ちしている門番にそれを聞きほくそえんだ。

（手間がかからんな。）

「この城にいる大名を直ぐに集めよ。石田治部少輔三成の使者が参り、伝令したいことがあるとな。」

「わ、分かりました。」

門内に入城して迎えにきた足輕頭に使者は高圧で威張りながら命じた。バタバタと慌てて城の各人に伝達していくのを想像すると気分がいい。

そして使者は大広間から数間離れた小部屋で使者は数少ない食料や水に少々不機嫌になりながらも食しながら出番を待つ。

（何の騒ぎだ・・・。）

釜山城にある部屋に、台に向かって座していた若い大名が眉を顰めた。先程から廊下からバタバタと人が慌しい足音を聞いているからだ。

その若い大名は読書をしていたのだろうか、本を台に置いている。部屋は李氏朝鮮だというのに、日ノ本風になっている。これは日ノ本を恋しいが為に全部屋そう造つてある。

その若い大名は見た目からしたら、将には向いていないのかもしれない。顔は細長く、身長は五尺五寸ぐらいだろうか、日ノ本の中では少々大きい。体も細いが肉はある。顔は少々女子っぽい。目は細く鼻は丸い。唇は小さく顎はシュっとしていて傷は無い。服は平服で質素なものだ。しかし、そんな身なりからは清々しい日光の匂いする、ただ者とは言い難い若者であった。

その若い大名の他にこの部屋に居たのは、若い大名の横にピタリと平服ながらどこか威圧感がある片足座りの男、若い大名と対面する形になって一人座してる平服ながら、こちらはただ者ではない雰囲気をもった筋肉質の男の三人だ。

若い大名はこの朝鮮の残暑に苛立っていた。その気晴らしになるかもつと読書をしていたのだが、その騒々しさに苛立ちがすっかりと忘れて気になった。

「見て参りましょうか。」

「いや・・・その必要はないようだ。」

対面している男の提案に若い大名は、多少だが眉の歪めを整えた後に笑いながら否定した。笑うと元服前の童子にも通じる幼さがある。笑いながら若い大名は身なりを整えた。何かそうした方がいいつと若い大名の勘が働いたからである。その様子に他の二人も、自然と合わせた態度をした。

三人が手持ち無沙汰でいると、襖の前でその若い大名の近侍が襖

越しにやって来た。その息が荒いのが襖越しでも判る程、ハアハアと言っていた。どうやら相当に急いでいたのだろつか、全力でここまで走ってきたようである。

「石田従五位下治部少輔三成様の使者なる人が大広間にて大事な伝令があるとのこと。直ちに集結されたしとのご命令ができました。」

「承知した。」

下がっていいつと若い大名が続けるとハツと近侍は返事をして下がる。部屋に緊張感が自然と出てくる。暑さに加えてか、若い大名の前にいる筋肉質の男は汗が吹き出てる。一方の若い大名とその横にいる男は涼しげだ。汗も出ていない。筋肉質の男は尋ねた。

「何の用でしょう。」

「さあな。だが……。」

嫌な予感がするつと若い大名は言葉を切ると嫌な顔をした。この予感が当たらない方がいいのだが。そう思考すると、サツと顔を元に戻して若い大教は立ち上がった。そして横にいる男に言う。

「宗章、行くぞ。」

「……………」

無言で立ったその男は柳生五郎右衛門宗章という。この若い大名の警備をしている近侍である。

この若い大名の近侍であるこの男は様々な武者修行の果てにこの若い大名に仕えることになった。身長は六尺あり、柳生新陰流の剣術を使える剣術家で肉がついてて細くは無い。顔も厳つく武士らしい顔つきで右頬に三寸の切り傷らしきものがある。無口だが、ちゃんと話は出来る。

「では参ろうか、重元はここでまっておれ。」

そう筋肉質の男こと、松野平八重元に告げると若き大名こと、小早川中納言秀秋は宗章と部屋を出た。残された重元はこれは一大事になるかもしれないつと他の仲間を呼ぶ為に声をあげる。釜山城に風向きが変わる使者が到着した中、陽はただ慈悲に光っていた。

## 第一章一節 李氏朝鮮脱出（後書き）

秀秋は思想する。自分の智謀を使つて。だが、そんな秀秋は微妙な立場にいた。敵は身内にもいる秀秋の運命は・・・。

次回、転換！関ヶ原！第一章二節李氏朝鮮脱出『2 秀秋の立場』。

「さてさて、何の・・・・・・。」

## 問章 人物設定（前書き）

今回は簡易人物設定です。少し前倒しな所があるので注意して下さい。

## 問章 人物設定

### 1・5 小早川秀秋とその家臣達

まだ登場していない家臣もありますが、ここで一気に小早川秀秋の周辺の人々を簡単に紹介します。しかし、これはまだ一話での紹介。後々に性格が変わったり、官位や歳は変わっていくので軽く頭に入れるだけにしたほうが賢明です。

〔名前〕 小早川 秀秋。

〔性別〕 男。

〔官位〕 従三位 中納言。

〔年齢〕 十六歳。

〔性格〕 温厚で家臣思い。しかし、戦では鬼のように槍を突き倒す一面や気に入らない者には冷徹になる一面もある。幼少の頃から大人の欲望を見た為か我慢強く顔に考えていることを出さないことが出来る。また、欲がなく野心もない。寂しがりやでもある。自身を過小評価している。

〔位置〕 筑前と筑後・肥前の一部の三十万七千石の大名。ただし、一時越前十五万になりかけたことがあるのだが、現在は元に戻っている。

〔癖〕 気に入った者にちよっかいをかける（理由は本編で）。

〔女、子供〕 古満（穴戸元秀の娘↓毛利輝元養女）が妻。仲は親密で子はいない。また側室もなし。

〔この小説の役割〕 主人公。

〔能力〕 未知数。

〔身長〕 五尺五寸（約百六十五センチ）。

〔容貌〕 少々女っぽい。目は細く少々垂れているが恐ろしく澄んでいる。鼻は丸く小さい。唇は小さく薄ピンク色。顎はシュットしていている。傷や髭はない。眉は細長く薄い。肌はいかにも肌色という色である。

〔名前〕 古満。

〔性別〕 女。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 十七歳。

〔性格〕 優しくおっとりしている。若干だが天然。ただし、大事な物や人を守る為なら冷酷にもなれる。夫第一主義。

〔位置〕 秀秋の正室。夫の留守の間は城代。また、秀秋の近侍取締役を勤める。

〔癖〕 夫の頭を撫でる（場所を考えない）。

〔男、子供〕 小早川秀秋が夫。仲は親密。子はいない。常に夫を気にかけている。

〔この小説の役割〕 主人公の正室。

〔能力〕 賢妻といわれる。頭脳はかなりの切れ者。

〔身長〕 四尺七寸（約百四十一センチ）。

〔容貌〕 大人びている。目は大きくパツチリしていて鼻は細長く大きい。顎は少々丸いが贅肉はない。唇は薄いピンク色で小さい。傷はない。丁度頬の上肉に小さいホクロがある。髪は長く癖がない。色白で髪は少々茶色っぽい。全体で顔が小さい。肌は艶々してて滑らか。眉は太長いが薄い。

〔名前〕 松野 重元（通称平八）。

〔性別〕 男。

〔官位〕 従六位下 主馬首。

〔年齢〕 二十五歳。

〔性格〕 豪快で激情家。だが、意外な繊細さもある。欲がない。

〔位置〕 小早川家第一先頭隊長。兼任として小早川家鉄砲隊総大頭。小早川家の家老でもある。

〔癖〕 政務に対していつも一時間置きに三十分休憩する。

〔女、子供〕 共になし。今は興味はあるが、忙しく出来ないという。

〔この小説の役割〕 主人公の忠義一番の猛将。

〔能力〕 戦では槍働きは無論、鉄砲や兵の指揮も取れる。しかし、知恵比べになると弱くなり基本的には指示に完璧に従うようにしている。知ではあまり役にはならない。

〔身長〕 六尺三寸（約百八十九センチ）。

〔容貌〕 厳つい。右頬に一つ、左頬に二つの一寸（約三センチ）ぐらいの切り傷がある。目はギョロとデカイし、鼻は大きく丸い。

唇も分厚い。基本的に顔が大きく、日焼けで肌が焼けて黒い。髭がある。眉は太短く濃い。

〔名前〕 柳生 宗章（通称・五郎右衛門）。

〔性別〕 男。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 三十一歳。

〔性格〕 無口で冷静。物事も淡々とこなす職人肌。冗談が分からない程の真面目。

〔位置〕 小早川秀秋の見回り警備隊長。剣術家として家中で剣を教えてもいるが、無口な為かあまり評判はよくはない。他にも近衛兵も勤めている。近衛兵は副取締役でもある。

〔癖〕 足音を消して歩く。常に日本刀を持つ（風呂以外）。

〔女、子供〕 共になし。剣一筋。

〔この小説の役割〕 主人公の守護警備。

〔能力〕 戦でも平時でも常に隣にいる。剣は一流であり、政務も淡々とこなす。知もあるが、兵を指揮する能力は、若干欠けている。つまり個人戦に強く、団体戦に弱い。

〔身長〕 六尺（約百八十センチ）。

〔容貌〕 顔が厳つく。武士らしい顔つきで右頬に三寸（約9センチ）の切り傷。肌の色が若干黒い。髭は少しある。眉はキリッとしている。

〔名前〕 稲葉 正成。

〔性別〕 男。

〔官位〕 従五位下 佐渡守（自称）。

〔年齢〕 二十六歳。

〔性格〕 冷静沈着。礼儀正しく軍紀に厳しい。怒ると怖い。恐妻家。

〔位置〕 小早川家の知識であり知恵である。小早川家の筆頭家老。また、小早川家三大家老の一人。

〔癖〕 考え事をするとき顎に拳をつく。

〔女、子供〕 現在は福（斎藤利三の娘↓稲葉重通養女）。再婚で仲は倦怠期。子は昔の妻が産んだ一男一女、福の一男が最近産まれたらしい。

〔この小説の役割〕 主人公の知恵袋。

〔能力〕 知で支えるだけあって政務、謀略は小早川家臣の中では一番。兵の指揮も取れる。ただし、個人戦には弱い。

〔身長〕 五尺（約百五十センチ）。

〔容貌〕 歳よりは老けて見える。若干白髪や皺も目立つ。少し寝てる顔つきで目は薄開きで鼻は丸く低い。唇は力サ力サしている。

顔に傷なし。髭は薄く生えてる。眉は細薄短い。肌は白い

〔名前〕 福。

〔性別〕 女。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 十八歳。

〔性格〕 鬼嫁。激情家。基本的に強気一本。古満を実の妹のように可愛がる度胸がある。古満第一主義。

〔位置〕 正成の正室。小早川秀秋が留守の時は古満の片腕となる。

〔癖〕 苛立つと髪を搔く。

〔男、子供〕 稲葉正成が夫。仲は倦怠期。子は二男一女。子には平等に愛情を与えている。

〔この小説の役割〕 主人公の正室の片腕兼心友。

〔能力〕 相手を威圧させる。歯に着せぬ発言だが、物事を見抜く目がある。

〔身長〕 五尺二寸（約百五十六センチ）。

〔容貌〕 目つきが鋭く、鼻の丸いが低くはない。顔全体は丸いが、全体的に威圧を与える顔つき。髪は綺麗な長い黒。肌は色白でモチモチしている。左の鼻の穴の上の皮膚にホクロがある。眉は太短く濃い。

〔名前〕 平岡 頼勝。

〔性別〕 男。

〔官位〕 従五位下 石見守（自称）。

〔年齢〕 三十七歳。

〔性格〕 実直である。だが冗談は通じる。若干家臣に甘い所がある。基本的には温厚。

〔位置〕 小早川家の兵法。家老であり、小早川家三大家老の一人。

〔癖〕 念押しに何度も同じことをいう。

〔女、子供〕 黒田如水の姪（登場予定なし）。子はいない。仲は良好。

〔この小説の役割〕 主人公の中での家臣の中で兵法一。

〔能力〕 重要な部隊は基本的に統率を任されるなど、指揮は家臣一。槍使いも上手。ただ謀略面や知識には苦手意識がある。

〔身長〕 五尺七寸（約百七十一センチ）。

〔容貌〕 年寄りっぽい、味がある。基本丸く恵比寿様に似ている。若干だがホクロの数が多いのつを本人は気にしている。顎鬚白いのが少しある。眉は太短く白いのがありながらも濃い。肌は日焼けで黒い。

〔名前〕 杉原 重治。

〔性別〕 男。

〔官位〕 従五位下 紀伊守（自称）。

〔年齢〕 四十一歳。

〔性格〕 地味。あまり目立たない。前に出ないようにしている。ただし心は強く太い。

〔位置〕 小早川家三大家老の一人。三大家老の中で一番の老臣。

〔癖〕 まあまあ・・・とよくいう。

〔女、子供〕 妻はいたが死去して現在はない。杉原重季が一男としている。

〔この小説の役割〕 小早川家の老臣で、家の調整役。

〔能力〕 特別優れているのはない。ただ任を与えられたらそつなく実行する。

〔身長〕 五尺四寸（約百六十二センチ）。

〔容貌〕 苦勞が多々あったのか既に老人顔。笑うと好々爺そのもの。歯も左上の犬歯がない。笑い皺が深い。目はしょぼしょぼしている。鼻はシナっとしている。唇に一個ホクロがある。髪はほぼ白

髪。

髭はない。眉は全て白で薄く細長い。肌は日焼けばかりしてたからかシミが目立つ。

〔名前〕 杉原 重季。

〔性別〕 男。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 二十歳。

〔性格〕 竹を割った性格。秀秋第一主義。少々短慮な所がある。

〔位置〕 小早川家の近侍。上司は古満。だが主に父の手助けをしている。

〔癖〕 興奮すると舌で唇を舐める。

〔女、子供〕 共になし。現在は自身の鍛錬に専念。

〔この小説での役割〕 成長盛りの若き剣客。

〔能力〕 剣を学んでいる。その為か個人戦はそれなりの光るものがある。頭脳も悪くないが、基本的に経験不足が目立っている。

〔身長〕 五尺九寸（約百七十七センチ）。

〔容貌〕 若侍風。まだ幼さが残るし丸い顔だが、目は鋭いし眉も太長く濃いので威圧感を出そうとしている。鼻は大きく丸い。唇はタラコそのもの。髭がある。肌は焼けて黒い。所々擦り傷がある。

〔名前〕 河田 資友（通称・八助）。

〔性別〕 男。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 二十九歳。

〔性格〕 のんびりしている。ボーっとしている姿もよく見られる。温厚で優しい。天然でその天然発言によく混乱が生じることがある。戦中は鬼の顔で強気。しかも俊敏である。なので二重人格疑惑があ

る。

〔位置〕 小早川家鉄砲頭。松野重元が上司。

〔癖〕 よく空を見上げる。

〔女、子供〕 共になし。子供が好きでよく城下町で遊ぶ姿が見られる。

〔この小説での役割〕 癒し系兼トラブルメーカー。

〔能力〕 怪力で戦では槍を放さない。化け物長鉄砲で狙撃することもある。指揮も統率出来るが、知略面は苦手。

〔身長〕 六尺（約百八十センチ）。

〔容貌〕 童顔で若く見える。眉は薄細短い。目は丸く大きい。唇は大きく赤色。眉は太短く濃い。額から眉間、右の鼻穴の上を通って右頬にかけて五寸（約十五センチ）の傷がある。

〔名前〕 市野 実利（通称・惣大夫）。最近になって伊岐真利に改名している。

〔性別〕 男。

〔官位〕 従五位下 遠江守（自称）。

〔年齢〕 三十歳。

〔性格〕 軽い。口達者でよく喋るのだが、それが災いしてよく怒られる。女癖が悪い。

〔位置〕 小早川家の武術指南役。若手教育をしている。

〔癖〕 女探しで見渡して探すのが癖になり、よくキョロキョロしている。

〔女、子供〕 共になし。女癖が悪いのでよく問題がおきる。

〔この小説での役割〕 息抜き。

〔能力〕 基本的に何でも出来る。しかし特別優れたものがない。器用貧乏。

〔身長〕 四尺九寸（約百四十七センチ）。

〔容貌〕 何処にでもいそうな顔。特別語る顔つきではない。だが

不思議と女に好かれる。

〔名前〕 堀田 正吉（通称・勘左衛門）。

〔性別〕 男。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 二十六歳。

〔性格〕 清廉潔白を表してる男。多少冷たい態度を取るが、情は強い。

〔位置〕 小早川家の文官。稲葉正成の腹心。

〔癖〕 爪を軽く噛む。

〔女、子供〕 共になし。だが、近頃婚約騒ぎがおきる予定。

〔この小説の役割〕 文官としての立場。

〔能力〕 政務に長けるが、戦はからつきし駄目。

〔身長〕 四尺八寸（約百四十四センチ）。

〔容貌〕 狐に似ている。眉も口も色は薄く細長い。目は細長く小さい。色も薄い土色。細長く小さい鼻がある。

〔名前〕 村上 吉正。

〔性別〕 男。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 三十三歳。

〔性格〕 大人しい。少し暗い。忠義心は高い。またあまり喋らない。

〔位置〕 秀秋の右筆。

〔癖〕 時に笑うとひき笑いをする。

〔女、子供〕 共になし。

〔この小説の役割〕 主人公の秘書。

〔能力〕 政務、謀略などの知略が優れているし大局面に長けてい

る。また、外交官としても活躍している。戦中は伝令兵をやっているのが苦手だが、出来ないという訳ではない。

〔身長〕 五尺一寸（約百五十三センチ）。

〔容貌〕 悪い人相。眉は長細く薄い。目は細く小さい。口は大抵性格が暗いのにニヤニヤ笑っている。鼻は高く細長い。傷はない。

〔名前〕 清水 景治（通称・源三郎）。

〔性別〕 男。

〔官位〕 なし。

〔年齢〕 二十八歳。

〔性格〕 愚直で頑固。融通が利かない。基本的に堅物である。

〔位置〕 秀秋の近衛兵取締役。また近侍の副取締役も兼任。

〔癖〕 常に眉を顰めている（不機嫌でない時でも）。

〔女、子供〕 妻は亡くなったている。子は一男いる。

〔この小説の役割〕 主人公の忠臣。

〔能力〕 武よりも、文の方が実は上手い。基本的なことは大抵出来る。指揮能力もあることから、秀秋の周りを固める近衛兵取締役に抜擢されるので、強ち武が不得意ではない。だが、愚直な性格が災いして、謀略などはからつき駄目である。

〔身長〕 六尺一寸（役百八十三センチ）。

〔容貌〕 癖もあってか、強面である。顔は大きく、少し角ばっている。顔色は土色。目は細く切れてて長く大きい。鼻はまん丸で大きい。口は何故か少し小さく色も薄赤である。眉は太く短く色は濃い。顔面には傷はない。

基本的な小早川家の現在の主な人を書いたみましたが、多いな・・。また増えたら書くかもしれません。今回から、外伝的なのは○。○と（・）がある話は外伝要素にしますので、良かったら見てく

だ  
さ  
い。

## 問章 人物設定（後書き）

あらすじの場面にいつになったら書けるのか……。次は本編です。

## 第一章二節 李氏朝鮮脱出（前書き）

歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章二節 李氏朝鮮脱出

### 2 秀秋の立場

陽がテラテラつと無責任に光を地にいるものに与えている中、思考して悩む若い大名がいた。

（さてさて・・・何の用なのだろうか。）

小早川秀秋は傍らに付きいる柳生宗章を共にしながら、廊下を歩きながら思考する。二人は、同じ青い平服をビシッと綺麗に着こなしている。それがこの若干の暑さが、涼しくさせている気がする程の爽やかさだ。秀秋は思考に夢中なのか、時より他の者が秀秋達と反対方向から交差の表情も、全く気にせずただ思想する。空腹や暑さ、ギシギシとあまりいい板を使っていない廊下から出る足音も無視だ。ただ顔を下げ視線を廊下に向け、右人差し指を眉間に置いて思考中である。実に危険な歩き型だ。これでは、反対からの者が交差した時にぶつかりかねない。だが、秀秋は一切ぶつからない。

何故、交差してもぶつからないか。それは、宗章が前に出て先頭を歩いているからだ。宗章は眼光を鋭くしながら堂々と歩いている。スーツスーッと足音の無い歩きが、威圧感を絶え間なく与えている。しかも警戒していて前だけをみて交差する者達にギリリッと睨む。

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

宗章は無口で無駄がない。宗章が歩んでいる時、秀秋には一言も声をかける所か、黙視すらない。

それは宗章が、秀秋の思想中は声をかけて邪魔をしないのが最上

なことつと思考して結論をだし、邪魔が入らぬようにしなければつと、前の交差してくる者達を警戒しているのだ。

無論、重要そうなことを話す人ならば話させる。宗章は、武者修行をしてきたから人相や経験、そして勘で区別出来ると自負してるので、その時は秀秋に話させる。だが、そんな人物などいる訳がないつと宗章は断言出来る。・・・いや、秀秋の家老などの上層部は、誰も断言出来てしまうのだ。

それは、交差していく者達が物語っていた。どの顔も侮蔑や嘲笑、どれも小馬鹿にしている顔ばかりである。どの顔も醜悪である。こそこそと二人で歩いてきた者達は、耳打ちをして嘲笑する。仲には、指を秀秋に向かって、何の躊躇なしで指す。正直、人にしていい態度ではなく、大いに不快にさせるものばかりの態度である。だが、交差していくかの者達は、それが当たり前つといわんばかりで、悪そびれたことは感じてない。

こんな態度を取られるのは何故か。それは、ある事件が関係している。現に、それまでの秀秋の評価は、表面上では良いものだった。ある事件に対して当初は賛否両論であった。だが、いつしか悪い印象しか与えなかった為に、秀秋の評価は地に落ちたのである。

李氏朝鮮との講和を破棄した秀吉は、李氏朝鮮の再出兵に対して、秀秋に現地総大将を命じた。一五九七年のことである。秀秋自身は、辞退を何度も進言したが、秀吉は聞き入れられなかった。最終的には養子となつていている秀秋に、義父であつた小早川隆景と義母の問田の大方が説得して、渋々承知した。秀秋はこの二人には、無条件降伏するしかない。何故なら、返しきれない恩や愛情を感じているからこそ、義を感じて固辞出来なかった。一方の養子親の二人も、内心申し訳なく感じていた。それはこの二人も、この秀秋を愛していたからであり、こんな無駄な戦の総大将になつてほしくなかった。だが、秀吉に逆らうのが、どれ程の危険かは重々承知していた。だ

から、二人は説得したのだ。

こうした経緯で、後の慶長の役と呼称される戦の現地総大将になった秀秋だったが、苦労の連続だった。前回は奇襲に近い形だったので、李氏朝鮮側は警戒感がまるでなかった。だからこそ、破竹の快進撃が続いたのだ。しかし今回は、李氏朝鮮側は再出兵を読んでいた。だから李氏朝鮮側は各地に、警戒網を布いて警戒していた。だから上陸してから、日ノ本軍は苦戦した。暫くするとまた、民衆が武力蜂起した。今回は、武器を李氏朝鮮側が提供していた。だから、前回とは比べものにならない程、強くなっている。更に、李氏朝鮮側の水軍が政戦の混乱で一時的に弱かったものの、政戦の混乱が収まると日ノ本軍を大いに破った。これで、また兵糧不足に陥ったのである。また明からの援軍が、今度は早急に派遣するなど八方塞であつたのだ。

秀秋はこれに対して様々な対策を実地した。民衆からの財産強奪禁止や強姦の禁止。職人、商人の保護。襲って壊してしまった村や町の再建。納税は免除。医師は優遇して民衆、兵の順で診させる。食料の困っている民衆のはなるべく自分たちの兵糧から分け与える。山賊や海賊などの賊などから民衆を護る為の警備隊の結成と見回り。翻訳者を一番優遇して各地にふりあてる。下人などにも働いたら賃金を与える。民衆に無闇に武力であたることを禁止。民衆の要望が応えられる範囲ならそれに答える。軍はあまり深入りせずに着実に進める。補給線には必ず五万石以上の大名が維持すること。城攻めに対しての村や町を火で燃やすのを禁止。敵将は各地の判断で任す。ただし、敵将の処置後には必ず秀秋に報告すること。・・・などなどである。

これでは攻め入った日ノ本軍は、財政破綻や食料不足をしかねないものであつた。現に出兵してる大名達はかなり渋った。しかし、

秀秋はこれを厳命にした。秀秋は厳命を守れなかったり、不服ならば、太閤殿下に申し立てをしてみよつと脅すと、渋々だが誰もが従った。

この対策の為か、何度も物陰から民衆の奇襲にあつたり、民衆がとんでもない要求があつたりなどの混乱が生じた。しかし、保護する対策を見た民衆が、徐々にであるが日ノ本軍に協力をし始めた。その頃か、徐々に秀秋の評価も良いものになっていった。

しかし、ある戦によつてそれは台無しとなつてしまう。一五九七年十二月の出来事だつた。蔚山城に明、李氏朝鮮の連合軍約六万が城を包囲したのだ。ここには、浅野従四位下左京大夫幸長、加藤従五位下主計頭清正等が、約一万の兵で籠城して抵抗。まだ、出来立ての新城だつたのが災いしてか、兵糧の蓄えが極めて少量だつた。その為に、兵糧が直ぐになくなつた。その為に、この籠城の間の兵達は、兵糧が無くなるとそこの雑草や軍馬を食し、水は尿すら飲んで、餓えを凌いでいた。

この時、秀秋は釜山城を守備していた。そこは日ノ本軍、重要兼最終防衛拠点地でもあつた。ここから、秀秋が日ノ本軍を指揮してゐるのだ。秀秋は蔚山城籠城の報告を聞くと、直ぐに大広間で軍議を開いた。軍議を開くなり、秀秋は開口一番こう明言した。

「蔚山城に籠城してる大名達を討ち死にさせてはならん。特に加藤殿だ。直ぐに援軍を送る。」

これには全武将が承知。蔚山城は日ノ本軍の重要な城だ。だが、最も急ぐには別の理由がある。

それは、清正は李氏朝鮮側から大変怨まれてからだ。日ノ本軍一の主戦派で邪魔な者にはどんな者でも切り捨てている。更に李氏朝鮮側の二王子を生け捕りにしたりつと清正許すまじき者というのが、李氏朝鮮側の怒りが心中にある。現に秀秋の政策で、数少ない味方

の民衆は清正だけには庇護を受けたくないとの申し出は多くあった。李氏朝鮮がこの好機に全力を尽くすのは、目に見えていた。

迅速な決定を下した秀秋は自らの出陣も表明した。これには皆が驚愕した。だが、秀秋は釜山城を出陣した。

この他にも毛利右正五位上京大夫秀元や黒田従五位下甲斐守長政らと共に約三万の兵が、丁度一五九八年正月になって出陣した。

この時、秀秋は千五百程の自兵を置いている。留守大將は小早川軍の筆頭家老、稲葉正成である。更に小早川軍の鉄砲のほとんどである、七百挺あまりも残している。

軍を進めた秀秋等は明、李氏朝鮮連合軍と対峙。そして戦では城に籠城していた清正等が迎撃をし、挟み撃ちをして撤退させた。この時、秀秋は総大將なのに、自ら先陣を駆けて十数の將の首を取った。顔こそ傷はなかったが、矢が右足、左肩に一本、腕に槍で受けて負傷、甲冑はボロボロになりながらのことであつた。この武勇に各武將は驚愕した。秀秋からすれば、若輩な総大將が、自ら武働きをしたら、各武將の誇りを刺激させて、我武者羅に奮起すると読んだからである。

だが、秀秋はこの後直ぐに、日ノ本に強制帰国させられる。しかも小早川軍全軍である。このことに秀秋は不審がつたが、従つた。大阪城の大広間で直ちに豊臣太閤秀吉に会わされた。その服装は悪趣味に金が高い服だと主張している金の平服だ。最上座にいる秀吉は扇を右手に持ち、右肩をポンポン叩いて座しているが、何故か憤慨している。

その傍らには石田従五位下治部少輔三成がいた。秀秋に冷たい目を向けてながら上座に座している。青の質素な平服がその冷たさを煽る。三成の右手には何やら紙を持っている。秀秋を中央を空けて、左右に座している将も、何故か冷たい目だった。

（何だ、この目は。）

秀秋には全く理解が出来ない。だが、いい話ではないことは分かった。心なしか、秀秋の青色の平服が顔色に写ったように見えた。

仰々しく名を名乗り一通りの礼法が終わると本題に入った。つつーと二月なのに汗が滴る。秀秋は意識的にかなり緊張していることに気付いているが、どうしようもなくただ左右に別れて座する将の中央にポツリと一人座している。そしてこの場には誰も味方がいないことに余計緊張感が出てしまう。

三成が言い始めた。どうやら李氏朝鮮での活動内容である。朗々と囃むことなくいう三成は、事務的な印象を周りの将が与えたが、秀秋はどうも誇称くさいと感じた。三成の内容が、一つ一つが過小評価しすぎであり、まるで李氏朝鮮の日ノ本軍は、木偶であり意地っ張りだと言っている内容であった。

秀秋は不快に思うと同時に憤慨した。こちらはやりたくもない現地総大将をしているし、日ノ本軍はよくやっている。講和中の休戦前の戦とは違い、李氏朝鮮に出兵してる大名達は、過大評価せずに事実しか報告していない。オロオロと出来もしない理想論言い、秀吉に諫言をせずにただ従っている、文官達の一人である三成に、秀秋はこの時心底腹が立った。

三成の発言は更に先日蔚山城の戦に入った。この時になって三成は詰るようにいい始めた。総大将が重要兼最終防衛拠点地の釜山城を放棄、自らが足輕の如く戦う軽率な行動は総大将とはとても思えない行為は罰するべきであると結論つけた。

これには秀秋は反論した。放棄はしてはいない。千五百程の自兵を残していること。将として筆頭家老の稲葉正成を大将にしたこと。戦働きは確かに軽率かもしれないが、相手が圧倒的に数が多かった。その為、誰もが本気になって、戦わなければ敗北は必至であった。なので、総大将の私が戦働きをして奮い立たせたことなど告げた。

（こんな文官如きがいくら口でいっても太閤殿下なら分かる筈だ。）  
秀秋はそう思い込んでいた。三成は総大将になったこともなく、武功すら大したことがないのである。三成の戦下手は、日ノ本で知らない者はいない程であった。だから、武勇について語る三成に秀秋は舐めていたのだ。

だが、全ての発言が終わった秀吉の決定は始めから決めていた。秀吉は、秀秋に冷め切った顔をして告げた。

「総大将解任、越前北庄十五万石に国替えせよ。」  
秀秋は顔面蒼白になった。体も平伏させてから、震えている。惨い、つと非難を叫ぶのを、秀秋は何とか飲み込んだ。この決定に大広間にいた者達も騒ぎ出す。少々、厳しすぎる処罰だったからだ。

実は秀吉は何とか秀秋を処分出来る出来事を探していた。それは幼い我が子の秀頼が危なくならないようにしたいが為だ。

秀秋は秀吉の正室である北政所の甥が出生であり、一時跡取り候補にもなったからである。既に豊臣従一位関白秀次は消した。残る秀秋だけだと思い、何とか処分したかった。

三成は早期和睦を諦めていないので、李氏朝鮮で活躍されては困る。それには秀秋を一時叩いて戦意を挫く必要である。この二人の思惑が見事に一致したのだ。

流石に三成が顔をサツと青ざめた。叩けばいいだけで秀吉は嚴重注意して、その後は自分が秀秋に李氏朝鮮に対して釘を刺すのが頭で計算をしていたのだが、ここまで厳しくなるとは思っても見なかった。しかし、今更になつてはどうにもならない。

（何故……。この怨み、忘れはせんぞ。）

秀秋はこの後は二度と秀吉及び三成を信用や好意を向けるものかと密かに誓った。

その後、越前北庄十五万石の国替えは五大老の徳川正二位内大臣

家康ら大名などの取り成しもあり特別に却下した。だが、総大将は同じ五大老の宇喜多従三位参議秀家が就任した。

秀秋は格下げされたが、これが当たり前という風潮が世間を占めた。これは、秀吉が世間操作をしたのもある。だが、これは焚きつけである。いい若造が総大将になって、しかも高い領地を要していること。また、戦働きに昔は動けたと、年老いた老将大名などのが羨ましく思ったこと。更に秀吉が裁いた冷徹な態度に寵愛が完全になくなったことで、血縁でも堂々と悪口が公言出来るようになった。これらの嫉妬、妬み、憎悪などが一気に火がついたのだ。秀吉もこれで秀秋は潰したと納得した。

そして現在、秀秋は一大名として李氏朝鮮に出兵している。皮肉にも釜山城の守備を任されているのだ。ここは安全だった。戦の前線ではないのもある。だが、大きな理由は、民衆が全く襲わないからである。

秀家は秀秋の対策を悉く変えた。民衆などにも全く心にとめない対策を出した。その為に味方をしていた民衆は、一気に態度を硬化。一切協力をしなくなってしまった。

しかし、協力した民衆も秀秋には恩義を感じたようで、大変残念だ・・・などといった無念さを書状で書し、送っている。秀秋もそれに対して同じ気持ちであった。数少ない味方してくれた民衆が、日ノ本軍のいる地から離れる際に警備として秀秋は兵を出している。数少ない最後の施しであった。無論、これに対して多くの大名から非難轟々を受けた。

だが、秀秋はこれに一切弁論はしなく、更に僅かな兵糧と金を渡している。これには民衆も大いに喜んで受け取った。これしか秀秋にはもう出来なかったのである。

このこともあって民衆は秀秋だけは手を出しにくく、また前線でもないので襲わないのだ。

また、今まで従ってきた大名達は秀秋のことを全く聞かなく

なった。元々、嫌々政策に付き合っていた大名達であるから仕方ないであろう。しかも、今まで負担が多かった秀秋のやり方を公然と否定し馬鹿にするようになっていた。不満が爆発したのである。

だが、そんな中でも秀秋は、現在も李氏朝鮮に出兵を続けている。命は、従わなければいけないからだ。

（思いつかん・・・。）

視線を戻して、秀秋は思考がまとまらなかった。使者の来訪の理由である。戦況は硬直状態だし、叱咤かとも思った。だが、これは今までそんなことは、一切なかったことなので取り消した。その後も色々とは案が出たが、決定打がない。

（考えても仕方ないか。なるようになれか。）

秀秋は仕方なしに、そう結論つけると思考を止めて、姿勢を前を向けて足取りを速めた。ゴチャゴチャ思考してても、結局は命には逆らえないのだ。なら、命を早く聞いた方が良いのである。

それに宗章もまた、歩みを速めて、先頭を進んで行った。警戒心は解いてはいない。宗章は秀秋の護衛兵であり、近侍である。それが宗章の役割であるから、宗章にとっては当たり前なのだ。

まもなく軍議が始まるうとしていた。

## 第一章二節 李氏朝鮮脱出（後書き）

秀秋以下の李氏朝鮮出兵のほとんどの大名武將と使者は対峙する。使者は果たして大名武將を説得出来るか。その時、一人の男が立ち上がる。

次回、転換！関ヶ原！第一章三節李氏朝鮮脱出『3 大名と使者  
と思惑と・・・』

「少し、待たれよ・・・。」

## 間章 誓い（前書き）

際どい表現があるので、注意して下さい。これは、大阪城に秀秋が呼ばれ、減封を言い渡された直後のお話です。

## 間章 誓い

### 2・5 古満の決意

天気は憎憎しい程の晴天が出ている。冬の小休憩を宣言しているのか、気温も日が当たると暖かい。雪が地に落ちていて、少しの地の色が付いているのが少し滑稽だ。その雪からは、小休憩は宣言したがまだまだつといった目線がある。どうやら、冬からの監視を命じられたようで、命をしっかりと守っている。

そんな中、小早川秀秋はフラフラと砂利道を歩いている。秀秋が向かうのは自身が大阪城であてられている屋敷だ。顔面が蒼白で、目は虚ろで視線が定まらない。歩きの速度も一定ではなく、紙切れが空中に舞ってもここまで酷くはない動きをしている。青い平服が悲しく似合ってしまったている。交差してくる者達が、時々声をかけても生返事しかない。

秀秋がこんな状態なのは、先程の沙汰が効いているからである。先程の沙汰とは、秀吉の李氏朝鮮の現地総大将解任。そして国替え命令である。秀秋は筑前を中心に、三十万七千石の領地を持つ大名だ。秀吉は、越前北庄十五万石に国替えを命令したのだ。事実上、減封である。その割合は、丁度半分に近い。

秀秋は絶望した。別に現地総大将を解任されたからではない。寧ろ、解任したのは嬉しかった。元々、乗る気でなかったし、身分不相応だと思ってたからである。だが、国替え命令は最悪であった。

去年死去した、義父の小早川隆景に申し訳がたたなかった。それに、家臣達や正室の古満にも、何を言われるか怖かった。だからといって反論出来なかった。絶対命令である。嘗て、国替えを拒否して家を潰された大名もいる。

秀秋には先頭を歩く柳生宗章、秀秋の傍らにいる右筆の村上吉正がいた。宗章は前を行く者に警戒感を出しつつ、歩いていく。だが、いつもより眼光が鋭かつたし、顔も強張っている。一方の吉正は、特に珍しく嫌な笑みがない。吉正は秀秋に苛立ちながらも、心配なのか顔を歪めている。吉正は秀秋に声をかけようとしたが、声がかけない。あまりに呆けているからである。呆けているが、今の秀秋からは目を離したら、何をするか分からない非常に危険な状態で、均衡してるのが見て分かるからだ。そんな危ない状態に声をかけて、均衡が崩れるのが吉正は怖いのだ。

「おい・・・。」

吉正が仕方なしに宗章に声をかけた。暗い性格を現してる黒の平服だが、秀秋の右筆であり、忠誠心はある吉正はこの状態を何とかしたかった。だが、それには原因が分からなければ解決出来ない。待合の間までいった宗章なら知つてると、吉正は思ったから聞いた。因みに、吉正は大阪城で伝手から、最新の日ノ本の情報を聞く為に、見回っていた。

「何が殿にあつたのだ。」

$\Gamma$

• • • • • • • • • •

$L$

前を向いたまま宗章は力なく首を横に振った。吉正は深いため息を落とした。元々、無口の宗章からの話はあまり期待してないが、零はキツイ。こうも情報がないと、手のうちようがない。その宗章の顔は二人に見えないが、質問に答えられない悔しさに、強く唇を噛んでいた。

大阪城の大広間が基本的に大名しか入れない。だから、大広間で  
の出来事を宗章が知るには、秀秋から直接聞かなければならない。

だが、秀秋が大広間から出た後に合流した宗章に何も声をかけていない。だから、宗章は秀秋の身に、何が起きたのか分からなかった。

（しかし……。）

宗章は大広間から出てきた、秀秋の表情を見て啞然とした。凄い衝撃であつた。

秀秋は阿呆のように口を開き、ただ虚ろな目で遠くを見ていた。足取りも今よりも酷く千鳥足で小幅な間隔だつた。手も小刻みに震えていて、前後に少し大げさに腕を振っていた。そう、まるで魂が抜けかけているその者の、表現体を秀秋が示していたのだ。

（……………）

宗章は次に憤怒した。

両手は握り拳のまま、握力を本能のまま使つて震えていた。腰にあつた日本刀を抜いて、大広間に乗り込んで、秀秋のこんな、死者にも勝るやもしれない顔にした者を切り捨てた。自分こそが秀秋の身を守る剣だと自負しているのに、この様は何なのか。大広間にいるであろう武将達にも腹が立つが、自分の不甲斐なさにも腹が立つた。

だが、秀秋にそんな宗章を見ている余裕はなく、またフラフラと歩き始めた。慌てて、宗章は秀秋を追い、その後は同じく近くに待機していた吉正と合流し現在に至るのだ。

（どうしようどうしようどうしよう……。）

秀秋の現在の心境は、あまりの言葉の考えすぎで混乱を極めた。恐怖、憤怒、自愛、絶望、不安、無念、後悔、怨憎などが次々と心に湧く。どれも負の感情である。秀秋には正の感情など、今は全くない。

次に家臣達の親しい顔が浮かびあがり、秀秋にただ笑いかけてい

る。その笑いに秀秋は逆に恐怖する。何故、そんなに笑うのかが、秀秋には分らない。隆景が天に旅立ってしまった、秀秋が当主になった時に、嫌で多くの家老や武將が出奔したのを秀秋は刹那に思い出す。あの時は自分の不甲斐なさが目立ったが、今回も国替えが決まった以上は、家臣達の領地を半分に減封しなければならぬ不甲斐なさである。果たして、家臣達が付いてくるのだろうか。

（古満・・・・・・・・）

更に秀秋の愛する人が浮かんだ。

政略結婚だったが、今でも仲は親密だ。暇があればいつも二人でいるし、その二人が出している独特な雰囲気には、家臣達も苦笑いを浮かべて近寄らない。・・・古満が特にニコニコ笑いながら、家臣達をチラリと見た目が家臣達は、何故かヒヤリと身震いをするのが嫌なだけなのだが。古満のあの満面ではなく、ひっそりと綺麗に微笑む顔と体、否、雰囲気からだろうが、秀秋が安心感を持たせて、全てを癒す何ともいえない匂いが秀秋が特にお気に入りだったお気に入りには膝枕は秀秋曰く、最強の組み合わせであり、何もしたくなくなるのである意味最強の敵と家臣達に話で、何ともいえない顔をさせた。このぐらい仲が親密だったが、初の国替えという減封に、果たして古満は秀秋にどのような感情を持つのだろうか。

（秀秋様なつて嫌いです。お暇をいただきます。）

「・・・・・・・・つつつつつつつつ。」

妄想で具現化した古満が、冷たい能面で、はき捨てるような口調で言ったのを、秀秋が想像で聞いただけで体が震えた。

それに胸が急に締め付けられて呼吸が困難になった。声で苦しみの一言すらでないで空気だけが少し、口から苦痛の音を奏でながら漏れていた。頭も急にガンッと槍を兜で突かれた時よりも痛い苦痛が出た。具現化した古満の一言は、秀秋を恐怖のどん底に突き落として苦しめた。

「と、殿。どうなされた。」

吉正が急に立ち止まった秀秋を見た。秀秋の体が崩れ落ちそうになっているのだ。そして様子の異変に、思わず叫んだ吉正は、慌てて秀秋の体を支えた。それに合わせて宗章も振り向いて、秀秋を見て戦慄した。

秀秋は前のめりになって、胸を押さえてガタガタと体を震わしている。齒もカチカチと恐怖の音を奏でている。顔は先程から見た中では、一番悪く白さだけが目立っていた。汗を流して入った目は、ギョロギョロつと大きく見開いている。交差している者達是不審そうに足の速度を緩めてチラチラと見ている。

「・・・・・・・・あつっ・・何でもない。」

か細い声で秀秋はポツリと呟いた。どう見ても何かあった顔だが、二人は何も言えなかった。秀秋の雰囲気、その質問に拒絶をしていたからだ。

秀秋は吉正の手を借りて、何とか立つと再び歩く。甲冑などより、遙かに重い足を必死に引きずる。先程も古満の偽りの拒絶は、一瞬の内に心の臓を貫いたのかと錯覚させた程の痛みだった。だが、実際はそんな一瞬な痛みではなく、半永久に痛んでいる。

（どうしようどうしようしよう・・・・・・・・・・・・・・・・）

秀秋が死者に勝る顔をして思想している内にあてられた屋敷に到着してしまった。どう辿り着いたかは秀秋は覚えてない。それ程、秀秋の気持ち沈んでいた。

門番にも秀秋の心配をされたが、生返事の秀秋を尻目に、先に屋敷の門の内を駆けて入った吉正は、古満を早く秀秋を会わせに行動をおこした。少し遅れて、二人が少し古い玄関をガラガラつと力ない音をさせながら、戸を開けるといつもの迎えがない。ガランとしていて誰もいない。秀秋の屋敷は古風な造りで、飾りつけのない実用重視のものだ。屋敷の広さ、大きさも大した物ではない。最も、秀秋自身は大変気に入ってるから、周囲がなにを言おうとも気には

していない。

暫く二人は哑然と立っていると、先に入った吉正が玄関に現れた。少々、汗を額から滴り落ちてるが、息は荒くない。それにいつもの調子に戻ったのか、ニヤニヤと不敵に笑っている。どうやら、この男が屋敷に、何らかの指示を出したようである。だから、ここには誰もいないのだろう。

「古満様がお待ちしております。」

吉正の言葉に秀秋はビクツと体を震えさせた。吉正の態度は変わらない。

吉正は先に入って、屋敷の居る者全ての人に対して、問答無用に部屋 of 監禁を言い渡した。秀秋の様子を見て、動揺しないようにする配慮である。また、古満には秀秋の詳しい状況を伝えた。古満もこの吉正の指示に賛同し、直行で夫婦の寝室に連れてくるように命じた。

秀秋は少しは覚悟を決めたのか、無言でノロノロとまだ新品に近い草履を脱ぐと、顔を青ざめたまま廊下を歩き始めた。足取りも重そうである。

宗章も付いていこうと、奥に続くだろう始めの板に、尻を座して草履を脱ぎ始めた。だが、その途中で吉正が、宗章の右肩を叩き、首を横に振った。そして、吉正はポツリと呟いた。

「古満様に任せようではないか。」

秀秋が向かうのは夫婦の寝室だ。そこに古満がいるからである。

途中で庭が廊下から観えたので歩きながら、秀秋は何となく庭を観た。雪が降って残っていて、木の葉や石などに我が物顔をしている。しかし、それに抵抗しているのか下の方にある木の葉が、下から雪を刺し伸びている。だが、そんなことはお構いなしと急に、上の木の葉から雪が落ちてきた。さもこれで雪が援軍に高笑いしたが、あまりの重さに自らバサツと地の落ちてしまった。一方の池にあっ

た小さい池は、凍ってなく鯉が寒さに負けずトロトロ泳いでいる。先ほどの落ちた雪の一部が池に落ちてきたのに、勘違いか口をパクパク開けて食べている。餌ではないのに気付いたのか、一瞬嫌な顔をして、鯉は雪が落下した場所から離れていく。庭の自慢の鹿威しがカコーンつといい音になった。その瞬間にまた雪が、木の葉からパラパラと落ちていった。

ギシギシと廊下を歩いた秀秋は遂に、寢室の出入り口の襖に來た。ここまで庭を観たせい、少しは落ち着いた。ゴクリツと喉を鳴らす。緊張からかやけに喉が渴く。いつもなら躊躇なく襖を開けるがそれが出来ない。手を襖の取っ手口にあるへコミに置く。だが、まずは確認を秀秋はしてみた。

「秀秋だが……。古満、入ってもいいかな。」  
「はい。」

暫し立ち竦んでた秀秋に、襖の向こうの寢室にいるだろう古満が優しく声を返した。秀秋の声は、自身が震えていることが良く分かった。そんな自身に自嘲しながらも、古満の声に少々ホッとした。

だが、直ぐには秀秋は入室出来なかった。襖に手をかけてるのだが、そこから体が震えて、呆然と立っている。外が寒いのだが、一切秀秋は気にする余裕がない。だが、古満は一切の声をかけない。古満は、襖の前で立つてる秀秋をじつと見守る。夫の現在の心中だと、急かすと不味い。今後の互いの話に支障が出る恐れがあるからだ。

どれだけの時を立つたろうか。秀秋の吐く白い息が秀秋自身にかかる。鼻から少し出た水を秀秋は拭った。いつまでも古満を待たす訳にはいかない。秀秋はよしつと気合を入れて、スーッと襖を開けた。

夫婦の寢室は実に簡素である。押入れと化粧道具などが収納出来

る机。その机には少し小さな鏡が立てかけてある。広さは八畳である。窓は入室出来る戸の反対にある。

古満は一組の少し大きな布団の上にちょこんと座していた。普段着でその淡い橙色の着物は、かの人の容貌の美しさを否応なく引き立たせる。布団は、普段は無論だが押入れの中だ。だが、秀秋が尋常な状態なのを聞いた古満は急いで布団を敷き、そのうえで正座してただただ待っていた。

寝室に一步入った秀秋はそつと襖を閉めた。秀秋は布団に座している古満と、互いと向かい合う形で座した。向かい合った秀秋に対して、古満はそつと三指をして布団につけて深々と平伏した。

「お帰りなさいませ、秀秋様。今日も生きた顔を見て古満は嬉しゅうございます。」

そう言う顔と顔をあげた古満は微笑した。綺麗で澄み切ってる顔である。古満が本気で秀秋の無事を喜んでるのが分かる。

これで秀秋の緊張感は、プツンと切れた音を自身が聞いた。

秀秋を愛してる態度に参ったのである。秀秋が一番弱い、深い愛情を惜しげもなく出してる古満に、お釈迦様の姿を見た気がした。

秀秋は勢いよく、古満の体に頭から飛び込んだ。古満は痩せすぎではないものの、体重自体は軽い。秀秋の体重や勢いに少し体勢がずれたが、決して正座を止めようとはしない。

秀秋はうつ伏せになって、古満の小鹿のような足の太ももに、グリグリと顔を左右に振った。そんな秀秋に対して、古満はソツと右手の手のひらを頭に乘せて撫で始めた。瞬間、ビクツとした秀秋だったが、それが合図のように小さく嗚咽を始めた。我慢してたのか、秀秋の嗚咽は、一切止まる気配はない。

古満は秀秋の行動に微笑したまま、今度は左手の手のひらで背中をポンポンと軽く、ゆっくりとした一定間隔でたたく。まるで、親が子をあやす姿に似ている。秀秋は古満の行動に、うつ伏せのまま更に嗚咽を強めた。両手は小さいながらも、どっしりとしている尻

をやさしく掴み、足は少しパタパタと上下運動を布団の上でやっている。

暫くの間、秀秋は嗚咽をしていた。だが、意を決したのか秀秋は話をし始める。

「も、もうだめだ。だれもが、わ、わたしを、す、すてる。」  
「……。」

秀秋は嗚咽しながら、必死に心中を吐露する。秀秋の発言は嗚咽にせいで、聞き取りにくかった。

少し古満は眉をピクツと上げた。古満は心底から秀秋に惚れこんでいる。秀秋と古満が結婚して数年経つ。古満は秀秋に対しての愛しさは、年が経つと共に強くなってるつと感じてた。だから秀秋を捨てることなんて、絶対にありえないだと古満は心中で断言した。

古満は直ぐに微笑の表情に戻した。秀秋は負の感情に敏感だから、それを悟らせない為だ。それを感じさせたら、秀秋が遠くに行く気がした。それは古満にとって、一番の絶望である。だから微笑しながらも秀秋からの心の悲鳴を、一言も聴き漏らさぬように集中していた。そんな古満の心境が今の秀秋に分かる訳はない。秀秋は古満のその愛しさを前面に出してる態度と、古満の癒しの雰囲気になんと飾りのない言霊を続けた。

「わ、わたしには、な、なにもない。のう、りよく、も、にんげんせい、もだ。そ、そし、そして、ゆい、つ、ちい、もへった。も、う、わたしに、は、な、にも。み、みなはわ、たしをしつ、ぼ、うしてすて、る。わ、わ、たしはひと、りはい、やだ。も、ういや、だ。だ、だから。」

わた、しをみすてな、いでください。わた、しをみてください。  
わたしのそば、にいてください。」

秀秋は古満に懇願した。秀秋はもう自分には何もないので、大事

な者を繋ぎ止めるには絶るしかない結論つけた。その無様な格好に、周りが嘲笑しようが関係ない。ただ、全ての地位を失っても古満とだけは離縁したくなかった。だから秀秋は必死に絶る。秀秋の涙で既にボロボロと濡れてる古満の膝の部分が、秀秋の哀願の涙で更に濡らした。

一方の古満は最後の一言で息を呑んだ。キューッと心が締まる。少し、歳にしては大きい乳房も身震いした。その心は二つの気持ちに締まったのだ。

一つ目は、秀秋は秀吉の七色光と言われ、いつも付属品としか見られていなかった、幼き過去がまだ秀秋を苦しめることだ。愛しい秀秋の暗き闇にいる、苦しい言霊に心が切なく締まる。

二つ目は、秀秋がその闇に飲まれようとしても、古満だけは離さない独占欲である。確かに、その姿は醜い姿なのかもしれない。だが、こんなに愛されていることが古満は嬉しかった。その女としての悦びに心が締まった。

（秀秋様……）

秀秋を愛している古満はそつと唇を噛んだ。そうしていると黒く大きな右目から一滴の涙が頬を伝って秀秋の頭にぼつんと落ちた。秀秋はこれに気付かなかった。

古満にとっては秀秋は秀秋である。どんな状況に陥っても秀秋をただ一人愛す。秀秋の全てをこれからも、一生涯に賭けて古満は愛していく。その愛する夫が泣いているのにこんなことしか出来ない自分が悔しい。

この瞬間古満は例え、小早川家が改易されても自分だけはこの秀秋と、命燃え尽きるまで一緒に添い遂げる決意をした。誰の命であっても、それが例え太閤が離縁を命じ、それを守らず処刑されてもこの気持ちだけは忘れない。いや、忘れてはならないと……。

「秀秋様。」

そつと古満は言うつと秀秋を仰向けにした。この時の秀秋の表情を古満は一生涯、忘れることはなかった。

秀秋は目や鼻から水が出ていた。口も水が出ていてグシャグシャな顔つきだ。嗚咽していて顔色も赤い。恥ずかしいのかしきりに目や鼻の水を右手で擦り落とそうとゴシゴシしている。だが、鼻は何とか止まったが、目の水は止まりそうもない。あまりにも情けない姿だった。

そんな秀秋に古満は顔では一切出さなかったが、チクンと胸が痛んだ。やはり秀秋の心の傷はかなり深いのを想つてのことだ。だが、古満は秀秋の心の傷を癒さなければならない。自分の心の傷など二の次である。

古満はそつと秀秋の頭を今度は左手でゆつくりと撫でて、右手は色んな水で濡れた頬に手のひらを置いた。秀秋の頬は色々な水で少し冷たいし、汚いのだが古満は気にしない。秀秋もこの行動に嗚咽が止まらないものの、慌てて行動を止めさせる言葉を吐いた。

「き、きたな、いぞ。」

「秀秋様は汚くありません。」

ピシヤリと古満は秀秋の言葉に反論した。秀秋の全てを愛す古満にとって、このようなぐらいで汚く感じない。

その証拠か、言った後に古満は自分の右手を口に運んだ。古満は秀秋の色んな水が付いた手を、美味しそうにチュパチュパと舌で舐め始めた。実際、古満にとって本当に美味しいのだ。

これには秀秋が一瞬だけ嗚咽が止まった。古満があまりにも妖艶で美しかったからだ。十分に秀秋の味を堪能した古満は、右手を一旦着物で擦って、また右頬に手のひらを置いて言葉を続ける。

「この通り、汚くはありませんよ。」

「・・・うん。」

古満は秀秋に確認させた。その妖艶さに、秀秋の嗚咽もかなり治まってる。じつと潤んだ目をしてる秀秋は、古満を見惚れる。古満は秀秋にただ微笑して見る。

古満は微笑を止めずに秀秋を見ていたが、静かに語りかけた。今度は、自分が心中を語る番なのだ。だから、言霊には愛しさが溢れていた。

「私が愛しているのは一人です。その人は「秀秋様」です。そして、私はその人の全てを愛しています。今、私が膝枕をしているのは誰でしょう。」

「……古満。」

「今、私が右手の手のひらを右頬に置いてるのは誰でしょう。」

「……古満。」

「今、私が左手の手のひらで頭をさすっているのは誰でしょう。」

「……古満。」

「今、私が話をしている人は誰でしょう。」

「……古満。」

「では、最後に今、私の瞳に映っている人は誰でしょう。」

「古満。」

秀秋は途中でまた目から水が湧き出てきた。既に目は兎のように真っ赤だ。水は古満が想う心が秀秋に伝わったからであり、歓喜の水だった。古満はこんなに秀秋を想っている。その心に秀秋は心が揺さぶられた。古満はここが正念場と言葉を一瞬選んだ末に、本心がポンと言霊になって出た。

「私は「秀秋様」を愛しています。だからここに、一生涯を賭けて誓います。」

私は「秀秋様」を見捨てません。私は「秀秋様」を見ます。私は「秀秋様」の傍にいます。」

古満はニツコリと今度は太陽のような晴れやかに笑った。その笑いには、並々ならぬ決意を固めた美しき『女』であった。古満の決意に秀秋は完全に救われた。ここまで想われてるのに、疑うのは失礼

だ。秀秋は歡喜の涙を流しながら、久しぶりに晴れやかな笑みが出た。

秀秋の笑みを見た古満は、そつと顔を下げて接吻をした。その瞬間の古満の匂いが秀秋を更に癒した。その瞬間は短い。だが、その瞬間が互いに長く感じた。秀秋は着物の中に手を入れた。着物の中は古満の熱で温かい。うんつと古満は口で妖艶に吐く。

「今日は暫し大人しくなさって下さい。私が秀秋様を癒したいので、  
。。。」

耳元でそつと呟いた古満はまた接吻をする。古満の手も下の方に向かっていく。秀秋はそつと古満に溺れることにした。日の入りの日差しが二人を優しく灯っていた。

（どうやら殿は大丈夫そうだな。）

吉正はニヤリと普段の笑みを浮かべた。隣の部屋で吉正は耳がいいのである程度の事情は聞いた。所謂、盗聴してたのである。今はもう甘い睦言が聞こえて、こちらが恥ずかしくなる。これ以上は流石に何も聞けないし、聞くのは無粋だ。吉正は部屋をそつと退出した。（しかし、忠義心の疑惑と減封の可能性があるとは。家臣達に誓詞を出させて忠誠を誓わせば疑いも晴れるだろう。これは直ぐに用意させよう。それに殿の寝室、及びその近辺の立ち入りだけを禁止させて、そろそろ部屋からの出入りを解禁しなければ。嗚呼確か、晩飯は既に古満様が二人分の飯を押入れに入れてるから問題ないか。それにしても腹が減ったな。）

吉正が廊下を歩きながら今後の対策を思想したが、グーっとな腹が鳴った。もう夕方になっている。流石に昼も握り飯一個ではキツイ。思考するのも体力がいる。

吉正は出入り解除を早速一つの部屋の襖を開けた途端、いきなり胸倉を掴まれた。結構の力があるので、思わず息が止まった。その吉正の胸倉を掴んだのは、小早川家の筆頭家老である稲葉正成の妻、

福であつた。顔は強張つていて、少々青ざめている。だが、そこには並々ならぬ迫力があつた。

「もう良いですか。」

「は、はい福殿。ただ、寢室……。」

「寢室近辺には近づきませぬ。分かっています。」

福の迫力に怯えながらも応えた吉正を福はどけて直ぐに部屋を出た。だが、福の足元が少し可笑しい。何か頼りがなく、モジモジしている。

「どうしたのだ福殿は。」

「嗚呼、ずっと厠を我慢してましたから。」

侍女に訳を聞いた吉正はなるほどと頷いた。そして、吉正は間に合うことをいつもの笑みで、先程の恨みからか適当に祈つた。

深夜、ふつと古満は目を覚ました。寢室でお互い限界まで愛し合つた後なので、そのまま寝てしまつて二人とも裸体である。冬なのだから裸体では寒いはずなのに、古満は全く寒さを感じない。布団を入りながらも秀秋が右腕で腕枕をしているからだ。秀秋のぬくもりに、古満は自然と温まる。秀秋の寝顔と愛し合つて出た種がある場所を撫でると、古満は自然と笑みが出た。

（ずっと一緒に生きましよう。）

そつと右手を握つて想う古満に、秀秋が寝てる筈なのに笑つた気がした。

## 間章 誓い（後書き）

この後、つまり次の日には秀秋は誓詞や古満のお陰で元気になりました。次は本編に戻りますよ。

### 第一章三節 李氏朝鮮脱出（前書き）

歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

### 第一章三節 李氏朝鮮脱出

#### 3 武将と使者と思惑と・・・

秀秋は大広間の襖の前に到着した。既に一緒にいた柳生宗章は、別の部屋に待機する為に秀秋から離れている。秀秋は供を連れずに、ここにいるのである。

その秀秋の周りには暑い中、甲冑姿で武装している警備兵が二人が門番の如く立ち見張っていた。この二人は、秀秋に対しての笑いを必死に耐えている。どうやら、この二人も秀秋を馬鹿にしてるようだ。どうも秀秋の評価はかなり悪い。秀秋が激怒したら、かの者達程度の實力ではまず勝ち目がないのに上から目線である。自分達が、さも優秀であると錯覚している愚かな警備兵である。

（ええい、どうにでもなれい。）

秀秋はここで一瞬だけ思考した。石田三成がこの李氏朝鮮に使者を送ったのである。だが、やはり全く分からなかった。秀秋は、もうここは事の流に任せようと思い、意を決して襖を開けた。

「うお・・・・・・っ。」

秀秋は大広間に入室する第一歩に、派手に転んだ。部屋と廊下の段差に足を躓いて転んだのだ。思考してたことにより、足元を疎かにしてた為である。秀秋の青い平服がやけに目立った。秀秋に擦り傷はないようで、膝は床に激しく打ったが、血は滲んでいない。

これには大広間に座して待機していた、殆どの武将が失笑した。各、色々な平服の色がわらわらと不気味に蠢く。ただでさえ、評価が低く馬鹿にしている秀秋には、この格好は正に様になっていると大名達は感じた。この暑い中、大広間といってもあまり広くないし、

換気が悪く蒸し暑くなって服などに、汗が染み付いて大名達は気持ちが悪く、気分を害していた。しかもこの李氏朝鮮に三成の使者が来たことにも大いに不快だったので、秀秋の無様な姿は良い憂さ晴らしだった。

三成が、李氏朝鮮に出兵した殆どの武將に怨まれていた。理由として、日ノ本軍は死ぬ気で李氏朝鮮で戦をしているのに、三成は後方の安全な所で、指示をだしていることが気に食わないのだ。これだけだと理由としては弱い。三成は戦が下手なのだ。なので、大した武功もあげていないのに指示している点。それなのに、地位は五奉行の筆頭までなった寵愛の点。性格が高圧的で妥協がなく、嘘を嫌い情を政務などでは一切切り捨てる点。李氏朝鮮の武功を過大評価で嘘をついたとはいえ、その後はどんなことも過小評価で報告している点。これ等の嫉妬や憎悪が、李氏朝鮮の出兵大名の殆どが三成を嫌う理由なのだ。

秀秋はこの多くの失笑の中、転んだまま蹲っていた。意外に、痛かったからである。だが、痛さの中に急に、秀秋の頭の中で稲妻が走った。

（もしか、秀吉に何かあったのか。確か、最後に会った時は耄碌に成り下がった猿老人だったから……。これは可能性は大いにある。）

転んだことで秀秋は突如、頭にその考えが出てきた。正に怪我の功名とはこのことである。痛み感覚も全くなかった。

のっそりと無表情で立った秀秋は、左右に座する大名達の一番左側下座に座した。その隣に座にいる毛利従五位下豊前守勝信は少し嫌な気分になった。かの者も、秀秋を馬鹿にしている。こんな馬鹿に近くにいると、馬鹿が移るっとしかめっ面を隠せなかった。だが、今の秀秋には気にする余裕はない。

秀秋が、何故このような下座を座しているのかといえば、秀吉が命じたからだ。秀吉は国替え減封が出来なかった代わりに、李氏朝鮮で出来るだけ秀秋を苦しめる。それで秀頼に牙を剥いて、豊臣家の当主の座を狙わせないよう、秀秋を疲弊させる策略だ。実に陰険である。そんなことをしなくても、秀秋に豊臣家など興味はない。いや、興味はあるが、嫌悪しているのが実情だ。だから秀吉がこのような策略は無意味である。だが、秀吉の命なので、秀秋は淡々と命を受け入れている。

秀秋は、大した物ではない座布団に座しながら思想を続けた。

（ならば、秀吉が死去ならば・・・撤退か。そうだ撤退を命じに使者をこちらに遣したのか。それならば全ての辻褄が合う。三成がわざわざ使者を使い、釜山城にいる大名達を急ぎ集めるのもな。）

秀秋は我が思想、真実得たりと思わずポンと太ももを右拳でたたく。この行動に勝信は余計に嫌な顔をしたが、やはり秀秋は無視する。秀秋自身はこのような顔を、幼き頃から見てたので、無視するのは容易なのだ。そういう点からしてみれば、秀秋は歳のわりには大人になっているのかもしれない。

だが、思考を続けると、とある問題に秀秋が気付いた。

（ならば、問題はやはり小西殿達をどうするかだな。）

秀秋は小西従五位下摂津守行長達がここにいないことが可哀想だと思った。顔も少しだか強張り、汗がツツと一滴、額から落ちた。行長は有馬晴信等小大名の連合軍、第一先陣の大將を任されている。現在は全州の順天倭城で籠城していた。

ここ最近、九月、そして十月の初旬になって明・李氏朝鮮連合軍が、各地に総攻撃をかけている。秀秋自身は全く出陣しなかったのに関係ないが、殆どの武將は、この猛攻に何とか耐えた。この猛攻に行長もさらされた。順天倭城は海が要塞の守りとした城であり、このこともあってか何とか敵を退かせた。だが、敵が退いたからと

いつでも油断は出来ない状況なのは変わりなく、城からは迂闊に出れない状況なのだ。

（もし、小西殿達が撤退に遅れたりしたら取り残されるな。）

それは後味が悪いっと思つると今度は、秀秋は眉を顰めた。秀秋も元は現地総大将であつた以上、味方は最小被害にしたい。またそれもあるが、小大名は勿論だが、行長の替わりを探すのは中々いいという打算的な考えもあつた。ただでさえ、日ノ本は出兵で国が荒れている。これ以上に荒れたら今度は、日ノ本が元寇みたく攻められる恐れもあるからだ。

そうこう思想を巡らす内に釜山城にいた全ての大名が集結して、使者が入室することとを警備兵の一人が大声で言つた。どうやら、かなり秀秋は考え込んでたようである。秀秋も流石に思考を止めた。更に、身なりも整えておいた。この他の大名達も、一応は神妙な顔をして緊張感を作ろうとしている。大広間が静まり返つた。心なしか、蒸し暑かつたのが涼しくなつた気がした。

（使者との命じの間に聞いてみるか。）

正直に答えるかは分かんがつと秀秋は誰にも聞かれない程の小声で呟いた。

（大丈夫、成功する。）

一方、廊下に立つてゐる使者は緊張が隠せない。顔も引きつつて、体が少し震えている。青との平服に使者の顔色が、見事に同化してしまつてゐる。しかし、舐められたら使者の役目が果たせないのは重々承知している。使者は先程から、心中で自分を鼓舞ばかりしてゐた。

意を決して、大広間の出入り口の襖を開けて見ると、ずらりと大名がいる。その大名達は、使者が襖を開けると平伏した。中には嫌そうな顔を隠そうともせず、地に向かつてした者もいる。まるでモーゼの如く大名達の道を歩く使者はだったが、その心境に余裕が

ないらしく、早々と最上座に座した。

最上座に座した使者は、ザッと大名達を見下ろした。どれもこれも名の知れた大名達ばかりである。もし、使者だろうと無礼に働けば、首がなくなる。そう使者は思考すると、怖くはある。

「一同、面を上げられよ。」

使者は必死に震えないよう声を出した。だが、恐怖と緊張からか、震えはしなかったが声は恐ろしく甲高かった。ひよろつとした体付きには、面を上げた武将達の体の逞しさに、威圧感を与えるのは難しい。

面を上げた大名達は一斉に使者の顔を見る。その見方は不審と何ごとかと不安が殆どであり、一声も聞き漏らさないよう緊張している。大名達の緊張してる顔が、使者にはより大名達に対して、怖さを強くさせた。使者は必死に心中で鼓舞しながらも、言葉を吐くしかなかった。

（大丈夫、成功させる。）

「石田従五位下治部少輔三成つ、及び、これは五大老、五奉行の連立任命である。方々はそのことを肝に銘じておくこととせよ。」

使者は三成の名が出た時に一斉に殺気だったので、慌てて五大老と五奉行の名を出した。使者も三成の人気のなさはよく知ってるからである。その使者の機転に案の定、大名の殺気が薄らいだのでホッとした。使者はここで発言を止まっではいけないと、必死になつて続けた。

「内容は、李氏朝鮮から撤退を命じる。これが命令である。」

使者は言い終わると懷から書状を出して、自ら折ってあつた書状を広げて皆に回し読みさせた。それを見た多くの武將が驚愕した。正に青天の霹靂であつたからである。泥沼化してる戦に、こんな間合いに撤退とは……。大名達は騒ぎ立て始めた。その混乱の為か、撤退理由は書状の何処にも書いていないのに、殆どの大名は驚愕し過ぎて、目は素通りさせてしまっていた。

使者は渡し読みの間、大名達の顔を見た。大名達が驚愕しきつて間に早期撤退を命じさせたら、反対しないだろうと確信した。それは大名達が動揺して、まともな思考な状態ではないからである。ある意味、催眠術みたいなものである。そう、使者に書状が返還されるまでは……。

「少し、いいでしょうか。」

下座の秀秋が、他の大名達に向けて声を出した。秀秋の声は、遠慮からか小さかった。しかし、大名達は混乱してたので敏感になっていた。一斉に大名達が秀秋に視線を集めて沈黙した。秀秋を馬鹿にしているとはいえ、現在は頭が先の混乱で注意力が欠けていた。なので、秀秋の発言を聞く気になっている。

「なんですか。」

使者は高を括っている。秀秋の技量なぞ知るものはないと軽々しく秀秋に声をかけた。寧ろ、書状が返還第一に、使者は発言しようとしてたのに出鼻を挫かれた形である。その為か軽々しい発言の中には棘があった。だが、そんなことは一切秀秋は無視した。

秀秋は書状を見て確信していた。秀吉の死である。だが、まだ秀秋の予測にすぎない。秀秋はそこを確認する為に、発言を開始したのだ。

「何故撤退を命じるのです。太閤殿下はここに執着なされてるのは誰もが知つての筈。」

「そ、それは……。」

使者は動揺した。秀秋の発言が予想外の内容だからである。

豊臣太閤秀吉は李氏朝鮮に執着してるのは、日ノ本にいた人間は誰もが知っている。現に一度は講和して、条件が合わないと破ったのは秀吉自身である。それ程、執着してたのを急に撤退とは解せない。

秀秋の発言は武将達を、冷静さと興奮をさせるのに十分だった。秀吉は、明もそのまた果ての天竺も自分の物だと自慢げに法螺を吹

いていた。その秀吉がまだ目先である、李氏朝鮮の戦いを止める訳がない。なら考えることは一つしかない。

大名達はゴクリつと息を呑んだ。沈黙してたのが、更に沈黙が強くなった。外の陽もそろそろ撤退の準備をしていたからか、部屋から涼しい風が入り始めた。その涼しさが、今は非常に不気味に感じる。秀秋が声を低くしながらも、皆の代弁を言った。

「もしや、太閤殿下は死去なされたのではないか。」

秀秋の発言に、シーンっと大広間が恐ろしく静まった。他の大名達の息の音すら聞き取りにくい。この時ばかりは風も遠慮してか入ってこない。秀秋の顔を見ながら、皆が硬直している。

「い、いやそんなことはない。そんなことはない。太閤殿下はご健在だ。」

使者はいきなり、狼狽しながらも否定した。

この発言に大名達は一斉に、今度は使者の顔を見た。使者の狼狽を大名達が見た。使者自身が秀吉の遺体を見てないし、世間に秀吉の死去の公表もされていない。だが、秀吉の死去の噂は知っていた、つい使者は狼狽してしまった。これでは肯定しているのも同然である。

「お前が知っていることを話せ。」

上座にいる一人の大名が大声で叫んだ。叫んだ武將は大髭を生やし、巨漢である。強面な顔で使者を睨みつける。一気に興奮したからかもしれないが、頭の頂上から湯気がでている。

この大名の名は、福島従五位下左衛門大夫正則であった。賤ヶ岳の戦いで大活躍した、賤ヶ岳の七本槍の一人である。この大名は子飼いであった為に秀吉を敬愛し、忠義心は日ノ本では十の指に入るであろう。その秀吉が死去していたならば、正則にとっては一大事である。

「はっ……。」

使者は正則の殺気めいた目と、威圧感に自分が知っていることを暴

露した。秀吉の死去は間違いないとはいえないが、ほぼ確実との使者からの回答を得て、正則は号泣した。秀吉が長くはないことは、大名達も全員が知ってはいる。

秀吉死去が嘘だと信じようとしても、ここの撤退が大きな死去したという証拠となっていている。それ以外に李氏朝鮮撤退の理由が納得出来る回答はないのである。正則と同じく賤ヶ岳の七本槍の一人であり、子飼い武将でもある加藤從五位下主計頭清正も号泣する。（やはり、死んだか。）

蒸し暑さも突如として現れた水で涼しいが、悲しい空気に変換していく雰囲気の中、秀秋は心中でほくそ笑む。あの秀吉がやっと死んだことが嬉しくて仕方がない。無論、それを一切顔に出さなかったが。

秀吉の死去が効いたのかは分からないが、早期撤退に誰も反対はしなかった。元々は厭々やっていた戦で早く終えて帰国したかった。（手順は違ったが、上手くいきそうだ。）

その後は上座に座してる大名を中心に、真剣に早期撤退を話し合っている。熱い討論で、夕暮れに近くになってからは、一転涼しい気温になっているのが逆に討論が熱いのを目立たせる。

使者は特に口を挟まない。ただの傍観者の立場になっている。フツと使者は秀秋に一瞬恨みがましい目を向けたが、今のこの状態を見ると結果はいい方に向かっている。使者は自分は早期撤退を命じ、行動させればいいと割り切った。ならば、秀秋が武将の戦意を挫いたのは良かったことだと思いなおした。

使者はもう自分はいらないと思い、大広間を出る前に一言告げようと思った。ゴホンつと業とらしい咳払いをする。大名達の声が少し小さくなった。大名達は討論こそ止まらないが、使者の話を聞く体勢はしていたようである。使者はこの好機を逃さずに言葉を發した。

「では、後は方々、よろし……。」

「少し待たれよ・・・。」

使者はまた遮られた。使者に関心がなくなった大名達は発言主を注目する。使者も発言主を恨みの顔で睨もうとした。だが、秀秋みたいに恨みがましい顔が出来る相手ではなかった。

「撤退はよいが、早期撤退となると小西殿等は如何いたすのか。」  
発言主の的の得た指摘である。これにはここにいる大名達は困惑した。早期撤退ならば、無理をすれば一週間あれば何とか準備が出来るが、それは行長等の先陣を除外しての話だ。いつの間にかここにいる大名達は、行長等が除外が当たり前になっっている空気にこの大名は待ったをかけた。

「残念だが、見捨てるしか・・・。」

「某はそれに反対しもうす。」

上座に座してこの発言主の発言に皆は驚愕した。この大名と行長と仲がいいとは誰も聞いていない。無論、反対を述べた本人もそのことは分かっている。だが、何故かその顔はどこか憤怒している顔であつた。熱い討論もシーンと冷たく静まつた。

「それは何故でしょうか。立花殿。」

秀秋は下座で久しぶりに発言した。秀秋は先程から、沈黙して討論を聞いていた。秀秋は行長等の救出を口にしたかった。だが、秀秋の立場では反感だけが出る恐れがあつて出来なかった。だから秀秋は好機をずっと待っていたが、遂にやってきた。秀秋は先程からの発言主であり好機を作った、立花従四位下左近将監宗茂に興味を持ち尋ねた。

宗茂は忠義、剛勇は鎮西一つと秀吉が称した名将である。この時、三十歳。武将としても脂がのった歳である。宗茂は鍛え上げられた肉体を隆々と見せている茶色の平服をしていて、それが逆に筋肉を目立たせている。身長も六尺（約百八十センチ）はあるうか巨体である。だが、無駄な肉はついていないし、顔も強面ではなく青年

武將つばく凜々しい。どこか涼しき空気が漂う男である。それはこの宗茂は義を大事にする大名であり、その為ならば自分の地位や名誉を捨てれる快男児だ。

「このまま、小西殿等を見捨てたら何と言われよう。日ノ本の武將はさても義もない獣、勇もない男だと世界に噂が立つに決まっている。そんなことは日ノ本の武士として恥だ。」

宗茂は秀秋に対して堂々と理由を言い放った。なるほど道理だともが思った。友軍を見捨てる行為は恥以外何ものでもない。

「小西なぞを放つとけばいいのだ。大体、一緒に貴殿も死ぬぞ。」  
清正が不快感を前面に出して反論した。

元々、行長と清正の仲は悪い。性格は行長は温厚で計算高いのに対して、清正は獐犢で情深いので正全くの正反対。出生は商売人の薬屋の倅で清正は鍛冶屋の倅。二人の領地は、肥後を二分割している。この二人の全てが合わない。油と水なのだ。だから、清正が自然と反対に回るのは、当然の成り行きだ。

清正の反論に対して、宗茂は淡い笑いを浮かべて清々しく痛快に言い放った。

「それは仕方がないことです。」

これには大名の全てが驚嘆した。あまりにも清々しい覚悟である。正しくかの者こそが『もののふ』なのだろう。そう思うと、大名達の心に通うもののふの血が踊る。

（これ程の漢が死んだとなれば、我々は天下の笑いものだな。しかし、これで小西殿が救えるな。）

秀秋はこの宗茂に好意を持ったし、体の血も滾り踊った。秀秋はこの漢を死なすのは惜しいと思えてならなくなった。それに、行長等を救出の賛同を得るには、もう一押しが必要であった。

秀秋はすくつとその場に立ち上がった。秀秋の当然の行動に、皆は当然だが不審がる。だが、ここは行長等の説得の正念場と承知の秀秋は、宗茂に向かいさつと頭を垂れた。そして体勢を整えると秀

秋の口は朗々と動き始めた。

「天晴れ。流石は西国一の名将。正に真のもののでございますな。」

まさか、馬鹿にしていた秀秋の褒め言葉に宗茂は少し困惑した。他の大名達も困惑した顔で秀秋を見上げる。何を思考してるかサッパリ分からないからだ。

そんな中で秀秋は眼光を一瞬だけ鋭くし、威圧感を大名達に与えた。その威圧感は大広間の空気を、一瞬にして絶対零度にさせた。しかしこれは、微量な威圧感である。現に、他の多くの大名達はこの威圧感に気付かなかったが、何故か緊張感が否応なく強くなった。はさせた。自然の方が感知力が優れている。だが、名将と呼ばれた数人の武将がこの威圧感を敏感に感知した。秀秋の威圧感を感知した大名達は身震いし、何人かが首を一瞬傾げた。信じたくなかったのかもしれない。

秀秋は、眼光を元の垂れ目に戻して威圧感も発散させた。秀秋の発言は続く。

「我々も大名となり、上の立場になりました。だが、その前に我々は一人のもののであり、武士であり、何より武将なのです。武将の恥は何よりの辛き事。ここは一つ、皆様の力を結集して、小西殿等を救出しようではありませんか。そして、その武将精神を後ろにいる者達に見せ付けてやりましょうぞ。」

見下した者の鼓舞に、何故か大名達は反論が出来なかった。これこそ武将が行く道だと多くの大名達は思った。爽やかな風が大広間を吹いた。その風に一瞬、多くの大名達が酔った。

すくつとその風に乗ったように一人の老人が立ち上がった。老体だが、筋肉が隆々である。顔も好々爺だが、目つきが鋭い。

「儂も立花殿の意見に賛成いたそう。武将じゃからな。」

その老人は、先日の泗川の戦で七千の兵で明・李氏朝鮮連合軍の約三万人を討ち取り、鬼石曼子つと李氏朝鮮で恐れられている。名を

島津従四位下参議義弘という。既に六十二歳と高齢だが、まだまだ若さが残っている。澀んでない声に釣られて、寺沢従四位下志摩守広高も宗茂を支持した。広高の発言の波紋が広がって、次々と他の大名達も宗茂支持を口にして立ち上がる。

そんな中、一人だけポツリと清正は不機嫌そうに座していた。清正の心中にはまだ行長の嫌悪があるからだ。不貞腐れる清正に、正則がため息交じりに話しかける。

「虎之助・・・いつまで座しているのだ。お主が小西殿が嫌っておるのは承知しとる。だが、この小西殿救出は武将である我々がやる武のことぞ。それに嫌いな小西殿に恩を売れるし、武も示せて一石二鳥ではないか。」

虎之助は清正の通称である。この二人は通称で呼び合う程、仲が良いのだ。

清正がここまで聞いて、座していることは出来ない。かの者は秀吉の天下統一を武で支えた自負がある。その武を出さずして、武の自負が許される訳がない。そう、自分は大名の前にものふであり、武将なのだと・・・。

清正はやつと最後の一人として立ち上がった。大名達も清正に注目している。かの者の発言を固唾を呑んで見守る。

「確かに、小西に頭を堂々と下げさせるのは一興だ。今回だけは助けてやるか。」

苦笑しながら清正ボリボリと頭を照れぐさそうに掻いた。緊張した大名達は清正の行動に笑った。ただそれだけで笑ったのではない。武将の気持ちの爽快さ、武の気持ちが一致した心地よさに笑いが出たのである。

だが、唯一笑えなかった者がいる。最上座に座してる三成の使者である。先程から成り行きを見守っていたが、どうも不味い雰囲気になった。

（冗談ではない。このままでは早期撤退は難しくなる。）

顔を青ざめる使者は戦慄した。このままでは使命が果たせないからだ。もののふの魂なぞこの使者にあるわけなく、大名達は狂っていると思った。

このままではいけないと、使者は恐々と小声で進言しようとする。

「恐れながら……。」

実に空気が読めない男である。現にどの大名も、一斉に冷めた目で使者を睨んだ。その大名達の冷めた目は、使者の体を一瞬にして硬直した。

大名達は、気持ちが一つとなつて盛り上がった中で冷水を浴びされたような感じた。大名達は使者の進言の内容を大体は予想している。

大方、早期退却をした方がいい。ならば、小西殿等は見捨てたほうがいいというに違いない。大名達の予想は、的を得てる。

だが、今の気持ちでそれを聞くのは嫌だ。

「まだいたのか。早く後ろにいる者達に伝えよ。我々は友軍救出までは帰国しないとな。」

清正が意地悪な顔をして使者に言い捨てた。これに他の大名達も首を頷く。どうやら、清正の発言に賛同の意を表明しているようだ。

使者は、もう何をいつても無駄だと流石に悟った。顔面は青から白になっていて、体が小刻みに震える。この不気味な者達は何者であるうかと恐怖した。

（皆、狂ってる。狂った者には言葉は分からんわ。）

使者は勝手に自分を納得させると立ち上がった。そして使者は、こんな狂人とは一緒に居たくないつと恐怖した。立った使者は、そそくさと大広間から出て行った。足も体も震えながらであった。

使者が出入り口の襖をピシャリと閉めると、大名達は使者の態度に一斉に笑い出した。清正は目から水を出している。これからの大変なことが待ち受けていても、何故か笑いが止まらない。

このいい雰囲気中正則は、自分に対してだがいいことを思いついた。

「これから気合を入れねばならん。それには酒がいいと思うが、皆はどうであろう。宴をしないか。」

最もらしい言い分だが、大の酒好きである正則はこんな楽しい宴会を逃す手はない。ただ、酒を飲める口実が欲しかったのである。案の定、皆が賛成した。こんな楽しい雰囲気の宴を、ここで逃すのは惜しいからである。

大名達は一旦は、部下に大広間の決定事項を報告した後に大広間に再集合することで、軍議を終決させることとなった。

秀吉の死や李氏朝鮮撤退のことを一旦は忘れて、もののふ達の宴が始まるうとしていた。

### 第一章三節 李氏朝鮮脱出（後書き）

もののふの宴が始まった。ある者は笑い、ある者は泣き、ある者は怒る。そんな中で秀秋に一人の男が話しかける。

次回、転換！関ヶ原！第一章四節李氏朝鮮脱出『4 もののふの宴』。「ここ、宜しいかな……。」

間章 似た者夫婦（前書き）

3 武将と使者と思惑と・・・の直後。解散後の秀秋です。

## 間章 似た者夫婦

### 3・5 狂笑と冷笑

小早川秀秋は大広間から出た時から、ある感情を表に出さぬように必死に耐えていた。その感情はグツグツと体を滾らせている。その感情は先の軍議から誕生した。

大広間で緊急の軍議は、先程に終決した。この軍議で李氏朝鮮の即時撤退、豊臣秀吉の死が露呈するなど、軍議は紛糾した。最後は立花宗茂の武将魂と秀秋の機転によって、即時撤退は却下された。この採決に、日ノ本から来た石田三成の使者は、説得を諦めてほうほうの体で退却した。その後は宴をする前に一時的に家臣等に通りの決定事項を報告しに軍議は終決になったのである。

秀秋は下座の中でも一番の下座だったので、一番に大広間から退出した。途中で控えの間で、待機してた柳生宗章と合流した。そして秀秋の現在の様子は、自分の部屋に向かって廊下を宗章と二人で歩いていた。

廊下を心持ちかなのか、足取りが軽く歩いてた秀秋だったが、フツと廊下から見た庭を見て立ち止まった。

先程の軍議に入る前は、全てが生きて生きて行動していた。全てが、光の庇護を受けていた。それが今では全く違う。光は闇というものに、交換をしようと動き始めていた。夕闇が近づいている庭には、太陽の断末魔の明かりが悲しく赤く光る。暑かった陽気はもうなく、訪れる闇への誘いを惑わせる涼しさが呼んでいる。その道案内の蟲が、音を奏でながらじっとして獲物を見つめている。木や地なども闇に備えてか、じっと風に吹かれながらも寝る準備を進めて

いる。現に、黒き目隠しの誘惑に負けつつあるからだ。

（いずれも一つのもののなのに、違った二面がある。そして、その二面は永遠に切れない。二面は光あつての闇であり、闇あつての光なこともある。それは切っても切れない二面であり反射鏡。なのに反射鏡の中にあるのは一つのもの。一つものなのに、同じであり、違う。似ていて似てない。最も遠くで最も近くのもの。その輪廻からは絶対尊従で逆らうことは出来ない。一つの面が無くなれば残りも消える。そう……。それは同じものなのだから。）

「見方や時間でものは変わる……。つか。」

秀秋の呟きに、傍らにいる宗章は首を傾げた。呟きの意味が全く理解出来なかったからだ。宗章は意味を聞こうとも考えたが、結局は何も聞かなかった。秀秋の顔が穏やかでいて、哀しくもある表情なのに言えなかった。色々な感情や自然に観照してるようであつたらだ。

呟いた秀秋も高ぶった感情は今では落ち着いた。このように何もいえない気分はそうはない。

（しかし……。）

クスリと心中で秀秋は笑った。その笑いと同時に、秀秋は表情を緩めると歩きを再開した。先程と違って、随分ゆつくりと落ち着いている。気分が落ち着いたのでだろう。

だが、秀秋は何故笑ったのか。それは秀秋が考えた思想が凄く青臭く、秀秋の柄ではないのにも関わらずに思考してしまった滑稽さに笑ったのだ。この笑みをした秀秋に対して、向かう筈の闇も若干畏れてが出てか、避けているので陽気があたっていた。

その後の部屋に向かう間は二人は、特に会話をしないで歩いた。ただ、それでも何故か二人の心は和む。それが二人には分からないのだが、それでもいいと互いに思う。全てに理由を求めるのは面白くないし、その心に対しては嫌ではないからだ。

部屋に戻ると秀秋の重要武将が座して待っていた。松野重元、稲葉正成、平岡頼勝、村上吉正の四人である。吉正以外の三人は、現在の小早川家を直接指揮してると言っても過言ではない重臣中の重臣である。吉正は秀秋の右筆であり、秀秋の指示を伝える役目などもしている。平服でここにいる四人は、軍議が終わるまでここでじっと帰りを待っていたのだ。

出入り口の襖を閉めると、秀秋と宗章は座した。座を秀秋の視線で表した図はこうである。秀秋の両側に座したのは奥にいて右側に吉正、襖に近く左側に宗章が座している。その他の三人は対面する形で座している。対面している三人の位置は、中央には無論、筆頭家老の正成が座して秀秋と向き合っている。その正成を中央で座している両側に奥に通ずる右側に重元、襖に近い左側に頼勝が座している。部屋は大した広さではなく、若干の変な加齢臭が漂う部屋に男が六人が座していた。

座して六人の体勢が整った所で、正成が緊張した面持ちで秀秋に質問した。これはいつもの小早川家の風景である。小早川家では、まずは筆頭家老の正成が秀秋に何らかのことを言う。そして、それに秀秋が答えるのが、小早川家での重要事案の時の決まり事であった。部屋に緊張感が漂う。

「殿、軍議はどうでしたか。」

「全く、ここにいる奴は暇人ばかりか。・・・まあいいか。今回の軍議では色々なことがあってな。この私でも驚愕した程だ。・・・それよりも。お前達は夕飯を食したな。」

秀秋は悪態を言いながらではあったが、真面目な顔で正成の質問に答えていた。だが、突如無然とした顔で秀秋が話を逸らした。部屋の緊張してた涼しい空気が、夕暮れの涼しさと秀秋の不機嫌な雰囲気と合体してより涼しくなった。これに秀秋に対面してる三人は顔が引きつった。

無論、四人共に夕飯を終えている。最近は全く出陣はなかったが、

万が一の状態に備えてのことだ。秀秋は夕飯を食してないから、惔然とした顔をしたのだ。ただでさえ、昼飯を食していない。腹は減るに減っていた。腹からの苦情がないだけ奇跡だった程である。

因みに宗章も、控えの間でかなり早い夕飯を食している。元々、剣客である宗章は体の動きを重要視しているので、あまり食す量も少ない。なので宗章の食の関心は薄い。だが、秀秋を警護するには万全にしておく必要があったので夕飯を食した。無論、秀秋はそのことを知らない。

だが、何故秀秋はこの部屋に待機してた四人が、夕飯を食したのが分かったのか。それには証拠があった。秀秋は惔然としながらその証拠を提示している男に声をかけた。

「重元よ……。飯粒が右頬に付いてるぞ。」

そう、重元の顔に飯粒が付いていたのだ。秀秋の指摘に、サツと赤めた顔をして飯粒を取る重元だったが、その姿は滑稽である。

だが何故、重元の右頬についた米粒を誰も指摘しなかったのか。宗章は無論だが論外である。他の三人は指摘してもいい筈である。実際、指摘する時間もあつた。

「へっ……。あつ……。どうもすいませぬ。」

「殿、駄目ですよ。折角見て楽しんでたのに……。」

秀秋の惔然な態度に、重元は大きな体を縮ませて謝罪した。だが、これに吉正は、嫌なニヤニヤ笑いを口に浮かべながら残念そうに言った。これに秀秋もフツと感じたものがあつたようで、不機嫌ではなくなった。重元以外の二人の表情も、漸く余裕が戻った。

どうやら少々暗い性格の吉正が、家老の二人を口止めさせたようである。始めは、家老の二人も注意しようとはした。だが、外交術は吉正の十八番である。忽ち二人は吉正の悪巧みに賛同してしまった。こういう少々間抜けで、嫌なことを思考するのは吉正の好きな行動である。吉正の生贄になった重元は哀れとしかいえない。

これには重元が噛み付いた。どおつと身を乗り出して吉正を強面

で睨みつける。

「おいっ。村上。それはどういう意味だ。」

「そのままですが、何か問題でも……。」

「大いにあるわ。」

重元は羞恥で赤くなつた顔は、今では怒りで真っ赤に染まる。怒りで部屋が涼しくなつたのが、丁度いい気温になつた。罵声が煩いのが嫌なのだろう、重元の隣にいる正成は顔を歪めている。

荒れた声で罵倒する重元に対して、吉正は平然と開き直る。顔もしれつとしているし、何が変なのかと逆に問いかけている。重元の口調も、吉正の発言に更に語気を強める。

「恥ずかしいだろうが。何故お前は……。」

「大体、松野殿が飯を早くかきこむのが宜しくくないです。戦ではない理由、今は一応は平常です。戦がいつ始まるか分からないからと言うの利はありません。それに、今の所は明日もない危機になっている将は、今はいけませんので援軍派遣は皆無です。そしてここに夜襲があるかは今まででありましたか、いや、ありません。ここは最終防衛の城であり、もしとつてもあまり意味はありません。敵もそれぐらの智謀がありますから。それにしても、何故飯粒に気付かないのですか。かきこむのも健康に悪いのが、皮膚に伝染して感覚が鈍ってしまったのですか……。」

重元の語気は一瞬にして弱まり、逆に吉正の語気が強まった。

大体、口喧嘩にはならない。今では吉正が圧倒している。もし、第三者が見たら子供を叱る母親に見える。外交官としても動いている根っからの智謀者な吉正にとって、重元程度の男を手のひらで踊らせるのは容易のことだ。こういう展開を吉正は待っていた。最近、どうも暇だったからいい暇つぶしになったようで現に、吉正は嫌な笑いをしながら生き生きした陰気を出していた。それに、これはもっと重要な役割もある。

「それぐらいにしとけ吉正。そろそろ私から報告をしたいことがあるしな。その前に頼勝、襖の前に人がいないのを確認してくれ。」  
今まで傍観してた秀秋が制止させた。吉正の茶番劇には心中で少し苦笑したが、これは秀秋や他の者達の過度な緊張感を解す役割があったのは、直ぐに察知した。遊びもあるが、私用だけでこんな無駄なことはしない吉正の心遣いに秀秋は心中で感嘆した。だが、やり過ぎは禁物であることは重々承知であった秀秋は、いい頃合で制止させた。無論、これに吉正も黙って従う。

秀秋の一言で、緩んだ緊張感が一気に高まった。部屋の空気もピーンと張り詰めた。頼勝が少し体を立たせて襖を開けて外を確認した。確かに横を通る者はいるが、誰も止まる者はいない。確認した頼勝は襖を閉めて、改めて座すと首を縦に振った。秀秋もそれに対して頷き返した。

「皆の者、私に顔を近づけよ・・・。」

秀秋は、手で振りながら顔を近づけさすように誘う。五人が秀秋の発言後、一斉に体を近づけさせる。怪しく行灯が明かりを灯す中、五人の顔はニョキつと亀のように首を長くした。五人の沈黙が、行灯のチリチリ燃える火の音を目立たせる。

（まるで鯉の餌やりだな・・・。）

「よいか、これの発言は他言無用だ。話せば斬るのでそのつもりで聞け。」

緊張感を壊したくなかった秀秋は、家臣達の今の様子を言わなかった。言いたかったが、これからの発言が大変重いことを考えると場違いである。だからグツと我慢した。

部屋の緊張感が最高潮に高まったと悟った秀秋は、五人の顔に對して顔を近づけて円になった。そして、腹の底から低く、小さい声だが、五人には必ず耳に入るように呟いた。

「秀吉が死んだ。」

「・・・つつつつ。」

五人は息を呑んだ。当然である。それ程重要なことだ。顔を一齐に上げた五人の顔は、どれも驚愕してきつていて、ただただ絶句した。「くつくつくく……」

秀秋は呟いた後、まだ顔を下げて体を震えさせていた。秀秋から震えた声が出ている。第三者から見れば泣いているのではないかと思うに違いない。だが、この五人は誰もそうは思わなかった。秀吉を毛嫌いし、憎悪している秀秋が泣くわけがない。

「ぎゃっはははははははは。ひーひーひーひやはははは。」

案の定、秀秋は笑っていた。いや狂笑している。それこそ目から水を出す程である。それ程に秀吉の死去が嬉しくて仕方ないのだ。歡喜の感情が、秀秋の狂笑に駆り立てたのであった。

秀秋が先程からの耐えてた感情とはこの歡喜であつた。流石に、大つぴらに秀吉の死去を喜ぶのは不味い。大広間から退出してかた必死に歡喜に耐えてたのを、ここで遂に爆發させた。顔は大変笑顔であり、体を起こして太ももを両手でバシバシと強く叩く。だが、その目は濁っているし、雰囲気からは闇が歡迎している体制であつて何処かドス黒い。現に、部屋には行灯で光の灯を発していたが、秀秋には今は躊躇しているようで、あまり灯は当たっていない。微かに灯に照らされる秀秋の姿は闇に酔っている魔物。正に秀秋からは、只ならぬ黒に染まつた妖艶さが出ている。

（やはり、殿はこうではないと……。）

五人の内、四人は秀秋の狂笑にただ啞然としてたが、一人だけ二ヤリと口を歪める男がいた。吉正その人である。この秀秋の狂笑に対して、吉正も同じく小さくだが笑っている。

秀秋は確かに明るいいし温厚だ。だが、それは光であり、表の顔の話である。吉正はこの光ではなく、闇、つまり裏の顔に囚われて小早川家に仕えたのだ。光が強い秀秋は反動で闇も深い。そのどす暗さの底なしの闇に酔ってしまったのだ。

吉正は秀秋が性格の核が、恐ろしく純粹であることと結論として

出している。純粹は綺麗で清らかだが、時に汚く残酷である。その二面相の秀秋の心が、性格となっているのだと・・・。

ただ、この闇に囚われた吉正自身も少々変わっている。だが、吉正が闇に囚われた理由なぞは言葉に出来ない。ただただそれに惚れ込んだ。この闇に対応出来ずに右筆は勤まらないし、また資格がない。どれも一応は秀秋に違いはないのだ。

この闇に小早川家で二番目に対応出来る吉正は、笑いながらさつと口にした。

「これで、重き荷がなくなりましたな。いやいや、祝着存じ上げます。」

得たりと秀秋は、別に吉正に顔を向けるもなくニヤリと口を歪めた。その笑みに残りの四人はゾクリつと肝が冷えた。

この四人は吉正よりも仕えた年数は長いが、今だ闇秀秋には対応が遅い。つまり慣れていないのだ。かの者達は光に囚われているからである。だが、四人とも結局は両方の二面相的な顔は認めてはいない。これは吉正も同じである。だからこそ、それを知っても忠義を第一に奉公してるのだ。

その後は秀秋が李氏朝鮮撤退を口にするると早々に退出した。そう、宴があるからである。その退出する姿は、まるで闇に身を捧げるようにも見えた。

一方、その頃の日ノ本の大阪城、小早川家屋敷の秀秋の寝室。秀秋の光と闇を最も理解し、惚れている者は冷笑していた。闇に染まるその姿は、平服が黒色と共に妖艶さを惹き立たせる。

「そうですか。やっと、亡くなりましたか。」

そう秀秋の正室、古満である。

十月にもなると、もう秀吉の死は隠せない状態であった。まだ噂の域ではあったが、既に確実視されている秀吉の死去の噂に、やつと古満は確信を持てた。始めはこの噂を全く信じなかった古満は、各屋敷の者達を使って、真相を入念に調べさせた。そして今夜、や

つと確信したのだ。愛しい夫の秀秋を仇名す者は、誰であろうとも古満は冷酷になれる。それが古満のである。その秀吉に対して、最後に古満がくれてやるのは、今の冷笑である。

「全く、あの猿公が早く死ねば、戦があんなに惨くなかったのに。今頃は地獄に行ってるでしょう。」

古満の他に、寝室には正成の正室である福もいた。憤怒の顔をした福は、真っ赤な派手な平服と同化していて真っ赤な顔をしている。相変わらずその毒舌は絶好調だ。

福は一に古満、二に子供。三が夫と秀秋が同じという思想なのだ。現に子を最近産んだが、さつさと侍女に任せて、秀秋がいない間は小早川家を指示している古満を助ける為に働いている。

因みに福は、秀秋のことを少々変わった弟感覚で認識している。現に、その毒舌を秀秋に遠慮なき吐いて、夫の正成を青ざめさせている。最も秀秋は、一切その態度を気にしないで対応しているが。

正に福は、肝が据わっているのか変人なのかわからない女である。だからこそ、大事な古満や秀秋や小早川家を苦しめた、憎い憎い秀吉が死んで清々しているのだ。

「あれが死んだら今後は、李氏朝鮮から日ノ本軍は撤退になるでしょう。」

悪態を吐く福だったが、ちゃんと先を見据えている。それに伶俐な頭脳である古満も、福の見方に同意のようで頻りに首を頷く。

「秀秋様が帰国しても困らぬよう手を打ちましょう。・・・私達は時勢の情報を可能な限り収集し、名島城にいる杉原殿にはここ最近、秀秋様がいなかった間の政策などの報告書を書かせる。これが今の所の最優先事項で進めます。それにしても・・・。」

早く猿が逝くように祈って良かったつと呟いた古満は冷笑を深めた。名島城は秀秋の本拠地である。そこには居残りでいる杉原重治が主に領地をまとめていた。これは秀秋が思考した人事で、創造性と大将の器に欠けるが、実行性や周囲の調整に長ける重治を小早川家を表向きに城代にしてまとめる。しかし裏では一番信用し、器量も

ある古満に城代の重治に指示を出させる。これが現在の、小早川家居残り組の組織のカラクリである。

古満の冷笑に福はハアアっとため息を吐く。そして思った。秀秋がもし、逆の立場でも同じ行動をしてただろうと。福はこの夫婦の性格はかなり似ていると認知している。

（まあ、二人とも変わった弟と妹だけど、これが可愛いくて仕方がない。）

福はそんなことを思って、古満の顔を優しく見直した。

この福だが、小早川家の存在価値は実は大きい。当主の秀秋は福の言い分を素直に聞くと、正室の古満は福を頼りにしていし、信頼している。そして、福の夫である正成は筆頭家老であり、恐妻家である。つまり、いいなりなのだ。

・・・福が小早川家の一番の権力者なのかもしれない。

**間章 似た者夫婦（後書き）**

無論、この次は本編です。

#### 第一章四節 李氏朝鮮脱出（前書き）

飲酒は二十歳からです。これが歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章四節 李氏朝鮮脱出

### 4 もののふの宴

李氏朝鮮の陽は完全に消えた。陽をなくし、その次に来るは闇の世。今宵はまだ月が情けの灯を、気まぐれで浴びせてもらっているだけまだいい。だが、恩恵を受けたものの中には、贅沢にも天を睨むものもいる。今まで陽の光の恩恵を受けたものは怯え、恩恵を受けなかったものは暗躍する。獣や虫の鋭い眼光が、時より月の灯によりギラリつと殺気だつて光る。その殺気が風の冷たきと共に周りを漂わす。

そんな中、釜山城の一角に何やら音が聞こえる。その音は雑で品がない。出鱈目な上下の音程で音量は煩過ぎる。だが、何故かその音が心地よい。ギャアギャアいうその音は、釜山城の大広間から発声していた。

大広間では多くの大名達が騒いでいた……。とはいえ、何故か先の軍議よりも、大名達の人数が合わない。若干だが少ないのだ。もののふの宴は既に酒のつまみはなく、酒しかない。つまみはどちらかと言えば、腹を空かした大名達の腹に、直ぐ収まってなくなった。今は、それぞれが酒の徳利を所持して勝手に飲んでいるのだ。だからこそある意味、好き勝手出来るのだ。酒が切れたら近侍が入り口の襖にいたので、言えば追加される。兵糧が不安なのはあるが、酒はある。だから遠慮なく飲める。

大名達を見てみると、殆どの大名は完全に出来上がってる。つまり、酒に飲まれているのだ。中にはグーグーと床に大の字になって夢に酔ってる者もいる。正に大広間は盛り上がっているという感じ

だ。闇もこの馬鹿騒ぎには嫌いそつばを向いたようだ。ここは明るく暖かい。・・・行灯があるのもあるが。

「ちつ他愛もない。」

一人の大名が悪態をついた。その顔は真つ赤にしてて、苦々しい表情をしている。その大名は座していたが、悪態をつくると立ち上がった。手に持った徳利が立ち上がった衝撃で、中の酒が少し零れた。

その悪態をつかれた浅野従四位下左京大夫幸長は仰向けに酔い倒れていた。真つ赤な顔をして勘弁、勘弁とうわ言を呟いてる。口からは水が滴っていた。目も殆ど閉じていて、微かに開いた目は左右をキョロキョロと泳いでいる。手には杯があつた。

暫くその状態で寝ていると、哀れ幸長。酔いつぶれとして近侍等に運び込まれてしまう。向かう先は幸長の屋敷である。近侍達が汗水流して運んでいる間、幸長のうわ言を言っていたという。

この幸長を駄目にし、更に糟屋従五位下内膳正武則ら、多くの大名を酔い潰し、まだ獲物を狙うのは福島正則である。

かの者は既に、かなり酒を飲んだが意識はまだある。元々、かなりの酒豪であつたので平気なのだろうか。正則は多くの大名達に率先して酒飲みくらべをして、次々と対決者を夢の世に誘った猛将だ。ある者はかの者の酒を、目から水を流しながら飲んで夢の世に逝った者もいた。だが、その飲みっぷりに多くの大名達が、歓声を無責任にあげている。その飲みっぷりは見事だつたからだ。

今後のこと、豊臣秀吉の死去など悲観な要素は多い。なので、本来ならこんな馬鹿騒ぎの宴などしない筈だ。だが、ここも大広間にいる大名は誰もが、嬉しく笑い騒ぐ。武の心が一つになった喜びと興奮が、その悲観な要素に勝つたのだ。

「まだまだ濃は飲めるぞ。次は誰が相手になるか。」

「市松、もう止めとけ。そろそろ限界なんじゃないか。いい加減に

止めておけ。」

正則が吠えている所に加藤清正が正則を諫めた。市松とは正則の通称である。

その清正も真つ赤な顔をして酔つてはいるが、まだ意識ははつきりしている。かの者は別に酒飲みで酒豪だが、相手に酒飲みを強要しない。正則が多くの大名を夢の世に逝かせたのを見て、止めさせる為にそろそろ場合と諫止したのだ。だが、これが正則の感に触つた。

「んんつ。虎之助。濃はまだまだ大丈夫だ。まだまだ飲めるぞ。」

正則は清正の隣にどかりと座した。正則の顔は若干だが不機嫌に歪む。大好きな酒を止めよつと言われたのに腹が立った。それに、まだ余裕があると自負しているから腹が立った。酔いも末期である。

この酒豪達の周りに誰も近寄らない。いや、一時的に様子を見ている大名達の野次馬はいる。野次馬は見ても楽しいが、当事者にはなりたくないようである。

どうやら、正則は清正を次の酒飲みくらべの相手に決めたようだ。野次馬もそれを期待しているようで、遠回りからじつと眺めている。正則は清正の性格を幼い時から子飼いとして、共に歩んだからよく熟知している。

「ふーん・・・そうか・・・。もう歳のなつたな虎之助。この濃に酒で負けるのが怖いのか。だから濃に酒を止めさせたのだな。全く情けない限りだ。ほれ濃の酒が飲めんのか。」

正則が清正に大声で、周りに聞こえるように挑発した。そして清正の杯に酒を注いだ。正則の顔も挑発に合わせてか嫌な笑いをしている。

正則は知恵足らずだが、こういうことには頭の回転は速い。元々、酒豪なのを自慢している清正である。それを大声で否定されたら黙ってはられないつと正則は読んだ。

この挑発に簡単に清正が乗る。ここは正則の勝利である。ニヤリつと内心で正則が笑ったが、清正がこれを知る由はない。

「何を。お前の体を心配したから言つたのに、その口ぶりなら大丈夫そうだな。濃はまだまだ飲めるわ。お前もほれ。」

勢い良く杯の酒を飲み干した清正は、怒りと酒で真つ赤な顔をした。そしてお返しと正則の持つていた杯に酒を注いだ。

簡単に挑発に引つ掛つた清正だが、自分が市松を酔い潰して周りを救おうと思つてのことだ。その意味では、正則の策略はどう転んでも逃れる術はなかった。

その酒豪対決開始に、遠回りに観察した野次馬が歓声をあげて近づき煽る。随分無責任である。だが、この周りには多くの者が騒ぎ立てていた。

その騒ぎの中、小早川秀秋はちびちびと隅の下座で、一人酒を座して飲んだ。宴から結構飲んでるので、顔が赤い。時より、体が熱いのか大広間の温い空気で体を冷ます仕草もしている。簡単にいうと手で顔を仰ぐ仕草である。

秀秋が軍議では勇ましい発言をしたが、もう殆どの者達は忘れているようである。つまり、また馬鹿にした評価に戻っているのだ。喉元の熱が冷めたら何とやらつてである。

現に、今まで秀秋に大名達は、誰も近寄っていない。その為か青い平服がその存在感を、更に目立たなくしてしまっている。だが、秀秋には文句はない。この楽しい宴の雰囲気を自分が壊すのは嫌だし、陽気な雰囲気にいるだけでこちらにも気分が良い。秀秋は一人で十分に楽しんでるのだ。

（これから歴史はどう動くのだろうか・・・。）

秀秋はフツと思ひ始めた。今までは宴に聞き耳をしながら、それをつまみに飲んでいた。要は何も思考していなかったのだ。だが突然、秀秋は今後の未来予想をし始めた。

（秀吉の死後、果たして平和だろうか。否、ならない。こんなに不平不満を持った、日ノ本軍の大名達の扱いが、上手く出来る者はそうはいない。秀吉の遺した一人息子の、豊臣従二位権中納言秀頼

は幼い。しかも母の淀が、存分に甘やかして育った童である。とてもではないが、絶対不可能だ。ならば、誰が抑えるか。石田三成も絶対不可能だ。何せ私を含めてこの大名達がかの者を憎悪しておる。豊臣家の忠義は確かにあるが、我々の他に生理的に嫌いな者が多い。下手をすれば政治混乱が、逆に強くなる可能性もある。三成以外の五奉行は軟弱であつて、武将を抑えるのは絶対不可能だし・・。

ならば・・・。五大老であろうな。だが、五大老の誰が抑えても問題はあつた。五大老の権威が強くなり、問題が別の方向にいく可能性もある。淀も他方の権力強化に煩うたろうし、豊臣家でも面白くないに違いない。だが五大老がまずは、日ノ本軍の大名達の怒りを抑えるだろつことは間違ひなかつた。問題が誰が抑えるのだろつか・・・。）

「・・・・・つか。」

「つっ。」

秀秋ははつとした。秀秋は慌てて、思考を中断して前を見た。すると、そこには一人の人物が立つて秀秋を見下ろしていた。

思想し過ぎて声をかけてくるまで、人が来たのが分からなかつたのだ。その人物が、地味な黒い平服もあつて更に気付きにくいこともあつた。だが、まさか自分に声をかける酔狂な者がいるとは思わなかつた。それは秀秋がどう他人に思われているか自覚してるからだ。

その男はまだ秀秋の前に立っていた。秀秋の返答を待っているようである。だが、一向に返事がないので、もう一度その人物は言った。

「ここ、宜しいかな・・・。」

「・・・・。」

秀秋はその人物を見上げて、黙つて首を頷いた。その人物は返事を聞くと、どかりと前に座した。その人物も酒を飲んだ筈だが、こち

らは顔に全く出ていない素面であつた。こちらの人物は、かなりの酒豪のようだ。

二人の周りには誰もいない。そこは騒がしい空間から全くかけ離れた沈黙の空間である。空気もかなり重い。そこはまるで別空間のだった。

「・・・。」

前に座してるその人物は黙って徳利を持つと、秀秋の右手にある杯に酒を注ぐ。その顔は無表情そのものだ。顔色から見ると、この人物が何を思考してるかなど全く分からない。

秀秋は少し苦笑しながら、杯に注がれた酒を飲み干す。実は秀秋は酒にあまり強くない。下呂ではないが、歳も関係してるのだろう。だが、礼儀としては注がれたら飲まなければならない。秀秋は顔は赤いものの、まだ意識はちゃんとある。飲み干した秀秋は徳利を持つて言った。

「立花殿。ささ、一献。」

秀秋はその人物、立花宗茂の左手にある杯に酒を注いだ。これも礼儀である。宗茂もこの酒を注がれると、一気に飲み干した。

暫しの間、二人は代わる代わる互いの杯に酒を注ぎ、飲み干した。その間は互いに無言である。そこは静かなのだが、確かに僅かだが、緊張感がピーンっと漂っている。

そんな中、不意に宗茂が沈黙していたのを破った。

「何故、某の意見に賛同なされた。」

どうも、宗茂はこれが聞きたかつたようだ。顔も少し真面目になる。緊張感も最高潮に高まつた。

先程から宗茂はこれが心に引つ掛つた。この二人は仲は特に良くはない。どちらかというと、宗茂の秀秋に対する評価は高くはない。勿論、若輩にしては頑張つてはいるのは認めてはいるが、軽率で甘い行動が何度も目に映つたからだ。

だから、今回の自分の発言に賛同するとは微塵も思わなかつた。

だから、秀秋の心中がどうしても聞きたかったのだ。秀秋はこの言葉聞いて、杯を置いて腕を組んだ。

「ふーむ……。そのことですか。」

秀秋はまるでこの発言を予知してたかと思わせる口ぶりだった。秀秋は直ぐに、宗茂が声をかけた理由が分かった。秀秋と宗茂との接点は、先程の軍議しかないからである。

酒もそれなりに回ってか、酔いで更に顔を赤める秀秋はどう言おうかと一瞬黙って思考しようとする。だが、酔いであまり思考が整理出来ない。

仕方ないと思いを止めた秀秋は、淡々口調で宗茂に顔を緩めて親しげな表情で言葉を続けた。

「それは先程の軍議で申したのが理由です。一人のもののふとして感激したからです。だからこそ賛同した。無論、将を見捨てたら国が荒れるのが嫌なのもあります。それに小西殿等がこのまま見捨てるのは後味が悪い。撤退を早く、被害が最小にしたいならば捨石にしたら確実でしょう。それをもののふは恥という心意気の憧れでした。」

だが、私は……。甘いと言われるかもしれないが、日ノ本軍の将や兵はなるべく一緒に帰国したい。この無限地獄を共に戦をした者達と脱出したい。これが本当の理由なのかもしれません。」

言うつと秀秋はぐいつと杯の酒を飲んだ。  
秀秋は体勢を宗茂から逸らし顔をあげる。汚い天井を見てる訳ではない。宙に浮かんだその目は戦で天に逝った将や兵を思つてのことであろう。目も若干潤んでいる。最後の発言も淡々としてた口調がしんみりと哀愁が出ていた。

「なるほど……。」

宗茂は自ら杯に酒を注ぎ飲んだ。飲んだ酒は何処か先程より苦く感じた。

宗茂は今までで見たことのない大名だと思つた。偽りの優しさではなく、ただ純粹の優しさに内心驚愕もした。利潤や野心などに燃

える者ははき捨てる程いた。しかし、こういう者のもののふなのは勿論、大名になると稀有に等しい存在であった。

（珍しい男だな。今時、面白い。）

だが、悪い気はしない。寧ろ、もっと早く知り合ってたかったと残念だ……。ふつと自分に少し驚いた。何故こう思想したのだろうか。自分にはないものに惹かれるのだろうか。もののふらしさにある痛みや闇にこの秀秋の優しさと光が心身に沁みたのか。

宗茂は秀秋の悩ましい態度を何とかしようと話を始める。

「貴殿はまだ若い。その甘さも確かにそうだ。戦に命のやりとりがあるのは当たり前だ。だが、そのことに答えはない。誰もが独自に解決し前に進むのだ。前に前に進まなければ時代に遅れ、吞まれるぞ。だから時間があるわけでない。だが、よくよく悩まれよ。しかし、答えを出したら譲るな。安易に譲ると自分も従う者も動揺するからな。それに……。」

宗茂は口下手だ。根っからの武将であった。

だが、この若き大名に必死に語った。この純粋な大名の力になりたかった。稀有なその純粋なものを失わないように言葉を選んで、顔も必死なものである。雰囲気も厳しさではない。ただただ悩む秀秋を助けたかった。

「ふむふむ……。」

秀秋の方も真剣に話を聞いている。名将と言われている宗茂の話である。今後、絶対に役に立つと感じて酔ってる脳を神経伝達で叩きながらも必死に入れている。

そのたどたどしいながらも必死に思いを告げる宗茂には好感をいだく。気がつけば、緊張した空間は発散していた。周りはまだまだ清正と正則の飲みくらべに歓声をあげている。

もののふの宴はまだまだ続いていった。

#### 第一章四節 李氏朝鮮脱出（後書き）

秀秋と宗茂。話せば話す内に友情が芽生えていく。それは、何故だろうか。そこには共通の過去があった。

次回、転換！関ヶ原！ 第一章五説 李氏朝鮮脱出  
『5 秀秋と宗茂』 「互いに・・・」

間章 居残り組（前書き）

これはある煩惱の男のひとこまである。

## 間章 居残り組

4・5 名島城にて・・・

小早川秀秋は筑前と筑後・肥前の一部の三十万七千石の大名である。日ノ本では、かなりの大大名である。そして、秀秋の本拠地は筑前にある名島城である。

ここは、秀秋の義父でもあつた小早川隆景が居た城だ。ここは昔、同じく立花山城にある支城として築城された。その名島城に手を加えたのが隆景である。名島城は海に囲まれた天然の要害である。詳しくは間章なので省略する。本編でしっかりと書く予定なので・・・。

舞台はここ名島城の本丸にある天守の大広間である。これは、秀秋が李氏朝鮮に出兵して留守を命じられた者達の物語である。

「何故呼ばれたか分かりますか。」

ギラリと光った目をして冷めた言葉を吐いた人物が尋問者を睨む。顔は嫌悪感を隠そうともしない。

その言葉を吐いた人物の名は堀田勘左衛門正吉である。かの者は小早川家の筆頭家老の稲葉正成の家臣で腹心である。正成のかの者に対する信頼は厚い。

だが、かの者は主人の出兵には同行していない。これは、正成の正室である福がそう命じたのだ。正吉は福にも信頼されてたのである。主人がいなくなる以上、代わりの手駒が欲しかった福は、かの者に白羽の矢を立てたのだ。だから、正吉は名島城に在住してるのだ。

その奥にはちょこんと城代の杉原重治が不安げな顔で座している。こちらは、秀秋が指名した城代である。つといても裏では秀秋の正室、古満が完全にここの権力を握っている。所謂、傀儡人形である。だが、重治はそれで納得しているので文句は一切ない。自分の力量を重治は弁えているからだ。

この二人は上座の中央にいて最上座にいない。城代の重治は最上座に座してもいい筈である。これは例え、秀秋が居なくとも座するのは恐れ多いからだ。・・・重治は遠慮してるだけだが。

他に尋問者が逃げないようにする為か、杉原重治の息子である重季を中心に五人が出入り口の襖に仁王立ちして警戒する。

「んー。分らないね。」

尋問者であつて、ここに座しているこの男。名を市野実利改め伊岐真利が軽く応えた。最近になって改名したのである。これは乗りだそうだ。因みに、朝鮮出兵した秀秋等は一応は知っている。どうやら、かの者がこの会議での中央人物のようである。だが、本人は全く分からないのか腕を組んで思考する、顔も苦悶していて、結構な熱中している思考である。

いつもの一日が終えようとしていた今日に何故呼ばれたのか。真利は一応は仕事をしている。しなれば、仕事に煩い正吉が上に訴えたら面倒だ。それに、一回だけだが、秀秋からも仕事の怠慢に軽い注意を受けている。流石に主君からのお叱りには敵わない。だから真利は仕事はキチンとこなしている。

真利はゆらゆら行灯の灯が揺れている中、大広間でただただ必死に思考した。だが、そんなのは一瞬で直ぐに分からんつと匙を投げてしまった。元々真利は、思考する嫌いだ。行動派なのである。よくそんなので武術指南役を勤めてるのかと思う程の大雑把でもある。真利は表情こそ一応は神妙だが、態度がどうも神妙ではない。無論、思考をさつさと止めてしまったからだ。真利はどうせ大したこ

とではないのだろうと軽く構えている。

真利の態度の雰囲気に対して周りにも伝わったようである。現に、殆どの者達が呆れた目をしている。その中で正吉が語気を強めて尋問した。

「今日、貴殿が話した侍女は……。」

「んー。三十四人だが。」

正吉の尋問の内容で真利にはやっと分かった。というより、正確に侍女を数えている真利はある意味凄い。真利はキツパリと断言している。大方女性問題だろうと真利は断定した。

これには後方の重季が更に呆れていた。真利の開き直りにである。行灯の灯も遂に呆れたのか、灯が一瞬だけ弱くなった気がした。

今時に珍しく純情で、初心な正吉がまた小煩く真利に説教を垂れるつもりだ。真利に正吉は日常茶判事に説教をしているのは、小早川家の者達は誰もが周知している。

何故年下に、しかも身分は真利より低く、それでいて私用に説教など真利は大人しく受けるのか。正吉とは仲はいいからである。だからこそ怒らない。

（しくじった。耳栓をするんだったな。）

だが、怒りはしないが、聞き入れるのは個人の自由。真利はもうウンザリして自分に悪態をついた。

既に数え切れない程に説教は受けている。そして正吉の説教内容は、今まではほぼ変わらないからだ。だから厭き厭きしてるのだ。

だが、こういう形で説教は初めてだ。基本はその場で説教であり、大掛かりで正吉の部屋での説教だったからだ。女性問題でここまで発展したのは今回が始めてである。その点では真利も少々だが驚いたが……。

吉正が赤らめた顔をしているのに対して、真利は今では飄々としている。二人とも説教するいつもこんな感じである。そして、二人の

口論が始まった。

「いいですか。貴殿は何故あんなに侍女を追いかけるのですか。貴殿が暇でも他は暇ではありません。話をするなっとは言いません。だが、貴殿はいつもこ、こ、こ、こ腰やし、し、し、し、し……。」

「尻か。」

「そう。御尻を触られるのはやりすぎです。」

「別にヤツてる訳ではないんだけどねー。」

なつと絶句した吉正は、説教で興奮して赤くした顔を羞恥で今度は赤くした。実に初心であるが、意味が分かるので耳年増である。

一方の真利は顔は飄々ではあるが、ウンザリさが出始めている。

いつもの説教もこんな雰囲気に進んでいるので、展開が読めるのだ。「き、貴殿は誰でもいいのですか。」

「そうでもないんだけどねー。一応は区別もしてるつもりなんだけどー。」

吉正はいつもの答えを言った。

そうは言うが真利の許容範囲は広い。何と七十歳を口説いたのが噂になった時は、周囲を騒然とさせた。一歳を口説いた時は親が真利に、必死に止めるように頼んだこともある。真利が口説くときはいつも本気なのだ。真利は歳だろうと人妻だろうと女ならば基本的に気に入れば見境がなくなる。そして、体を触るのである。顔や性格ではなく、なんとなく決めるので始末が悪い。しかも、真利がやると殆どの女は口では怒るが心底では嫌ではないのが余計始末が悪く、不思議なのだ。

だが、気に入ったが口説かない例外もある。その一つとして、秀秋の正室の古満がいる。

実は、真利は一度、真剣に口説いたのだ。主君の正室を口説くとは、凄い度胸である。勿論だが、秀秋の正室と知ってのことだ。

一応断っておくが、真利は秀秋に対する忠義心はちゃんとある。

自分がこれ程に自由に動ける場所は、ここしかないことも自覚し感謝もしてはいる。だが、真利はそれとこれは別だといって古満を真剣に口説いたのだ。

（いける・・・。）

古満を口説いた感触は良かった。だが、真利の手が古満の体に向かった刹那に体が震えた。顔こそ笑ってたが、目は全く笑っていなかった。そして、体からの拒否する雰囲気と殺気に震えた。背後に阿修羅がいると錯覚してしまう程の覇気だった。本能で震える真利は瞬時に悟った。

（・・・これは無理だ。）

元々、無理強いはいしない真利は諦めも早い。さっさと諦めた。互いに好きな者が強く想ってたなら無粋なことをするのも嫌だった。・  
一番は命を捨てたくなかったが理由なのだが・・・。

これには余談がある。このことが秀秋に知られた。秀秋はウルウルと目を潤ませて、私はいらなかったと体をプルプル震えさせながら尋ねたのだ。これには古満が胸がキュンつときめいた。男で凛々しいのは見たが、可愛いのはこの夫しか見たことがない。

その秀秋の無防備さと可憐さに古満は愛しさが爆発して、ギューと秀秋を抱きしめる行動を起こして慌てさせた。顔も羞恥で真っ赤になる秀秋に、更に古満が愛しさに抱きしめを強くし、最後は息がし辛くなつて秀秋がグツタリと青ざめ、それを古満が逆に慌てさせるまで続けたつという話である。現代でいえば、秀秋の先の姿はチワワに似ていた。秀秋も昔は目もまん丸としていたし、垂れていない。

その他にも稲葉正成の正室である福もそうだ。ただ、これは真利が好みではないので口説かなかった。だが、福はそれが気に入らないのか、ある日になつて真利に突如として正拳突きを喰らわして、真利を沈めさせてしまったのだった。真利は武術指南役である以上は一応は強い。だがこの攻撃はあまりの速さに対応が追いつかなか

った。

これ以降、真利の一番苦手な女は福である。内心ではあれは女ではないっと、恐怖している程に福が苦手なのだ。だから、福のお気に入りの侍女等は口はそれなりに口説きながらも、一切手を出さない。その点を考えて手を出さないのは、福と古満に関係している人物であろう。

「ええい。何故そのように女子に手を出してしまうのです。」

「そこに戦があり、浪漫があるからだよ。そこで動かねば漢じゃないね。だからこそ、見つけたら即動く。これが漢の花道だと思うし、今の自分があるのだよ。」

「馬鹿か。馬鹿なのか、あんたは。」

正吉は上官だろうが、もう関係ないつと口調が汚くなった。普段ではあまり見られない感情の高ぶりである。右手の人差し指を激しく噛む。かなり苛立っているようである。それを重治はまあまあと宥めている。

暫しの間、罵倒に近い発言が続いたが全く真利はしらつとしている。自分の信念は間違つてない。だから堂々としていられるのだ。この煩惱は伊達ではない。

「最後に、杉原殿。伊岐殿に言つて下さい。」

正吉はハアハアと息遣いが荒いながらも重治に発言を催促した。一同の視線は重治に集中する。一気に雰囲気も緊張したものに变化した。

これまで、特に発言しなかった重治だが、正直困った。こういう恋路事は苦手なのだ。それに、主なき領地を守る為に政務をしているが、量がとんでもなく多い。家老の殆どが李氏朝鮮に出兵でいなのだ。正直こんな時間はないのである。また、先程から別の大問題もあつた。体の動きが若干可笑しいのがその原因だ。

「んー。今後から気をつけるように。」

話は終わ리といわんばかりに重治は立ち上がった。早々と退出した。

まずは、厠に行きたかった。歳で若干尿意が早いのだ。それが大問題なのだ。足元もぎこちない。それから政務をまたしねばならない。だからこそ、発言は淡泊であった。

これには、流石の当事者の二人も啞然とした。あまりに適当な言い方だったからだ。だが、一応は注意してはいる。

（どうなるのだろうか・・・。）

真利以外の者はそう思った。真利の表情からは何も読み取れなかった。

数日後、結局は変わらず口説く真利に頭を痛める正吉の姿があった。そんな名島城のひとこま・・・。

## 間章 居残り組（後書き）

どうも、歴史転換です。これで投稿して一週間になりました。この作品を見て頂いた読者の皆様には感激と感謝をしています。雑で未熟な文ですが、これからも転換！関ヶ原！を見捨てずに見てくれるとありがたいです。

## 第一章五節 李氏朝鮮脱出（前書き）

歴史転換です。今回で二桁の投稿になりました。作品を見てくれる読者様に変嬉しく作者は思っております。今回の本文で、立花ギン千代のギンが漢字で表していないことをご了承下さい。

## 第一章五節 李氏朝鮮脱出

### 5 秀秋と宗茂

外は既に闇が完全に支配していた。唯一の灯りであった月も厭きたのか、手先に形を隠させているのだ。暗闇には、光を嫌い闇を好むもの達が、我がもの顔で世を見る。その顔には陰険さこそないが、どこか傲慢さがある。自分は闇の恐怖を見て怖くない。この闇以上に怖いものはないからこそ、今は傲慢なのだ。光は完全に消えることが出来るが、闇が完全に消えるのは難しい。だから、いざ光が現れたら隠れればいい。実に姑息である。だが、これこそ闇に生きるものはずる賢くしぶといのだ。これは光にだけ生きるものには、到底真似出来ないことであろう。

もののふの宴は終盤になりつつあった。時間も既に始まった日は過ぎて、明日になってしまった。明日は朝一ではないものの、絶対に軍議をやる予定だ。勿論、小西行長等の救出の手筈を決める為だ。だが、釜山城の大広間に残って、まだ宴をしてる大名達はこのことが頭に入っていない。ただ楽しんでる・・・快樂に吞まれているのだ。だから思考出来ないのだ。

この宴の中心は福島正則と加藤清正の飲み比べである。かれこれ三時間は飲み続けている。途中で二人が厠に行くこともあるが、それ以外は睨み合いながら二人は飲みあっている。

その二人の近くをやらんやんやんと周りを囲んで煽る大名達がいる。かの者達は最初こそ近寄らなかったが、今では二人の周りを囲んでいる。

それは、今更遠回りしなくても大丈夫なのを確信しているからだ。何故なら目の前で飲み比べの二人は、かなり限界に近いのだ。現に顔も赤みの中に青い色が肌から出ている。持つ杯の手は酔いで震えている。目も虚ろである。もし、どちらかが倒れて次に指名されても、口先か飲み比べで説得出来るという自信があるからである。

島津義弘などの少々歳を老いた者や、酒で限界でここにいたら不味いと撤退した大名も多い。現に大広間には二十人前後しかいない。これは近侍も合わせた人数だ。近侍は酒も飲まずにいるのと、眠いので少々迷惑げだ。

その他でもチビチビと二・三人で、飲むのもいる。かの者達はただ酒を飲んでいるつといった所か。だが、飲み比べではない。なんとなく時間を潰しているのだ。

そんな中、唯一違う空間がある。その空間にいるのは小早川秀秋と立花宗茂の二人である。かの者達の周りには近侍はいない。二人しかない空間なのである。

この二人の徳利は既に酒もないが、二人は特に気にしていない。二人は時を忘れたように、ただ時より微笑を用いながら談話している。それは、まるで今までの話していない時間分も、取り戻そうと話しているように……。

（しかし、ますます変わった男だ。）

宗茂はそう感じた。それは先程からの談話で、秀秋に対する印象である。

実際に話して見ると、秀秋の心情が宗茂は手に取るように分かる。心情の中には、秀秋の純粹故の残酷さや、冷酷な面を宗茂は理解した。優しさに見える残酷さ。全くその暗い面はこの男にはない。と先程感じたが、今ではそれが当たり前のよう感じた。それが二面相なのだから仕方がないことだと。

寧ろ、この男だけでなく、この者の人生に代われれば多分もつと悲惨な性格になったろうつと結論に出した。このような優しさを持っただけでも奇跡なのだと感じた。

暫しの談話で二人も大分、仲が良くなった。そんな時に宗茂はポツリと尋ねた。

「何故、そのように何でも某に話されるのか。」

宗茂は話をしてる間に以上の疑問が湧いた。顔も疑問を隠せないように、歪んでいる。

秀秋は先程から、全く嘘を言っていないことを宗茂は分かった。だが、嘘を言わない理由が分からない。まさか酒で、こんなに喋れるとは感じない。現に顔は真っ赤だが、意識はちゃんとしてるし、呂律も大丈夫だ。

互いに話すまでは仲は良くなかったので、嘘を言つて質問をかわしても仕方がない行為だ。このいい雰囲気壊すかもしれないが、この疑問は是非聞きたかった。

「んー……。互いに偉大な義父がいたことが私の口を軽くしてるのかも知れません。」

秀秋自身も何故か解せなかった。だから少しだけ思想してみて、ポロリッと呟いたこの一言に初めて自身が納得した。

一方の宗茂も秀秋の発言で看破した。秀秋が義父の偉大さの重圧を感じ、その気持ちがわかる自分に共感を持ったことを……。

宗茂は九州の雄であつた大友家の猛将である、高橋紹運の嫡男として一五六七年に産まれた。幼い頃から非凡な才覚があるつと度々、紹運は周囲に自慢して期待していた。この子ならば高橋家は安泰だと確信もした。

だが、そこに一人の男が目をつけた。大友家の筆頭家老である、立花道雪である。かの者は足が動かない。落雷で動かなくなったのだ。だが、この男は雷に切りかかり、それを切つたと公言した。そして人々はそれを信じた。御輿に乗って指揮するその姿は、正に雷

神の化身つと敵は恐怖した。この道雪の名は遠い京まで轟いている。だが、この道雪の唯一の泣き所があった。子に恵まれなかったのである。道雪の子は女二人であり、男子は産まれなかった。その内、一人は早々と死んだ。後は娘のギン千代しかいなかった。仕方なしに道雪はこのギン千代に家督を譲った。だが、内心では不安視していた。そこに宗茂を見た。そして直ぐ気に入った。そして勝手に養子にしようと決めてしまった。

紹運に道雪は何度も迫った。時に恫喝し、時に哀願したりと様々な手で説得した。紹運も頷く訳がない。期待してたし、何よりも嫡男だ。断るのは当然である。

だが、道雪は諦めない。何度も説得する。上官なので話は最低聞かなければならない紹運は、徐々に押され始めた。道雪自身が、この行動が身勝手で、紹運を大変困惑させているのも理解してはいる。だが、どうしても養子にしたいので、感情は一先ず後回しにした。そして道雪は決定打をいった。次男がいるではないか。だから嫡男を是非養子に・・・と。無茶苦茶なこじ付けである。だが、これ以上はもう付き合えないと、仕方なしに紹運は養子を認めた。この英断に道雪は号泣して感謝しきりであった。

一方の秀秋は事情が違う。木下家定の五男として一五八二年に産まれる。家定は器量はないが、野心が無駄にある男であった。器量がないのに、何故大名になったのか。それは豊臣秀吉の正室である北政所の兄だったからこそ、成り上がることが出来たのだ。性格は淡泊だった家定は、秀秋をさっさと秀吉の養子になった。一五八五年のことである。秀吉に媚ったのだ。

秀吉は道雪以上に、この頃は子に恵まれていない。だからこそ受け入れた。だが、ここは秀秋にとっては地獄であった。誰も秀吉に媚びる為に、秀秋に不自然に擦り寄ったのだ。顔は笑っていて目は笑っていない、その姿の浅ましさと不気味さに嫌悪感がでる。だが、

その顔を出すことは許されない。周りに居た者は全て信用が出来なくなつた。秀吉の付録、部品しか見ない目を向けられながら生きなければならぬ身を秀秋は非常に怨んだ。因みに、この頃にも現在の家老である松野重元も仕えたが、秀秋は心を一切開いていない。顔もいつも能面で無気力であつた。

追い討ちは続く。秀秋は秀吉夫妻からも嫌われたのである。器量がないのと愛想がないつと印象が悪かつたからだ。その為に愛情が与えられない幼少を、秀秋は過ごしたのだ。

因みに宗茂は、両方の父から厳しく接しられたが、愛情も与えられている。その内、秀吉に実子の秀頼が産まれる。これで更に疎まれた秀秋は、また養子に出されることになる。

始めは毛利従三位参議輝元にやろうとした。だが、これに反対したのが小早川隆景である。毛利両川の一人である隆景は、この養子縁組が危険と察知した。回避方法として自分の養子にと申し出た。自己犠牲である。これに秀吉は簡単に方向転換して養子に出した。厄介払いが元々の目的なので、特別執着しなかつたのだ。

こうして、秀秋はまた養子に出された。この時に秀秋は、沢山の人間から影で嘲笑された。媚つていたのが無駄になつた腹いせである。

その後、秀秋は小早川夫妻には大変可愛がられた。隆景は自分の能力の全てを教える為に、秀秋に厳しくもあつた。だが秀秋は、秀秋個人を見てくれる小早川夫妻に嬉しかったし感謝した。その夫妻に恩返しをしたいが為に、秀秋は真剣に鍛錬をして能力を鍛えていく。

また、この時に現在の秀秋の正室である古満と結婚。古満にも小早川夫婦にも愛情を与えられた秀秋は、現在の性格が育つていくのである。

このこともあつて、秀秋にとっての父は隆景であり母は問田の大

方である。この他の者の子になったことを、秀秋は一切認めてはいない。このことを小早川夫妻に直接言った時は、偽りない喜びを夫妻が感じて涙した。それを見た秀秋も感情が高ぶってもらい泣きした。こうしてやっと、安住の地を秀秋は手に入れたのだった。

宗茂は道雪を、秀秋は隆景の偉大な背中を見ている。その勇将である義父達の、魂と誇りの重さも二人は知っている。だからこそ、ある意味似た者同士なのだろう。宗茂もこれには考えが及ばなかった。だが、秀秋の発言は宗茂も納得した。だからこそ、気が合ったのだらうと結論つけた。

その後、二人は沈黙してしまう。体も硬直していて、動かなくなった。どうも、この質問に二人は互いに感じ入るものがあるのだらう。

だが突然、秀秋は少しフラットとしながら立ち上がる。顔は真っ赤だが、思考したおかげか意識は結構ハッキリしているようだ。

秀秋は部屋に帰ると宗茂に告げた。流石に眠くなったし、明日のことをやっと考えた撤退である。秀秋は、宗茂との談話を止めるのは少し惜しい気がした。だが、仕方ないことだと秀秋は割り切った。一方、告げられた宗茂はまだ体は大丈夫だ。だがこれ以上大広間にいても、つまらなそうだと宗茂は判断。秀秋と同じく立ち上がると、二人で大広間から退出した。その後もこの二人が退出した後も宴は変わりなく続けられていた。

外はかなり涼しい。酔いも少し醒めてしまうぐらいの涼しさだ。外に出た二人もブルツと体が涼しさに震えた。出来ることなら温まった体のまま、部屋に帰ってごろ寝したかった。

しかし、廊下を歩かなければ各部屋にいけない。仕方なしに二人は廊下をトボトボ歩く。二人の控えの間にいた近侍達は、既に帰さしている。宴が開始し、初めてのの廁に行った時に命じたのだ。かな

り、危険かも知れない行為に、反対を両近侍達はしたが却下した。因みに各大名達の部屋割りには上座な者程、大広間に近いようになっている。だから自然と二人の始めの目標地点は、宗茂の部屋に決している。

二人とも沈黙して歩いていた。そんな中、秀秋は歩きながら顔を空に向けた。空ではもくもくいた手先はいなくなり、月が妖艶に光るその綺麗なのと冷徹さに見惚れた。まるで月が待ってたと自分にお冠に怒りながら、恐ろしく綺麗に冷徹にこちらを睨んでると秀秋はそう感じた。

更に、月の僕達はこの妖艶な可憐な所を目立たせようと、必死になつて無数に小さく光る。だが、いくら必死に光っていても月の邪魔にはならない。いや、月の相手にすらなっていないのが正しい。

「いやー。月が綺麗ですな。」

秀秋は前を行く宗茂に小声で声をかけた。大声は寝ているだろう別の部屋の者達を、苛立ちながら起こしかねない。それだけは酔つても秀秋は判断した。

声をかけられた宗茂は、一旦歩みを止めて空を眺めた。これに秀秋も合わせて止まる。

「そうだな・・・。」

月の綺麗さに宗茂も思わず感嘆した。そして宗茂はフツと思う。星や月などをこんなに穏やかに観れたのはいつだったのだろうと。もう覚えていない程である。だからこそ、宗茂にとって凄く新鮮だった。

暫しの間、互いに沈黙して空を眺めてた二人はまた歩き始めた。宗茂の部屋がもうすぐで着く。自分の部屋を見た宗茂は寂しさを感じた。

部屋に近づくその刹那に秀秋は言った。

「立花殿。今日は有難うございます。今日、貴殿に言われたことは、

この秀秋は一生忘れません。」

「そんな大袈裟な。」

宗茂は照れた。秀秋の素直な感謝にである。

遂に二人は宗茂の部屋である、出入りの襖の前に到着した。二人は一瞬だけ互いを見て沈黙した。そして、秀秋は少し照れて言い捨てた。

「本当です。ではまた明日。・・・今宵のことは本当に楽しかったです。では。」

言い終わると足音を立てずに足早に、秀秋は宗茂の元を去った。足音の消し方は、近侍の柳生宗章に習ったのである。秀秋は去る時に言うなり一礼すると、返事も聞かずに振り返ることもなかった。

これには宗茂は一瞬啞然とした。だがそれは、少々無礼であるからではない。何ともいえない寂しさであつたからだ。そして、そんな自分に当たり前と感じているのに宗茂は啞然とした。

（確かに楽しかった。だが、まだ話し足りないのは互いにそうだろうな。）

また今度も話したいなつと思つた宗茂だったが、明日になれば話せるかつと考え直した。

そして宗茂は明日の為に寝ようと部屋の出入り口の襖を開けた。

## 第一章五節 李氏朝鮮脱出（後書き）

宴の後の朝。遂に行長等の救出の軍議を開く。その軍議は意外な展開に向かう。

次回、転換！関ヶ原！ 第一章六節 李氏朝鮮脱出

『6 小西行長等救出の軍議』 「その総大将は・・・。」

## 間章 秀秋と重元（前書き）

飲食している読者様はこれから汚い表現があるので、見ない方がいいです。これは、本編の5の続きです。

## 間章 秀秋と重元

5・5 忠臣と大名と諫言と・・・

廊下に一人の男が、夜の暗さを恐れず歩いている。その男はどうか怒りが顔に表れている。その怒りが足音に出てるかと思っただが、意外に全く出ていない。一応の礼儀はあるようだ。その鍛えた体をこそそと動くのは滑稽である。その姿は闇にも馬鹿にされているように相手にさせてもらえないようだ。

（つたく・・・殿は何処にいるんだ。）

その男、松野重元は主である小早川秀秋を搜索していた。

普段は大名以外の家臣達の多くは、釜山城の麓のある仮屋敷にいる。ここで多くの者が私用をしたり、待機をしている。無論、大名は釜山城の中に部屋があり、そこに滞在している。

今回こそ、多くの者が偶然居るので釜山城の部屋が満室だが、基本的に五・六人の大名しかいないので部屋は沢山余る。そこには、各大名の家老が居て、ここで大名の命を待つのだ。

重元は、小早川家の家老だ。小早川家の三大家老ではないものの、上の家老だ。この重元も普段は余った部屋での待機している。だが、今回は余っていない。だから麓の仮屋敷にいる筈である、

それなのに何故、重元は釜山城の廊下にいるか。それは、秀秋の部屋番を任されてるからだ。ここには近侍で信任されてる柳生五宗章が無論、待機しているのだが総責任者ではない。重元は秀秋に一番信頼してるからこそ、部屋番の総責任者に信任されたのだ。

その重元が秀秋の部屋で、いくら待っても帰ってこない秀秋に不審がった。先に帰ってきた宗章もいい加減に焦れている。その宗章

に搜索させるかつと一瞬脳裏を過ぎつつが、結局は重元自らが搜索している。また、諫言をしなければいけないと予知したからだ。

その重元は、よく秀秋に小煩く諫言する。まるで姑かつという程、小煩い。しかし、秀秋は一切怒らない。

それは重元が自分の為に諫言してるのであって、そこには欲がない心からの諫言だと秀秋は知っているからだ。だからいくら諫言してもけして怒らない。

その重元が一番信用されている理由は、小早川家の中の家老で、一番付き合いが長いのだ。その付き合いは豊臣秀吉の養子になった時からである。この頃は無論、小早川家に養子に出されるまでは一切信用されていない。だが、それも仕方なしと重元は淡々とだが忠義に仕えた。幼い頃から秀秋を知ってる重元は人を信じられない気持ちを理解していたのだ。

その後、小早川家に養子になってからは互いに親しくなる。互いに親しくなった重元にある日、どんな諫言もしていいと秀秋自身が頼んだのだ。始めは固辞したが、至らぬ所は直さねばいかんと秀秋の決意に、重元もそれならばと現在も言い続けている。

暫く廊下を歩く重元だったが、さて秀秋を発見した。だが、秀秋の様子が少し可笑しい。秀秋は廊下の庭に通づる手摺りに、両手をかけて前のめりに顔を出している。

「殿。」

思わず音量が高くなりそうなのを何とか耐えた重元は、その秀秋の姿をを遠めで見て青ざめた。何かあったのではないのか。そう思うとドクンっと心の臓が高く鳴り響いた。

急ぎながらも慎重な足で秀秋に近づいた重元だったが、秀秋に近づくとつれて、何故か呆れた表情になっていく。心の臓も落ち着きを取り戻していく。

何故秀秋の様子が可笑しいのか。立花宗茂と別れた秀秋だったが、

その時になにをしたかが全ての原因だった。

あの時、かの者は足早に去ったのだ。遅い歩きではない。駆け足に近い速度であった。かなり酔う者が軽くの運動でもどうなるか。結論、酔いが強くなる。足早に去った秀秋はこの運動に対して、酔いが強くなりすぎた。

そう・・・かの者は庭に向かって、激しく嘔吐してたのだ。正に自業自得である。

それは、現代で言えば、温泉に稀に見られるライオンの口から温泉が出てゐるが如くである。秀秋は顔は青かったが、嘔吐を出すのが気持ちいいのか、恍惚としていた。秀秋自身は現実逃避しているのかもしれないが。

その鮮やかに出ている反吐は秀秋を嘲笑うように出ている。ううーおぼええーっと何か嫌な声がするのは気のせいであろう。月も気まぐれでこの汚らしい物を面白がつてか光が強い感じがしている。

実に悪趣味だ。

因みに、秀秋が嘔吐する前後に人は誰も横切つてない。不幸中の幸いである。

「このような所で何をされてるのですか。」

重元が秀秋の後ろに立っていうと、秀秋はビクツと体を一瞬震えさせた。どうやら重元が近寄ってくるのさえ分からなかったようだ。

恐る恐る秀秋は首だけを動かして重元を見た。重元の顔は呆れていたが、こめかみに血管が浮き出ているのは気のせいだろうか。重元は秀秋の口元を見て血管をピクリつと動かした。どうやら口元の反吐に対して不快感が出ているようだ。

重元の顔を見て、秀秋は顔が更に青ざめた。これは不味いって秀秋は惚けることにした。

「何、月が綺麗だと思つてな。」

秀秋はそういつて、重元の注意を逸らす為に自ら月を見た。そして、チヨイチヨイツと手を秀秋の隣に招く。

重元もその問いに答えるように、無言で隣に立って月を見た。

その間に秀秋は身なりを整えようと立ち上がってる。早速、反吐で汚い口元を慌てて手で拭いたが、急いだのか雑な拭き方だったので汚さはまだある。これでは格好は全くつかない。

だが、先程まで秀秋が地を凝視してたのを、重元は見ている。その手摺り外の下には秀秋の造った湖がある。秀秋はそれを何とか隠そうと上を見て、それを誤魔化そうとしてるのがバレバレである。実に白々しい限りである。

「確かに綺麗ですな。」

重元も一応乗った。確かに月を見ると綺麗だ。その月は、さも当たり前だと光る。秀秋はホッと胸を撫で下ろしたが、それは早計だった。

「でも、それはそれですな。何故、このような所で奇妙な体勢だったのですかな。説明を。」

秀秋の惚けを重元は一刀両断した。秀秋の言葉に乗ったのは、建前である。武士の情けが見るのが嫌なのか、下の反吐湖は見ない。

ただ、空を眺めて秀秋の回答を重元は待った。その無言の威圧感に。秀秋は流石に惚けを諦めた。これ以上は惚けても無駄だと観念したのだ。

だが秀秋は、重元の顔を見るのは気まずいらしく二人は暫し、空を立ち止まりながら眺めた。涼しさがより際立ってきた最中、漸く秀秋は重元と向かい合う。

「少し、酔いが回ったのだ。」

苦笑しながらポツリと呟いた。秀秋には飲みすぎは悪気はなかったが、心配させて悪かったとの謝罪の気持ちは言霊にあった。

調子に乗りすぎたつと続ける秀秋に、思わず重元は頭を抱えた。

全く人騒がせだと重元は感じた。

「今後は酒の飲みすぎを控えて下され。」

重元は秀秋に諫言した。重元はため息を、腹の底から遠慮なく吐く。

これには秀秋も何も言えずに苦笑を深める。重元は本気に心配させられたこともだが、このため息にはもう一つの理由があった。

それは、この諫言は秀秋には、全く意味がないだろうと思ったからだ。重元が諫言や苦言をしたことは山程ある。そんな中で秀秋が政務などの所謂、大名や武将の能力指摘などはどんな些細なことでも紳士に聞き入れる。

だが秀秋が私的なことや、自分の体のことなどにはあまり耳を傾けない傾向がある。そのことを重元は重々認知していた。秀秋は自分に興味が皆無なのかもしれないと重元は読んでいる。

「分かった分かった。」

案の定、重元の諫言に秀秋は軽い返答だ。重元は予想通りだと胸中で、今度はため息をする。この何ともいえない表情の重元の顔を見た秀秋は、苦笑していた顔を急に引き締めた。

「これから軍議次第で激しい戦になるやもしれん。いつでも出陣出来るようにしておけよ平八。」

そついうと秀秋は部屋に歩き始めた。足取りも荷物を降ろしたおかげか、かなり軽くなった。

これに一瞬、体が固まるがハツとして後を追った。あれでも頭脳は常に働いておられるのだなとかなり失礼な考えを重元はしたが、感嘆もした。

・・・この後の地獄が待っているのを知らずに。

「んぎゅっ。」

秀秋は後、部屋がもう少しの所で転んだ。昨日の軍議といい、よく転ぶ男である。秀秋は転んでから何故か立とうとしなかった。

これには慌てて重元は秀秋を起こしにかかる。もしや転んだ際に、打ち所が悪かったのやもしれんと重元が思ったからだ。

秀秋は昨日の軍議前の入室の時も転んだが、この時の傷はあの時よりも深かった。足取りこそ軽くなったものの、気分は快調ではな

い。やっと落ち着いていたのに、この転びが意味するのは。

「ううーっ。」

「殿。殿。如何なされた。」

「は、はぎぞうだ。」

「え、ちょ、ちよっと待ってくだ．．．ぎゃー!。」

．．．．．一匹の野良犬の遠吠えが聞こえた気がした。

## 間章 秀秋と重元（後書き）

・・・すいませんでした。気分を害された読者様にはお詫び申し上げます。これからもこんな転換！関ヶ原！をよかつたらでいいんで応援して下さい。

## 第一章六節 李氏朝鮮脱出（前書き）

これが歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章六節 李氏朝鮮脱出

### 6 小西行長等救出の軍議

釜山城には陽が出ている。今日は晴天とはいかず、雲と逢引しながらの登場である。今日は少し、こちらを見る気持ちではないから光は弱い。

いつものことだが、天は陽と月との交代の際に喧嘩にならないかと恐々としている。だが、いつも淡々と月は交代を迫る。そして、それを陽が承知して交代が完了する。月や陽からすれば、一日もその滞在が厭きるからである。気分転換しなければ、毎日役割を勤められないのだ。

その陽の出す光は弱くとも闇を嫌がらせた。そして、闇は渋々撤退していったのだ。そして、そこに生きるものや寵愛を受けるものも、休む為に数少ない闇に隠れている。やっと光が戻ったと喜ぶものもある。光に寵愛を受けるものや、生きるものだ。弱い寵愛でも、かのもの達は文句はいえない。慈悲であり、気持ちなのだからである。

だから、かのもの達はその状況でも文句言わずに動き出す。今日も生きる為に。・・・まさにこの世は光と闇の輪廻に惑わされる世である。

釜山城の大広間には、既に昨日の軍議に参加した大名達が集結していた。まだ、完全に陽は頂点にあがってないからか、それとも陽の光が弱いからか今日は涼しい。大名達は上座、下座と座してはいるが、段が少し上になっている最上座は誰も座していない。ここは本来、総大将の席なのだ。

昨日の石田三成の使者は、日ノ本軍の使者としてなので座したのである。本来なら日ノ本軍の総大将である、宇喜多秀家がここに座してる筈である。

だが、かの者は現在日ノ本に居る。実は、今年の春には豊臣秀吉の体調が悪いのは周囲が承知していたことだ。その際に、かの者は日ノ本に帰国命令で帰国して以来、二度とこの李氏朝鮮に出兵していない。

何故帰国命令が出たかという、秀家は秀吉に可愛がられたからだ。その可愛い秀家を枕元に置いておきたいと秀吉が希望してからだ。だからこそ、現在は総大将不在で前線は戦をしてるのだ。

だから、このような重要な大勢居る軍議には、最上座は誰も座せれない。因みに、普段はというと小早川秀秋が座している。どんなに馬鹿にされようと、ここの城主を一応は任されてるからだ。

しかし、出陣要請がなければ敵の襲来もない。だから軍議などは滅多になかったのだ。

先程から大広間に集結した大名達だったが、誰も声をあげない。大広間ではシーンと煩く響くだけである。黙って座してる大名達は、まるで石像である。様々な顔と体格、それに平服も各大名違うからある意味では厭きない。

何故沈黙してるのかというと、これは軍議の進行役がない為だ。本来は総大将がするが、それはいない。だから大名達はただ沈黙して座したままだったのだ。

「さて、諸大名方も集まられたのだから、軍議を始めませんか。」上座にいた細川従三位参議忠興が声をかけた。いい加減に焦れたのか平服の紫色が何故か苛立ちを表すのを惹きださせた。

この声かけに皆の顔も引き締まる。だが、忠興の声かけに多くの大名達が待っていた。いや、誘い出したと言ってもいい。一人の男が忠興に対して発言した。

「この際、細川殿がこの軍議の進行役をされませぬか。」

この中座からの野太い声は、茶色の平服によって更に強調させるこの発言主は、加藤従五位下左馬介嘉明である。そう、大名達はこの進行役を誰かが名乗り出るのをジッと待ってたのだ。忠興はそれに乗ってしまった形だ。

因みに嘉昭は、賤ヶ岳の七本槍として有名な武将だ。今回の出兵には、日ノ本軍の水軍の将として各地を転戦している。

さて、指名された忠興は本人は困惑したが、他の大名達には特に反対する声もない。かの者は武将としての名もあるが、茶人や詩などの文化人の才覚もある。寧ろ、こちらの方が有名であって、人と戯れるのは得意分野だ。

だからか、こういう場所の進行役には不足はなかった。忠興は困惑で一瞬、表情を引きつらせたものの、仕方なく承知した。忠興は最上座の一步手前、つまり段の前に移動しそこに座し直した。こちらなら、左右に座している者達を見ることが容易だからである。

「では、不肖ながら、この忠興がこの軍議の進行役をさせていただきます。」

流石に皆から選ばれただけはある。忠興の態度は凜としていた。腹が据えたのも無論だがある。

進行役に必要な要素は、どんな時も中立であれっである。片方に偏れば臆盾だ、八百長だ、などの批判が噴出する。無論、このことは忠興は認知している。

忠興は一呼吸をした。座した所でグルツと目を動かして周りを見渡す。忠興の前にいる大名達の緊張した顔があった。緊張してるからか、顔色が各自バラバラで様々な色合いがある。

各大名達の緊張感もかなり高まっているので、大広間の空気も涼しさが弱まっていた。それはこの軍議が、熱くなる論議になることを予知しているようであった。

「では、軍議を開始する。」

忠興の言い方は、上からの物言いである。普通の者ならば、無礼極

まりない行為だ。だが、忠興の独特な雰囲気や、本人が細心の注意を払っているのが顔の緊張感から見て取れる。だからか、忠興の物言いに不快さじゃない。大体、それぐらいの問題なぞ可愛いものである。

「今回、李氏朝鮮からの撤退が命じられたことに、まず異存はないか。」

忠興が口にしたこれは、確認事項である。無論皆は首を頷く。当然だが、大名達は是つとの回答だ。大体直ぐにでも帰国したい各大名にとつては、この命は渡りに船である。

忠興はゆつくりと大名達の顔を一人一人見て、確認した。そして確認し終わると首を頷かせた。

「異存はないつと決定しました。では、ここにはいない各大名に書状を送ることに異存はないか。」

忠興が口を開いたこれも、確認事項だ。実は昨日の内に、既に昨日の軍議に檀家しなかった各大名達には、李氏朝鮮撤退の書状は送っている。このことは、無論だが各大名達は承知している。

だが、忠興はしつこく聞いた。万が一に聞いていない大名がいるのかもとの考えてだ。実に忠興は慎重で細心なことである。

これには数人の大名達が、一番の問題になかなか入らないことに焦れたのか、顔に苛立ちが出た。だがそんな大名達を尻目に、忠興はしれつとして全く気にしない。

忠興は、自分が進行の規則であり、気に入らないなら出て行くがいつとの態度である。実に胆が据わってる。

この問いに大名達は全員、首を頷いて是つとの回答を示した。

忠興はこれを見て、更に言葉を続けた。

「送ることに決定しました。では、撤退で最も困難なことを挙げられよ。」

「ええい。そんなの全州の順天倭城にいる大名達の撤退だろう。」

上座に座している福島正則がこれに苛立ちながら応えた。顔も平服も真っ赤に染まってお揃いである。流石に怒鳴られた忠興は少しだが怯えた雰囲気を見せた。

元来短気で短慮な正則はこういう遠まわしな発言や細かいことは大嫌いだ。だから、簡単に進まない軍議に苛立ってしまったのだ。実は、昨日の宴で酒を飲みすぎや睡眠不足などにより、体がだるいことや頭が痛いのもその苛立ちを悪化させた。

昨日始まった宴の際に、正則は次々と酒の飲み比べをした。だから酒をしこたま飲んだのだ。更に、最後の酒の飲み比べた加藤清正と明け方まで飲んでいたのだ。因みに、二人の飲み比べは結局は勝負はつかなかった。

撤退の足掛けは小西行長等が最も問題ではある。だがその他にも黒田従五位下甲斐守長政等が、亀浦倭城に滞在してるなど李氏朝鮮で城に籠っている者も結構いる。だがこれ等は小西行長等に比べれば容易だ。敵が近くに囲っていないからである。だから、李氏朝鮮撤退の書状が、各大名達に着き次第、即時撤退するだろう。

さてその李氏朝鮮撤退の際には、ここの釜山城に寄ってから、釜山の港から日ノ本に向かう手筈になっている。これは、日ノ本軍の誰もが是つとしたことである。

これには、無論訳がある。

「その時に、李氏朝鮮の水軍が厄介だな。」

浅野幸長が呟くと皆が苦悶する。その幸長だが顔色が真っ青であり、平服の橙色と混雑してて妙に味のある感じになっている。しかし緊張で顔色が真っ青になるには少々青すぎる。

これは、正則の飲み比べで酔いつぶれた幸長は現在、かなりの二日酔いなのだ。だから必要以上に顔色が悪いのである。

さて、日ノ本軍の最大の悩みはその幸長の意見で露呈した。

ここで、簡単に整理しよう。李氏朝鮮での日ノ本軍の戦果をいえ

ば、勝利が多い。しかも現在、明の援軍が加わっても戦況が五分以上に保っているのは奇跡的だ。島津義弘が十月に泗川の戦で、明・李氏朝鮮連合軍に大勝利したのは記憶に新しい。

だが、これは陸戦での話である。日ノ本軍は陸戦では恐ろしく強い。だが、日ノ本軍は海戦では敗北が多い。李氏朝鮮の将である、李舜臣が率いる水軍が異常に強いのだ。

李舜臣は陸戦は弱い、海戦では異常に強い男である。これはちゃんと結果がある。初めから水軍の司令官だった李舜臣は開戦から閑山島海戦などに勝利して戦功を挙げる。だが、政戦で敗北して陸軍司令官に更迭された。それから再度開戦されてからの巨済島奪還の際に敗北するなど李舜臣は負けに負けた。これ程弱いのかと敵味方が首を傾げた。だが、政戦で李舜臣に勝って水軍司令官に就任した男が戦死すると、再び李舜臣が指揮を取った。李舜臣が更迭されてから、漆川梁海戦の敗北など負けが続いた。だが、李舜臣が再び就任したからは、鳴梁海戦の勝利など勝利が続くようになる。正に生粋の水の男なのだ。現に、自他共に以上の経緯があつて李舜臣の能力は、陸戦弱し海戦強しで常識なのだ。

さて、その李舜臣と行長等の救出がどう関係しているのか。実は行長等が籠城している順天倭城は海に面してるから、撤退にはどうしても李氏朝鮮の水軍を無視出来ないのだ。無論、陸からも救出は一応は出来るが、そこには数多い連合軍の陸兵がいる。水軍よりも遙かに多い敵兵がいる仲での陸からの救出は、どう見てもかなりの愚策であつた。一方の敵の水軍は強いが数は少ない。

なので海戦に全力で向かえば、日ノ本軍は多分勝利出来る。これは、鉄砲や大砲などの安宅船に乗せて全ての水軍で出陣すればのとだ。数は日ノ本軍が圧倒しているので、それを最大に生かすのである。

だが、李舜臣はこのことを承知している。だから、基本は小規模な戦に持ち込んでいる。だが、これは李舜臣だけの責任ではない。

漆川梁海戦の敗北で李氏朝鮮の水軍がほぼ壊滅したからである。水軍に勝利したからといっても船が増えるのは微量である。兵糧も軍資金も僅かしかない。絶対的に戦力が足りていないのだ。だから、大群で動かせば李舜臣は見守ることしか出来ない。だから、釜山城で一旦合流してからまとめて帰国する手筈なのだ。現代風にいえば、バツファローが大群で移動することにより、チャーナーなどの天敵から身を守るのと似ている。

海戦での絶対勝利には大勢の水軍が必要である。さて行長等救出の際に大規模な水軍が動かせるのは、実は残念ながら不可能であった。それは、皮肉にも李氏朝鮮の即時撤退が理由になる。

日ノ本帰国の際は、陸兵の乗る船には水軍の護衛が必須である。そして、大名達の全てを一斉に帰国させる訳にはいかない。

それは何故か。確かに敵の水軍に襲われる可能性は極限に低くなる。しかし、それは即時撤退の命を完全無視する形になるのは、日ノ本軍にとって不味かったからからだ。命の発令には三成だけでなく、五大老という御偉い様の命でもあったからである。

だからあくまで即時撤退をしつつも、行長等救出をするのがこの大名達の最終目的だ。

「陸と海、両方で向かえば何とかなるやもしれん。」

平服を青で極めてる清正が唸る様に言った。確かに、日ノ本軍の海戦と陸戦、両方の完全敗北の可能性は低い。あくまで行長等を撤退をさせればいいのである。だから万が一、戦闘中に行長等の撤退をさせるも仕方なし。勝ち負けはこの際、関係ないはないのだと清正は言葉を続けた。結構厳しい内容である。

清正の発言に、皆は様々な反応を示した。論議にはなったが、概ねはこれしかなさそうであるつと合意に近いものがあつた。

特に陸戦は明・李氏朝鮮連合軍も嫌がつて避ける可能性があるの期待出来る。片方に力を集中させずに分断させての策に合意の空

気があるのを、忠興はしつかり読んでいた。

「では、陸、海からの両面からの救出に異存はないか。」  
忠興の催促に、結局は全員同意した。

この他にも撤退の第一陣は亀浦倭城に滞在してる長政等とし、脇坂従五位下中務少輔安治が水軍の大將として警備することなどが決まった。

また、撤退になるからには各自、用意をすること。撤退の最後の一団は釜山城を焼失させることなどの撤退についての話が進む。ここは全く揉めなかった。

色々な論議で決めてきた軍議だったが、遂に終局に向かっての最後の設問に差し掛かった。忠興がその設問をゆったりした口調で言う。

「では、最後に小西殿達の救出に対する、陸、海戦の総大將などの配置を決める。」

ここまで、かなりの時間がかかっているが、これが最後の難関である。総大將といっても、陸の総大將と海の総大將がいるので二人必要である。両方の挟撃が鍵になるのだから、この総大將選びは重要である。

この総大將決めは大変論議を醸し出した。色々な総大將が各大名から出た。忠興もこれを制するのに苦労した。

話が進み、海の総大將に清正が選ばれた。これは意外にも清正が自らの挙手である。自らの挙手はないと思った各大名達は、大変驚愕した。だが、清正の並々ならぬ意思を感じたから結局は選ばれたのである。

清正からしたら嫌悪している行長に皮肉を言いたいが為である。無論だが、ここで自分の武勇を見せ付けることも目的としてある。

こうして、最後の陸の総大将を決することとなった。これに清正の就任決定に、直ぐ口にした大名がいた。

「それには、某から推薦したい者がいる。」

その大名である立花宗茂が、黒の平服がより印象を際立たせるような感じで静かに口を開いた。この発言で一斉に宗茂の顔に、大名達の視線が集まる。ここまで、特に積極的に発言しなかった男が言い出した、突然のこの発言である。注目が集まらない訳がない。

ゴクリと誰かが喉を鳴らした。その音は各大名達にも耳に届いた。そんな空間の中で、宗茂は落ち着いた感じであつた。そして、一呼吸を置いて宗茂は発言した。

「その総大將は小早川殿が宜しいかと存じます。」

予想外の名に大名達は驚愕したが、秀秋自身もこれには驚愕した。まさかのご指名である。発言した宗茂は堂々としていている。それは、指名して当たり前つと態度で語るようなものであつた。

大広間が大名達が騒然とする中、秀秋は下座で呆然としていり。あまりの衝撃に呆然としてる阿呆の顔をしてる秀秋は、正に青い服と同調した雰囲気になっていた。

その秀秋を見た、殆どの大名が不審そうに宗茂を眺める。どう思考しても秀秋を推薦した宗茂の胸中が読めないっと感じ、今度は宗茂に不信の目が光った。

「静かに、落ち着きなされよ。」

「何故じゃ。」

忠興が必死に騒動の制止を求める中、義弘が宗茂に質問した。義弘は流石に老練というか、老獪というか驚愕こそしたが一切顔に出さない。その顔は平服の土色と同化していて変わりはない。

だが、理由は分からないような表情であつた。義弘の言葉を聞き、騒然としてた皆は嘘のように静まり返る。宗茂は静かに語りだした。「小早川殿の兵は戦をしてないので元気だ。それに、一応は名は知られている。元々は総大將だったのだから、その名を使わない手は

ない。家柄もいい。だから総大将に推薦をした。ついでに某は小早川殿の方に従う。」

これでは、秀秋というより小早川家を推薦したことになる。宗茂は秀秋が無能にも聞き様では聞き取れる。

しかしその発言に対して、意外に他の大名達の反応はいい。一万近く of 兵を率いていると言われる秀秋は無能かもしれない。だが、義父の小早川隆景は名将なのは誰もが知っている。碧蹄館の戦では、宗茂と隆景は共に戦をしている。この宗茂は、秀秋ではなく秀秋の兵達を見てるのだらうと殆どの大名達が勝手に解釈した。

「なるほど・・・。よし、濃も小早川に従おうではないか。後、一人いたら陸は問題なかるう。」

義弘は突如、秀秋支持を声高々と表明した。顔は老獺を隠そうともしないものである。だから、各大名達に義弘の思惑は分からなかった。

義弘の発言に、おずおずと寺沢従四位下志摩守広高も是非と言ってきた。これ等の成り行きには大名達に困惑感が漂った。

やつのことで呆然としてた秀秋はやつと意識が戻ってきた。宗茂のまさかの総大将推薦だが、秀秋は正直乗る気ではなかった。

秀秋は確かに行長等は救出はしたかった。それに対しての協力も惜しむつもりもない。だが、それは一大名としてである。

「恐れながら、私如きがやるのは皆様が困惑しましょう。なので・・・。」

辞退したいつと秀秋は消極的な発言をした。秀秋はそれから必死の形相で、大広間に居る大名達に総大将推薦の固辞を並べる言葉を発した。

発言を言っている秀秋を無視して宗茂は言葉で押した。

「某は小早川殿以外にいないと申しているのだが・・・。」

宗茂男の声も低く、腹の底から出している。顔も憤怒しているよう

で赤く、不機嫌さを隠そうともしない表情だ。雰囲気も刺々しいものを醸し出して、大広間の空気をピシリッと亀裂が入った音がした。はつきり言って宗茂のこれは脅迫である。

秀秋もこれには発言を止めて、大いに困惑した。宗茂がそこまで押す目的も意図も、秀秋は全く分からない。その他にも、これまた義弘が軽々しく宗茂に賛同し、つられて広高も賛同するように発言したことも、全く秀秋には分からないことだった。

「では、小早川殿を陸の総大将にすることに異存はないか。」  
忠興はこの空気を断ち切りたかった。まだまだ決めることもあるから混乱は不味いとの判断だ。だから早めに採決したのだった。

その時、忠興の採決に待ったがかかった。

「私はその総大将推薦は反対だ。」

宗茂の推薦に対して、怒鳴るように真っ向から反対した上座に座してる者がいた。その男に大名達の視線が集まる。その反対意見に宗茂は、苛立ちの為か舌打ちを隠せなかったようで、小さく打った。

この反対した者の名は、吉川従四位下侍従広家であった。顔は興奮からか、真っ赤にして平服の薄赤色よりも真っ赤にした。その目は宗茂には向かわず、推薦された秀秋を見ている。その目からははつきりと侮蔑を示していた。

この広家は大の秀秋嫌いであった。秀秋が小早川家にいること自体不快であり、存在すら否定的なくらいに嫌悪している。

元々小早川家と吉川家は、毛利家を本家とした分家に等しい。先代の隆景と吉川元春は毛利両川として、互いに本家を助け合う仲だった。だから、広家も隆景には敬意をしている。

だから、小早川家が秀秋を養子にした時に毛利両川の絆は崩れた。いや、厳密にはそうではない。

「私も秀秋の推薦には、些か疑問を感じます。」  
広家に青い平服の男が静かな口調で同調した。今度はこちらに皆の

視線が集まる。宗茂は今度ははつきりと分かる程、舌打ちした。

この中座に座して発言した、男の名は小早川從五位下筑後秀包である。この男もまた秀秋を評価していなかった。嫌悪感もあるが、どちらかと言えば廃嫡された恨みからである。

この男は秀秋が養子に来る前にいた、小早川家の養子の者だった。しかも、血筋は毛利家の本家の者と大変良かった。

だが、秀秋が来てたか秀包は直ぐに小早川家から廃嫡された。流石に哀れに思った隆景は秀吉に小早川家の別家を立てて欲しいと懇願。秀吉は秀包のことを気に入ってた。それは秀の字を与えた程であり、即座に認めた。こうして、小早川家に二家出来てしまったのである。

秀秋の小早川家とは仲が悪い吉川家だが、秀包の小早川家とは仲は悪くはない。だから現在の毛利両川は、秀包の小早川家と広家の吉川家となっている。秀秋は仲間外れにされた形である。

「濃も秀秋殿の総大将はどうかと思うんですがね……。」  
また一人、上座から秀秋推薦の反対のしゃがれた声が出た。だが、この声に反対してた二人は何故かしかめっ面をした。更に秀秋も二人の反論には心中である意味反対するのに納得してたが、この男には納得はしなかった。この三人に共通するのは、この男を嫌悪しているからである。

その男は憎なのか、そのような格好をしていた。服は黒であり、何故かそれが合っているこの男の名は安国寺恵瓊という。

恵瓊は毛利家の外交僧の身分である。だがら僧の身分なのに大名になってしまった男なのだ。恵瓊は秀吉に大変気に入ってたから出世が出来たのである。

何処が気に入られたのか。秀吉の主であつた織田信長存命中の時に、信長は途中で没落し秀吉が飛躍するだろうと予知した。本能寺の変の際に、毛利家と秀吉が対峙していたが講和に力を貸した。毛

利家の完全服従の際にも交渉をこの恵瓊がした。等により秀吉からは、毛利家で一番の寵愛を受けていた。

その恵瓊は何故三人に嫌悪感を持たれたか。それはこの男は些か毛利家で威張っているのと、野心家なのに対してである。恵瓊は秀吉から寵愛を受けているのをいいことに、毛利家中をいよいよに操っている。恵瓊に逆らうようならば、直ぐに秀吉の名を出して脅すのだから始末が悪い。毛利家第一主義には苦々しい限りである。

秀秋は恵瓊のことを嫌悪してはいるが、少々理由は異なる。勿論、毛利家も大事であるが恵瓊を警戒しているのが正論である。それは義父の隆景がよく、恵瓊は信用するなつと口にしてたからだ。敬愛している義父の隆景の言葉を信じた。だから嫌悪しているよりも、警戒感の方が強い。

三人の反対の意見により、本格的に総大将決めが荒れそうになることを察知した。現に宗茂は眉間に血管を浮かばせたり、義弘もそれに同調するかのような不機嫌さを出している。雰囲気は両者の対立で最悪な状況になったことに、忠興は本気に焦った。

忠興自身は実は総大将は誰でも良かった。ただ、本人自身がやることには嫌であった。だから、この際秀秋の名が出たから、それでさっさと決定したかった。

「静粛に。では、改めて多数決で決します。」

忠興は機転でこれ以上の反対派を即座に封じた。三人はまだ反対を言っただけで、意見したとは言えない。だから不満そうに忠興を見たが、忠興はそれを無視してさっさと採決を迫った。

そして、多数決では辛うじてだが秀秋の総大将を賛同が勝った。これは、秀秋の評価ではなく、秀秋の小早川家の評価を重んじた采配であった。一方の反対した者達は、秀秋の実力や嫌悪感から反対したのである。

「採決は小早川殿を陸の総大将と決しました。・・・宜しいな。」

「分かりました。陸の総大将はこの不肖、秀秋がします。」

秀秋はこれには洪々認めざる得ない。何せ、一応は多数決で勝利した意見なのだ。顔は苦洪に満ちている。反対派の大名も何か言いたげだったが、決定には逆らえなかったようで沈黙した。

この他にも簡単に海軍の参戦大名などを決めた。今日はこれ以上にして、詳しいことは明日に持ち越しすることとし、軍議は忠興が終了の声を出して終了した。

## 第一章六節 李氏朝鮮脱出（後書き）

秀秋は困惑した。何故、この自分が陸の総大将に任命されたのかを・  
・・。

次回、転換！関ヶ原！ 第一章七節 李氏朝鮮脱出  
『7 陸総大将 小早川秀秋』（この童・・・。）

## 間章 忌まわしき過去との完全決別（前書き）

秀秋と秀吉の最後の接見の場面です。これが歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 間章 忌まわしき過去との完全決別

### 6・5 秀吉と秀秋、最後の接見

一五九八年六月末の日ノ本が舞台となる。この時期の天気は梅雨なので、大抵は悪い。そのせいなのか今日も生憎の雨である。陽も今日は機嫌が悪く、隙間からの光しか見せていない。しかしこれは、梅雨なので仕方なかるう。ザーザーと容赦なく降る雨は少々煩い。気温も微妙な高さで湿度で、体が自然の錠で拘束されてる気分になる。

鬱な気分になりそうなか、小早川秀秋が小姓が先導されながら伏見城の廊下を歩いている。その顔は無表情である。だが、胸中には激しい怒りと暗い陰気なものがあつた。その感情に合う黒の平服を着た秀秋は毒を吐く。

（つたく。あの猿無勢が。）

秀秋は大広間にいよう、豊臣秀吉に接見する為に歩く。秀吉の顔を見るぐらいならば、正室の古満か、最近は会っていない義父の小早川隆景の正室であつた問田の大方に会う方が、百万倍いいつと秀秋は胸中で断言した。そして、フツと問田の大方のことを思い出す。

問田の大方に関しては、現在は隆景亡き後、周防国の吉敷郡問田に移り住んでいる。この際に秀秋が是非、本拠地にある名島城に居て下さいと秀秋は懇願したが、拒否された。亡き夫の操と弔いをせねばならないつと優しく諭された秀秋は嫌々認めた。

しかし、暇さえあれば書状のやりとりをしてる。それに、完全に諦めてる訳ではなく、まだまだ勧誘している。本人も無粋なのは十

分承知だが、義母とはいえ、本当の母と思ってるからこそである。派手ではないものの優しく笑い続ける環境を作ることが親孝行だと思ひ、秀秋は近くでその環境を作ってあげたいのだ。

（義母上のいとこ煮は頬が落ちる程上手かった。また食したいものだ。）

いとこ煮とは本来、冠婚葬祭の席に出す郷土料理だ。だが、問田の大方は幼い秀秋によく手作りで振る舞ってくれた。その優しい味が問田の大方の性格を表していて、秀秋の好物である。無論、このことは古満も問田の大方から教授されてよく調理する。美味しいは美味いが、やはり問田の大方が一番であった。

さて・・・何故秀秋がここに居るのだろうか。世は李氏朝鮮の再出兵を決断して、秀秋もそれに一大名として出陣している筈である。それが本人が望んでないことでもある。秀秋の日ノ本強制帰国は、李氏朝鮮の現地総大将解任兼国替え命令未遂の時からである。

あの時とは違うのは、小早川家全員の帰国ではなく、秀秋を含めた五・六十の人数での帰国であつて、実に小規模であることだ。しかも、なるべく早くに伏見城に到着する為にかなり無理を押した強行日程だった。これは鍛えた精鋭近侍を選んだだけはあつてか皆は平然としていたが。

（正成と頼勝の二人が任せてるから問題ないだろうが、迷惑極まりないっいたらありあしない。）

李氏朝鮮に残した小早川家の兵の指揮は、家老筆頭の稲葉正成と同じく家老の平岡頼勝に全て預けた。二人も秀秋の心中を察してか、苦笑しながらも受けてくれた。

元々、秀秋が立派に成長するまでは兵を指揮するように、ある男から正成と頼勝は命じられていた。そして、二人はその男を介して秀秋が、義父の隆景に養子に出される際に、目付け家老として仕えたのだ。

その男こそ秀吉であつた。秀秋の落ち度も報告しろつと厳命もされてる。秀吉からしたら、それで処罰したかつたのだ。無論、この時は隆景が生存してたので死去してから処罰をする腹だ。秀秋は処罰したいが、有能で名将な隆景を連帯で失うのは、いくら秀吉でも不味いと認知していたからだ。

その二人は既に秀吉の命は全く無視し、秀秋に心からの忠誠を誓っている。その点を秀秋も十分承知しているからこそ、任せられたのだ。

さて、秀秋に視線を戻そう。秀秋はまだ暗い心を持ちながら廊下を歩いている。伏見城は中々の大きさだったので、各部屋の距離も相当あつたから仕方ないことだ。

秀秋はどうしても秀吉に会いたくなかつた。憎悪しているからである。自分の人生をここまで無茶苦茶にしたこと、自分をボロ雑巾のように扱ったことなど恨み言は沢山ある。

（ま・・・今回は秘策があるし、仕方ないが会つてやるか。遠目かな。）

秀秋は秀吉の顔を間近で見たくないの、秘策を弄している。その秘策に少し寄り道もしている。そう考えると、秀秋の心は何故かまた黒くなつた気がした。そして、その黒さに反応してか、天候の明るさも弱くなつたようであつた。

いよいよ秀秋一行は、伏見城の大広間の出入りの襖前に着いた。

秀秋は流石に緊張した顔になる。小姓もその秀秋の表情を能面で確認した。無論、顔だけではない。太刀を取り上げた後、武具を隠し持つてるかもしれないと体を検査するかのように凝視する。

小姓からしてみれば、秀秋如きが所持しても意味がないのだからうがつと嘲るが、念には念だ。見た限りはなさそうだと検査を終了する。

「殿下がお待ちしております。ではお入り下さい。」

小姓は襖の前で促した。ここからは秀秋が自ら先導でなければなら  
ないからである。このことは礼法であり、どんなに世間が馬鹿にさ  
れている秀秋でも大名だ。高が小姓が公式の接見で先導など片腹痛  
いことである。

秀秋は襖前に到着してみると結構冷静であつた。今更になつて国  
替え断行はなかるうし、大方予想してた通りであろうと胸中で感じ  
た。もし、予想通りならば、これ程嬉しいことはないつと胸中で狂  
喜乱舞するのだがつとも嘲笑した。

秀秋はそつと襖を開けて、大広間に入室した。ここは無駄に広く、  
しかもやたらと豪華であるので、大変嫌味な大広間である。大広間  
は換気しているのか、ジメツと梅雨特有の空気の感じはなかった。

秀秋が無表情でその大広間に入室すると、そこには三成が何故か  
上座に座していた。秀秋からしてみれば三成がここにいること自体  
が不快だし、五奉行の仕事をしるよ暇人文官つと罵りたかつたがグ  
ツと堪えた。前の強制帰国の際に、三成とは決定的な仲違いをして  
る。なので本当に、三成の神経質な顔を見るのも、秀秋にとっては  
大変不快である。

その他にも、大広間の最上座には秀吉と小姓四人がいた。それ以  
上はどうやら、秀秋が黙視した限りではいまい。そして、秀秋は前  
を見た。

大広間の一段高い最上座には、赤い布団が敷かれている。そこは  
秀秋には見えていないが、金色の寝服を着てる秀吉が布団に包まっ  
て寝ていた。本当ならば元氣を見せ付けなければならない立場であ  
る。だが秀吉にその力は既になく、全く起きれないのだ。

秀吉の悪化した状態で体全体を、全く変えてしまった。顔も痩せ  
老いてて、目も虚ろである。髪もすっかり白髪になつていて、量も  
少ない。出入り口の襖に足を向けている秀吉の顔色は土色であり、  
体調が宜しくないのが一目で分かる。

その秀吉が寝てる布団の四方に一人ずつだが、ひよろつとした小姓が警戒しながら座している。平服は秀吉の趣味か随分派手な色である。秀秋以外ならもう少しは武芸の嗜みがある者達を選んだだろうと思われる程、役に立つか疑問な小姓達がいる。

秀秋は目がいいので、秀吉を目聡く秀吉の容態を黙視し、予想が確信に変化したことに喜んだ。秀秋は最近、秀吉の容態が急激に悪化したと思っていたのだ。

（どうやら・・・思い通りの展開だな。あの猿が遂に死ぬのか。これ程、嬉しいことはない。）  
だが、油断はならん」と秀秋は緩みそうな心を引き締める。

秀秋は大広間を堂々と歩くと、どっかりと座した。しかし、座した場所はかなり後方であり、出入り口の襖に近い。これでは、まず老弱した秀吉の声が聞き取れる訳がないのだが、秀秋は気にしていないようである。これで舞台の準備が整った。

「もう少しあがられよ。」

上座に居た三成が声を秀秋にかける。三成は秀秋の行動に苛立っているのか、顔が若干朱に染まっていた。青い平服が、その顔をより印象を高めさせている。しかし、秀秋はとんと知らぬ顔である。

この三成の声に、否応なしに小姓達の緊張感が高まる。カチャツと小姓達は座したまま刀に手をかけた。万が一の為の対策である。三成が怒鳴りかける寸前に、秀秋は大声ではなく普通の声で三成に話しかける。

「すいませんが、石田殿・・・。」

こう言った秀秋は、困り顔を作って手招きをした。まるで、肉食植物が獲物を誘う有様に似ている。

この秀秋の行動に三成は不審がったが、渋々立ち上がると秀秋に近づいた。苛立ちからか、足音をズンズンっと喧しい音を出しながら

ら近づくと三成。

三成が秀秋の前に立つと、秀秋は耳を拝借つと三成に、更に要求した。その顔は困りながらも、緊張感があつた。この秀秋の表情には三成も何か事情があるつと漸く察したのか、顔は不快そうだが素直に聞くことにした。

三成が屈んで耳を傾ける仕草に、秀秋は心中で嘲笑した。それは普段と違って、何と似合わない行動であろうつと嘲笑したのだ。

三成は普段、五奉行の筆頭として辣腕を振るっている。なので、各大名達に対する態度は大変高圧的だ。その態度を苦々しく思ったり、憎悪している大名達は数多い。これは、李氏朝鮮出兵してる大名達を抜きにしても、三成の嫌悪感を持つ者達は多いのだ。

その三成が、秀秋に言い様に扱われている。その三成の嫌々だが低くする態度に嘲笑してた秀秋だったが、流石に顔にそれを出していない。現実には秀秋は困惑した顔である。そして、その顔で言葉を発した。

「実は、太閤殿下に近寄ることは曲直瀬玄朔殿から禁止されてるのです。」

小声で呟いた秀秋の発言に三成は驚愕した。そして思わず大声で立つてしまった三成に、秀秋は胸中ではくそ笑む。これが、秀秋の秘策であつた。

その二人を遠目で凝視する小姓達は、不審がりながら首を傾げる。奥に居る小姓達からは、二人の会話は聞こえなかったからである。

秀秋がここの大広間に来る前に、京に居たある男を訪ねていた。その男、玄朔は名医の曲直瀬道三という医者から名を継いだ名医である。現在、秀吉の診断もこの玄朔が担当している。

秀秋は懷からなにやら書状を出すと三成に差し出した。三成は半ば呆然としたが、その書状を奪い取るように受け取り、また慌てて秀秋の前に座して、目を書状に走らせる。

書状の書き主は玄朔であった。そこには、秀秋は李氏朝鮮に長く滞在しているつと前提とし、最近の李氏朝鮮は流行り病が出ていること。それを老弱している太閤殿下に病がおうつりになられると危ないこと。なので、同じ空間に居るのはいい。だから、近づいて病をうつすことがないようにしてほしいこと。など直筆と判が押されている書状内容を読み終えた三成は困惑し、思考し始めた。

秀秋の秘策はこうだ。玄朔に面会は別として、近づけさすのを禁じる書状を書かせる。秀吉の容態は最悪である。そして、大広間にいる誰かに玄朔の書状を密かに見せる。その書状を見たものは秀秋を近づかないことを許可。そして、秀秋は秀吉の目の前に立たない・  
・以上である。

だが、これには欠点もある。秀吉が本当に危篤状態なのかである。こればかりは玄朔にいくら口説いても、秀秋には頑として教えなかった。もし、秀吉が危篤状態でなかったら書状の効力が弱くなる。秀吉の一言の前には、玄朔の書状は紙切れになる恐れがあるのだ。危篤状態ならば、秀吉の発言力はほぼなくなる。それは秀吉悪化を促進させる行為を、書状を渡した者が許さないからである。

（上手くいったな。）

秀秋は目の前に座す、三成の困惑を隠せない表情に内心、凄く満足した。そして、自分の秘策が上手く言ったことを確信した。だが、まさか三成が近くにいる者になるうとは思っても見なかった。三成がいたことは多少誤算だが、この方が面白いつと幸運に感謝した。

ここに、入室する前に玄朔に会って正解だったと秀秋は今度はそう思った。秀秋は胸中の策など全く悟らせずに、玄朔に言葉巧みに以上の内容を書かせたのだ。

その際に何と太閤殿下を慕っている御人だ。流石、一時養子になられただけのことはあるつと頻りに玄朔は褒めた。これには秀秋は玄朔を前にして、本心から胸中で苦笑した。

思惑は玄朔の思うこととは、全く違ふことに対しての苦笑である。玄朔は喜んで直ぐに書き、書状を書いた責任も果たすとも約束した。こうして、秀秋は書状を手に入れて、現在の状態に仕向けたのだ。

三成は苦悶した。三成自身何度も、玄朔に秀吉容態を書状で書かせている。三成は五奉行の筆頭として、容態を知る必要があると思つたからである。だから、何度も見た玄朔の書状特有の癖なども知つている。そして、それが直筆であるし判も本物だと判断した。だから書状も本物だと三成は思つた。

だから三成は困つた。秀吉は多分、自分でいいたい筈である。しかし既に秀吉の体力はなく、寝ている布団の傍に近づける必要があつた。だが書状ではそれを禁じるように書いてある。三成の頭脳には、天秤が大きく左右に動く。

暫しの間、二人の会話はなく沈黙した。これには後ろの小姓達は、必死に二人の会話を聞こうと聞き耳をたてている。そして、渦中の人である秀吉はぜいぜいつと荒い息をして寝ている。秀吉は誰かが枕元に来るのを待っている。もう、立てる気力も実はないのだ。だから、誰かが枕元にいないと何も秀吉は出来なかつた。

大広間に梅雨とは違つて、ジトつとした空気が漂う。この雰囲気に、大広間の豪華さも少し翳りが出ている。そして、匂いも金臭さが少し目立たなくなっている。

秀秋はそんな中、ただジツと待った。ここで焦つたら、折角の秘策も台無しになる。それに、結果は既に三成の顔を見たら分かる。だから秀秋は、ただただジツと待ち続けた。

「分かり・・・申した。」

苦悩の末に、結局は秀秋の思惑通りの回答を三成はした。三成は結構苦悩して考えたのだらう。顔中が汗まみれになっていた。顔も頭脳の熱のせいだらう、真つ赤に染まっていた。

これに秀秋は、秀吉のことを思つての苦悩した顔で頷いて見せたが、内心は狂喜乱舞した。全てが思惑通りにいつていることにである。

一方の三成は、玄朔の忠告を認めざる得ない。これ以上、秀吉の容態悪化は避けなければならない。だがその秀吉は、秀秋に直に会いたがつていた。双方の意見の歩みよれば、離れた所で秀秋が大広間に居るのが妥当だろうと三成なりに結論つけた。

三成は玄朔の書状を、秀秋の許可なく自分の懐に入れた。後々、玄朔本人に書状の有無を確認させる為である。本物だとは思つが念には念を入れる。神経質な文官の典型的な行為である。

秀秋は一瞬、心中に収まっていた不快さが蘇った。何か懐に入れる際に、一言ぐらいは言うのが礼儀である。秀秋を骨の髄まで舐めきつているから、無意識的にでた横柄な態度である。

だが玄朔の書状の没収自体は、秀秋の計算通りである。だから、仕方ないつと秀秋はそう思い直して不快さを抑えた。

結局双方に、この玄朔の書状の受け渡しの問題はない。

「では、私が太閤殿下の枕元に向かいます。そしてそのお声を私が聞いたら、直ぐに大声で貴殿に向かって伝達します。そして、その回答を大声で返して下され。では暫し待たれよ。」

三成はそう秀秋に言つと、秀吉の枕元に向かおうと立ち上がろうとした。

だが、これでは秀秋にとっては面白くもなんともない。面白くない秀秋は瞬間的に思考した。そして、素早く策が出た。この策を実行したら、秀秋からしたら面白かった。

早速、その策を秀秋は実行に移す。秀秋はいかにも心配をする表情を今度は作つた。三成は立ち上がつて振り向こうとしていた。だが、秀秋のその顔を見て躊躇した。少し、気になったのである。だ

から三成は、秀秋に自然と尋ねた。

「どうなされた。」

「いや、太閤殿下の枕元・・・いや、ここでの大声自体が、太閤殿下のご容態が悪化するやもしれません。それを思うと心配になってしまひまして・・・。」

秀秋の指摘に三成は確かにそうだと感じた。確かに太閤殿下は驚いて、心の臓を悪くされるやもしれん。三成は即座にそう感知した。ならば、どうすればいいのか。立つたまま呆然とした顔で、三成は思考した。八方塞に近かったが、まだ三成に道はあった。その道は直ぐに三成は思いついた。

三成は、自分が行き来して通達することを告げた。この道しか三成は思いつかなかった。これは少々手間がかかって、行き来の労働がある。三成自身は面倒であり、行き来の労働が嫌であった。だが三成は、これは仕方がないことだと、自分自身に言い聞かせての判断した。

一方の秀秋は、ホツとした顔になって、それなら太閤殿下の容態も悪化しないでしょうと胸中では心に無いことを平然と言った。元々、三成にそうさせるように仕向けたのである。三成の道は、秀秋が三成を小間使いにして、内心で嘲笑してやろうという策であった。この策に三成は見事引っ掛った。

三成は、今度こそ秀吉の枕元に向かう為に、秀秋に背を向けた。その刹那、平伏した秀秋は黒き闇を口の僅かに表したように、一瞬だけ笑ったのだった。だが、そんなことは三成は知る事はなかった。

三成は秀吉のいる最上座に着いた。そこでまず三成は、小姓達を手招きして布団で寝ている秀吉から離れた。布団に座して緊張してた小姓達は、三成は信用してたので躊躇なく離れた。伏見城の最上座もかなり広い。

そして四人の小姓達は、三成のいる最上座と上座を別れる段まで来た。集まった四人の小姓達に、三成は耳元で先程の秀秋との話の

経緯を説明した。秀吉に知れないように小声で説明した。小姓達は時より、秀秋の方をチラッと見ながら三成の説明を受けた。そして四人とも納得して意見を一致させて、三成の枕元への行動を許可した。

許可した四人の小姓達は、三成をその場に立って待たせた。その間に四人の小姓達は、各自の持ち場に向かって歩き、到着するとその場に座した。座したのを確認した三成はやっと、秀吉の枕元へ移動することが出来た。

三成が枕元に着くと、秀吉の意識は少し回復した。容態悪化により秀吉は最近、意識が朦朧としている。だが人を前にしたら、一時的に回復はするのだ。

秀吉は体を一切起こさないまま、三成に顔だけ向けて弱弱しく尋ねた。

「ひ、秀秋は・・・」

目も耄碌になった秀吉は何とか三成を認識した。だがそれは望んだことではない。だから、秀秋の所在を確かめた。

三成は一瞬息を呑んだが、秀秋いるが李氏朝鮮にて傷を負って、太閤殿下が汚れるといけないなどと適当な理由をついた。嘘は三成は大嫌いではあるが、この場合は致し方ないつと心にまたいい聞かせた。こうでもいわなければ、秀吉が納得しないだろうつとの配慮である。

その様子を見ることなく、秀秋はただ平伏していた。この平伏は、小姓達と三成が話をしてる最中も

続けている。秀秋は、秀吉を遠目で見るのも生理的に嫌なのだ。それに、平伏自体は礼法であった。だから秀秋は、それを都合よく利用してたのである。

秀吉は三成の説明をあっさり信じた。三成は秀吉の一の寵愛を受けていて、尚且つ有能な男だから信じてもらえたのだ。

「そ、そうか。なら、伝えよ。くれぐれも秀頼を頼むと。お前の義弟になる者じゃ。くれぐれも秀頼を頼む……。」

秀吉がそれを、うわ言のように繰り返して三成に言う。ある意味、秀吉のその発言は機械的なものであった。

三成は秀吉のうわ言に、内心では少しウンザリした。忠義があるこの男からしても、ここ最近言い過ぎだと思っただ。

ここ最近の秀吉は兎に角、手当たり次第に各大名達に、秀頼のことを頼むと口にし誓詞を書かせる。しかもこれは一度ではない。同じ相手に一度なら可愛いものだが、何度も同じ内容を書かせるから可愛くない。あまりのしつこさに三成に何とかしろつと、各大名達から苦情が出る程にしつこいのだ。

三成は秀吉の発言を、ウンザリしながらも気長に聞いた。そしてキリがいい所で打ち切り、今度は秀秋の元に足を進める為に立ち上がった。

平伏してた秀秋は、三成がこちらに向かっていることを足音で察知した。流石に平伏のまま、三成の発言を聞く訳にはいかない。なので秀秋は、無表情で面をあげて姿勢を正した。顔はやはり秀吉に一切向けず、三成に向ける。

三成を見た秀秋は、嫌いな者を小間使いにして内心嘲笑した。お前如きはそれぐらいの身分が丁度いいなどと暴言も、内心で吐いている。

この、行き来する意識無き人形は、秀秋の前に着いた。そして三成はその場に座した。秀秋には小声ではなく、普通の声で秀吉の言った内容を伝えた。

秀吉の発言は秀秋からしたら、随分虫が良すぎる話である。自分を別の家の養子に出し、何度も嵌めようとした秀吉の厚顔無恥に、秀秋は心底呆れ果てた。今更、何をっと思中で馬鹿にもした。それに、弟は実弟が二人いる。これ以外の弟など、認めるつもりはなか

った。

「当たり前です。何なら誓詞を書きましょう。」

しかし胸中で悪態をつく秀秋は、三成に障りのない発言にした。流石に心中の暴言を吐けば、秀秋の首は軽々と飛ぶ。そればかりは御免である。

秀秋の発言に是非是非と、三成は直ぐに筆を用意させて秀秋に書かせた。元々、秀秋に誓詞を書かす予定だったので、三成にとつては渡りに船である。

秀秋からしても、こうなる事は先程から薄々感づいてた。だから秀秋は特に抵抗なく、無表情のまま淡々と誓詞を書いた。

（無駄だろうに・・・。）

胸中でそう悪態をつけながら、秀秋は書を乱れることなく書く。こんな紙切れなど無意味なのは、凡将でも理解は出来る。

そう秀秋は思うが、一切の秀秋に対する哀れみは感じなかった。

それ程、追い詰められてる哀れな秀吉に対してよりも、普段の行いの憎悪が勝っているのだ。

秀秋に書かせた乾かした誓詞を持って、また秀吉の元に向かう三成。無論だが、秀秋は直ぐにまた平伏して回答を待っている。顔は無表情、内心嘲笑しながらである。

三成は、先程の秀吉の向かう時は足音が小さかった。だが今回は秀秋に誓詞を書かせたことが、少し興奮してるのか煩かった。

小姓達は先程からの出来事に、呆然としていて木偶になっている。元々、会話は三成に説明を聞いたので、やる事が無かったので仕方が無いことだが。

三成は早々に、秀吉の枕元に行くと秀秋に誓詞も書かせたことで忠誠心を誓ったことを、やんわりと告げた。秀吉もこの報告にホッとした顔をした。これで憂いが無くなったと秀吉は思ったのだらう。

「そうか、いいか、お前は豊臣の血である男じゃ。だから、くれぐ

れも秀頼を頼む。」

秀吉はまた言葉を発したが、結局は先程と同じ内容である。そしてまた、うわ言のように秀頼、秀頼つと口に始めた。三成は流石にこれ以上は、埒が明かないつと決断し、枕元を離れ秀秋の元に向かう為に立ち、歩き始めた。その間も、誰もいなくなつた秀吉はうわ言を止めることはなかった。

三成は秀秋に近づいて目に前で座した。無論、秀秋は堂々と座している。三成は神経質な顔と探る目付きをして秀秋に秀吉の言葉を伝えた。

伝え終わつた三成は独自の言葉を付け加えた。くれぐれも豊臣家に忠義を持つて日常精進して下されつといいつと高圧的に三成はいつと、秀秋に大広間からの退出を雰囲気で促した。

秀秋はその三成の傲慢な態度に一瞬不快になつた。だが先程の三成の喜劇がそれに勝つたのか、直ぐにそれは打ち消された。

秀秋は承知しておりますと社交辞令を言い、三成に内心嫌々だが頭を下げた。そして、退出しようと立ち上がった。三成もこれを全く止めずに、ただ座して秀秋の背中を睨みつけていた。

その間、いや、大広間に入室した一瞬だけ秀吉を見た秀秋だが、結局はそれ以外は見ようとはしなかった。そして、出入り口の襖が閉まるその時のにも、顔こそ大広間の最上座に向けるが、視線は違う所を見ている。ピシヤリつと接見の終える音がした。

（それにしても、同じ義父とは大きく感情が違うな。）

秀秋は伏見の長い廊下を歩きながら、そう思考する。

隆景の死去の前日に奇跡的に面会出来た秀秋だったが、その時は泣きじゃくつて死なないことを哀願した。そして、全ての理を怨んだほどだ。

だが秀吉はここまで冷淡になつてゐる。狂喜乱舞するかと思えば、今になつてみたら意外にどうでも良いつと感じた。つまり秀吉の存

在価値は、秀秋にとってはどうでもいいのであった。

秀秋からしたら今更、豊臣の血なぞ全く知らないし興味もない。自分は生粋の小早川家の人間なのだと、強く誇りに思う程である。憎悪している秀吉のことなぞ、秀秋は聞くつもりは更々ない。秀秋の信念はただ小早川家の道を進むだけである。

そう結論つけて、大阪に居る古満に会おうと切り替えた。そして、問田の大方に書状をかなければと思うし、すっかり秀吉のことは頭から消滅していた。

## 間章 忌まわしき過去との完全決別（後書き）

これ以降は、秀秋と秀吉は二度と会うことはありませんでした。

## 第一章七節 李氏朝鮮脱出（前書き）

これが歴史シミュレーションなのをお忘れないようにお願いします。

## 第一章七節 李氏朝鮮脱出

### 7 陸総大将 小早川秀秋

軍議が終わり、各大名達は釜山城の部屋に戻っていた。カーカーと鳥が鳴いて夕日到来を待ち侘びてるようである。その願いももう直ぐ叶うのである。現に、陽が斜めになって、地に向かって移動しているからである。今日は少々風が強いらしく、ピューピューっと外を我が物顔で吹き荒らしていた。

そんな中、部屋にいる小早川秀秋は一人、襖に尻を向け、部屋の中央で座しながら思考していた。腕を組み、目を閉じている様は、真剣そのものである。秀秋は早めの晩飯を、既に平らげている。そして、今日は思考したいことがあるっというて家老達にも、部屋から遠ざけている。悶々と思考の度に秀秋の顔は、百面相にしながら思考していた。そこだけは、夕方の涼しさは全く感じられない空間を醸し出していた。

秀秋の思考内容は、陸総大将の就任についてである。どうあっても自分が陸総大将になるには、少々力量不足に感じるからだ。しかし、かの者は一時的に李氏朝鮮の現地総大将であった男である。経歴からすると矛盾している。

だが、秀秋はそこは全く気付かない。本気で力量不足は感じているのだ。だから、このような大事な役職は無理だと思った。

それに、秀秋はこれだけで思考していなかった。寧ろ、力量不足も感じたが、これは悩みの本命ではない。この悩みの本命は秀秋に

とって深刻だった。

（我が軍は問題が多すぎる。兵の量も質も、先代の義父上と違って、著しく低下している。）

秀秋はそう思っただけで苦悩する。これが、現在も秀秋が一番悩まされている深刻な事項だ。

大体秀秋の小早川家の総兵力は、皆は一万近いと言われる。これは筑前一国と、筑後・肥前の一部で三十万七千石ある領地から計算されたものだ。だが、それは机上の計算であって建前だ。実情はたった七千の兵しかない。このことは名簿の報告を日ノ本に居る大名達が領地だけを参考に、皆に報告してるからこの大名達は知らない。

しかもである。この他にも重要な欠陥が小早川家にあるのだ。それは、秀秋の小早川家には、上の者が決定的に少ないのだ。

ハッキリ言うと、秀秋の小早川家は戦をしなくとも満身創痍であった。秀秋が統率してなかったら、秀秋の小早川家は既に破綻してただろう。

秀秋の小早川家の危機は、ちゃんとした訳がある。それは秀秋が敬愛してた、義父の小早川隆景の死去にある。

この死去に対して、秀秋についてた家臣団達が反乱を起こしたのだ。これは大きく言い過ぎた。事実をいうと大量出奔してしまったのだ。

出奔した家臣団たちは、秀秋に見切りを付けたのである。その中には当時の秀秋の近衛兵取締役であった岩見重太郎や当時の三大家老の一人であった山口宗永、その息子である修弘親子。家老であった曾祢高光、村山越中などの高名な者が多くいた。隆景がいてこそ秀秋、かの者達はそういつて出奔してしまったのだ。

ただでさえ鵜飼元辰等、隆景の元に始めからいた大半の武将達は隆景の隠居後、秀秋を嫌い毛利家に移籍していて武将数が足りていない。隆景からの武将は数少ない者として、現在の秀秋の近衛兵取締

締役などを勤める清水景治が残ったぐらいである。

隆景は秀秋が自由の動けるようにと、旧臣な武将達を積極的に本家である毛利家に移籍させた。これは秀秋が養子した際、目付け家老や武将が自由に動けるようにとの配慮であつた。まさに、完全に裏目に出てしまったのだ。

現在の秀秋の小早川家は、筆頭家老の稲葉正成を中心にして、家中を必死にまとめている。だが、いくら正成が優秀でも限度がある。何せ上の者の人不足なのだから、仕方がないことだった。

解決法は結構簡単だ。上の者の人手不足ならば、下の者をあげればいい。しかし、こればかりは情だけではなく、能力がある程度は必須となる。無闇に下の者を無作為に出世してしまうと、家全体の均衡が危うくなる。だが、上の者が少ないと、家の指令系統が上手く機能しない。

小早川家の兵は確かに勇猛であり、強い。兵の強さは、先代であつた義父の隆景の時代と一切変わらない。しかし、家の兵が強くとも、指揮系統が機能してなければ宝の持ち腐れである。

確かに秀秋は、李氏朝鮮で孤立してる小西行長等の救出はしたい。だが、その一角の総大将になると話は別である。李氏朝鮮の現地総大将の時もそうだが、自分が総大将の役割が合わないつと、秀秋は常々と感じていた。大体、秀秋の小早川家の役割が、この総大将という方針に全く沿わないのだ。

秀秋の小早川家の大方針は、ズバリ『毛利家第一主義』である。元々は、隆景も養子で小早川家の当主になったのだ。その養子元が中国地方にある毛利家であり、現五大老の毛利従三位中納言輝元を守護するのが役割なのだ。

この輝元は、大変優柔不断な性格であり器量も欠けた男だ。また以外に短慮な所や我が侷な一面もあり百二十万五千石には、身分不相応な男である。この孫を持った祖父の智将、毛利元就が将来を危

恨。養子にだした子等に輝元を第一とし全力で助けることと懇願したこと。

これによって、養子に出された家は方針が決まった。だから例えば、吉川家も別家の小早川秀包の小早川家などもこれを家訓にしている。

現に、隆景が死の直前になって、秀秋に毛利家を頼むつと遺言を残している。敬愛している義父の隆景の遺言を、秀秋が違える訳はない。だから秀秋の大方針はこの毛利家第一主義である。

小早川家の大方針と家臣団の実力低下。更に秀秋は、自身の能力不足を感じている。これらが秀秋の総大将ではいけないと、感じている足掛けなのだ。

だが、事態はそれを全く無視している。まさかの秀秋の推薦からあれよあれよで、秀秋は行長等の救出の陸地総大将になってしまった。

苦悩して思考してる秀秋は、トコトコつと足音がした。因みに出入り口の襖は部屋と廊下の分かれ目である。だから、人の足音は先程から絶え間なくしている。

だが、この足音は秀秋はよく知っているものだった。その足音を聞いた秀秋は訝しく思ったが、さっと思考を一時停止させた。その好機に合わせて、その足音を奏でる者が出入り口の襖の前に来た。「殿、宜しいですか。」

そこには右筆の村上吉正が、廊下の床に片足立ち座りをしながら、秀秋に向かって襖越しに声をかけた。襖越しなので、秀秋からは吉正の表情は分からないが、多分いつもの嫌に笑っているのだろう。何故なら、少し陰気が入った口調であった。

秀秋からしたら、足音で指定した者通りであった。陰気な感じを感じ取った秀秋は、緊急的な要件ではないと思った。だが、それでは吉正は家臣達を遠ざけた秀秋の意向に背くことになる。

秀秋は体勢を襖に向けると、若干苛立つて襖越しの吉正を睨みつける。意図が分からないからだ。この睨みは吉正も感知したが、これ程度ではビクともしない。

チツと舌打ちした秀秋は睨みながらも、吉正に苛立ちながら尋ねた。

「なんだ。」

「立花殿が是非面会したいとの申し出があつたので、お連れします。」

吉正のまさかの発言に、秀秋は一瞬だけビクツと体を震わした。まさかここで立花宗茂の名を聞くとは夢にも思わなかつたのである。

しかし吉正はこれを勝手な決定した。それ言動で分かるが、一家臣で右筆が決めていい事案ではない。だが、吉正は秀秋がそれを望むことを確信しての行動だ。秀秋の心中を察しての行動こそが、吉正の右筆としての真骨頂だ。

「分かつた。」

案の定、秀秋は苦々しくだがこれを許した。この許しを聞いた吉正は、暫しお待ちをと言うとさつと襖の前から姿を消した。

秀秋はこの悩みの種を蒔いた、張本人に事情を聞いた方が解決が早い。だからこそ許可したのだ。それにしてもつと秀秋は思った。

（あ奴は、この私の心理や状況を良く読みやがる。ああいう所は、家臣達の中では一番だな。）

吉正に苦々しく思つた秀秋だったが、それは自分の心理を簡単に読んでいることである。だが一方ではこれぐらいはしないと、自分の右筆にはなれないことは秀秋は思っていた。

今回、吉正の機転でまもなくここに来る宗茂だが、心中が謎である。確かに、前日つといいかには分からないが、宴で少しは仲が良くなつた。だが、交流はたつたそれだけである。どう思考してもまさか推薦する程の仲でもない。他にも候補にが福島正則や細川忠興などの実績のある猛将はいる。

思考しながらも秀秋は、体を動かして部屋を準備した。このままでは、来客を呼べる状況ではないからである。こういうのは普段は近侍などがするのだが、秀秋は思考する為に遠ざけている。だから近くに秀秋以外に誰もいないのだ。

秀秋は座布団を敷いたり、明かりが不足するといけないから行灯に灯をつけたりした。秀秋は更に、塵などの掃除も簡単にだが、真面目にキチンとした。その姿は大名とは、全くかけ離れた姿であった。

秀秋は夕方が近くなつたことで、涼しくなっている部屋を気にした。秀秋は大体掃除が終わると、隅にある箱に向かった。その箱は小さい箱で一尺五寸（約四十五センチ）の大きさを正方形ある。奥行きは七寸（約二十一センチ）ある。そしてその箱の中には、底には灰があつて、その上に四本ほど炭があつた。それは囲炉裏代わりの箱であつた。

秀秋はその箱で暖を取ろうとしたのだ。現に、ちり紙などのゴミをその箱に入れた。炭に火が伝わる手伝いをさせる為である。秀秋は、行灯でも灯を点けた火打石を持っていた。そして、箱に向かつて屈むと、ちり紙に向かつてカチカチつと鳴らす。

そうするとチリチリツと、ちり紙が燃え出した。大いに燃え上がったちり紙は、未来の火を炭に託すように燃えている。そのちり紙の情熱に炭も答えたのか、紅く静かに燃え始めた。その火を見届けるように、ちり紙は天に還つて逝つた。

秀秋は部屋の準備完了後、座布団の上で座していて精神統一をして気を落ち着かせた。もうすぐで来るであろう宗茂に対応する為だ。秀秋には聞きたいことはいっぱいある。だが、相手は目上の人間であり、興奮すれば失礼が出るかも知れない。だから、秀秋は高まる血潮を押さえるのに、精神統一をしたのだ。

秀秋が落ち着いた丁度その時、宗茂が襖を開けて会釈をしながら入室してきた。その時に涼しい風も共に入つて来たが、この男が外

から運んできたのか、雰囲気から醸し出してるのかは分からない。だが、少々暖が強かったのか暑い空気を冷やすのには、十分な涼しい風であった。

秀秋がフツとこの風に酔う内に、宗茂は失礼つといい秀秋と対面する形に座した。宗茂のその青い平服が、涼しき風と共に良く似合う。悶々と苦悩していた秀秋の青い平服とは違う。同じなのに全く違う印象を与える青が睨みあっていた。

二人が向かえ会って座したその時、宗茂を案内した吉正がごゆっくりつと言って襖を閉めた。二人はこうして、対峙しての話し合いが始まった。

暫しの間は、二人とも障りのない話をした。話の間、暖の暑さかなのかは分からないが、互いの額には汗が出ている。障りない話は互いの牽制球でもあったが、前置きつという形の礼法でもあった。最近の釜山の天気などと言う二人は、何処かぎこちない口調の会話だった。それは互いに警戒感や緊張感がある。だが、この緊張感は主に秀秋が出しているもので、それを宗茂が解そうとしている。だから二人は、本題に入らずに障りのない話に躊躇してるのだ。

（いい加減聞か。）

「立花殿。一つ質問があるのですが・・・。」

秀秋はそんな宗茂の心遣いを気づいた。秀秋にとっては大変有難かった。おかげで過度な緊張感もなくなり、いい緊張感になっている。額の嫌な汗も先程は気になったが、今ではそれ程気にならなかった。いい緊張感だし、そろそろ頃合だと秀秋は感知して質問した。ググツと体勢を向かい合ってる宗茂に向かって前のめりにして、宗茂の言葉を一言たりとも聞き逃さないように真剣な顔つきである。

ジリジリツと行灯と囲炉裏擬きの火の音が協奏曲を奏でている。その音だけが、この秀秋の部屋の音全てを支配した。いい音色ではあるが、少々情熱過ぎなのか、部屋の空気も熱くなっている。その空気は情熱的な音色に対して、無言で演奏に喝采している如くであ

る。だからこそ、空気も音色と共に熱くなるのだった。

宗茂は秀秋に対して頷いた。秀秋の質問内容は、宗茂は既に承知している。寧ろ、そも理由を言い、秀秋の部屋を尋ねたのだ。大方それを苦悩してることを、宗茂は敏感に察知していた。前日の宴で、秀秋の性格などは宗茂は大体、目聡く把握していたからである。この男ぐらゐの名将ならば当然なのかも知れない。

「推薦の理由であろう。」

「左様です。」

「理由は、単純に言えば小早川家がいいと思ったからだ。だが、これは他の者達に対しての理由だ。個人的な理由を申せば、小早川家だけでなく、貴殿の可能性を信じたくなった。」

「可能性……。」

宗茂の言葉をジツと聞いてた秀秋だった、宗茂の可能性の言葉に秀秋はかなり困惑した。小早川家ならばまだ理由は分かる。小早川家の内情を知るのは極僅かであり、極秘に隠蔽しているからだ。だから、かの者が知る訳がない。

だが宗茂の個人的理由である、秀秋の可能性には推薦理由としては希薄だ。秀秋は困惑を隠そうともしない表情をしている。それを見ている宗茂は、その困惑を取り除こうと穏和な顔をして、理由を告げる。

「左様。貴殿が……。」

「失礼。今、島津殿が面会を希望されてます。しかも同伴をですが、お連れしますか。」

折角、宗茂が理由を言おうとした瞬間に邪魔が入った。チツと宗茂は不快感を隠そうとせず舌打ちをした。ここが、宗茂にとって正念場だったからだ。ここで、宗茂が理由を言つて、秀秋に感激される。そして、強固な信頼関係を結ぶ計画が台無しになったのだ。宗茂は理由を言つのと、秀秋の完全な友情を勝ち取る為にここまで来たのだ。

一方の秀秋は困惑が更に深まった。頭の中では軽い混乱もしていた。あまりに宗茂に集中してたのか、声をかけた吉正にも先程は足音で判断出来たのに、今回は襖越しに声をかけられるまで一切気付かなかった。

吉正はそんな二人の異様な雰囲気を感じたのだろうか、一呼吸置いてから話し始めた。島津義弘が吉正の居る控えの間に訪れて、面会を強く希望してるつと告げた。

流石に今回は、吉正は困惑したし判断出来かねたので尋ねに来たのだ。襖越しの声も話し合いを中断させた思いからか、少々申し訳ない気持ちが出ている。

「んー。」

「某は別に同伴でも構わないが……。」

「分かりました。早急にお連れしろ。」

秀秋は宗茂に、どうしようかと尋ねようとする前に返答された。秀秋は宗茂からの了承を得たので同伴するのを認められたと思い、吉正に命じたのだ。暫し間、二人は無言で待った。会話が途切れ方が悪かったので、ぎこちない雰囲気支配していたからだ。心なしか先程からの火の協奏曲も休憩になったようで、部屋の空気も冷たくなっていた。

そんな冷え冷えとした空気の中で、襖が開いた。

「いやいや……。失礼失礼。んっ、おや立花殿もいるのか。」

「どうも……。」

義弘は悪びれた様子は一切見せずに、ドカリとそっけなく会釈した宗茂の出入り口隣に座した。秀秋が既に、そこに座布団を敷いているからだ。吉正は義弘を入れると、早々と襖を閉めた。

義弘は宗茂がいることを知っておきながら、宗茂を見てシャアシヤアッと空惚けた。その姿は李氏朝鮮の日ノ本軍の中で、一番老いてる大名だったので合ってはいた。因みに義弘の年齢は六十三歳である。

隣に座された宗茂は同伴に許可はしたものの、顔は微妙に歪んでいる。どうやらそのゆがんだ顔には、話し合いの邪魔した不快感だけではないようである。実は元々、二人には因縁があり仲が疎遠なのだ。

宗茂は元の主君が大夫家であり、島津家とは長年敵対していた。更に、実父の高橋紹運は島津家に討たれた。いくら義が厚い宗茂でも、簡単に割り切れるものではない。豊臣家に両方が仕えても、両方の仲は一向に改善しない。無論だがこのように、少人数での顔合わせは初である。それ程、両方の仲が疎遠なのだ。

義弘は秀秋に、無論だが会いに来た。理由は、宗茂と寄寓にも同じである。意気揚々と控えの間にいた、吉正に秀秋の取り次ぎを依頼した。

だが、先に宗茂が秀秋との面会をしていた。義弘はそれを聞くと、強引に吉正に面会を頼み込んでここに居るのだ。秀秋との人脈を取るのは無論、立花家との関係を修復するにはいい機会である。義弘にとっては一石二鳥であった。

一方の宗茂は、折角の話し合いの最中での同伴は嫌である。特にあの因縁深い、島津家の者である。だが、折角の秀秋との仲が決定的に良くなる好機である。宗茂は、秀秋と仲を良くしたい好機と島津家の同伴を天秤にかけた。そして、仕方なしに同伴の同意に決したにだった。

義弘の入室によって更に冷え冷えとした空気になった。そんな中恐る恐るだが秀秋は、簡潔に宗茂との話の経緯を、義弘に説明した。その間の義弘は頷くだけであり、隣の宗茂は決して隣を向こうとはしない。義弘の聞く様子は好々爺その者であった。平服の土色がそれを引き立たせる。

秀秋が話が終わると、義弘が自分の面会理由も多分だが宗茂と同じことを告げた。これには一瞬だけ宗茂は驚愕したが、なるほどっ

と素っ気無く言葉にするだけだ。大体、義弘の腹の底が読めない。宗茂は義弘にだけは警戒心を隠そうともしなかった。

嫌な沈黙が空間を支配した。秀秋はこの底冷えした空気を変えようと行動を起こした。

「では立花殿、続きを・・・。」

秀秋がそう催促すると、宗茂は歪んだ顔を改めた。義弘は兎も角、ここで秀秋との仲が決まるつとの思いからか、顔も自然と真剣になり興奮で朱に染まる。その宗茂の真剣な表情の様子に、ゴクリつと秀秋は緊張感を表すように喉を鳴らす。義弘は飄々とした表情で、宗茂の発言に聞き入ろうとした。

「前日の軍議で、某が小西殿達の救出を訴えた時に貴殿が某を賞賛しましたな。そしてその後の刹那、威圧感を貴殿から僅かに感じたあの時は一瞬だが、某は身震いをした。あの威圧感を出す者はそうはいない。貴殿は間違いなく名将になれる器だ。だから某は自信を持って推薦したのだ。だから推薦した以上は、推薦人である某も責任がある。だから・・・。」

「儂もお主の威圧感を感じてのおー。じゃから興味があつてな。その立花殿も賛同しとったし、濃も賛同したつという訳じゃ。お主、器量があるのは濃が保障するぞい。」

宗茂の発言を遮って、義弘が宗茂の理由を後押しした。このままだと、義弘は秀秋に良い印象を持たれないと危惧したから遮って印象づけようとしたのだ。

一番大事な所を遮られた宗茂は、苛立ってかこめかみに青筋が浮かんでいる。先程からの邪魔立てに、宗茂はいい加減に怒りも高まっていた。そしてその怒りの目線でキツと義弘を睨みつけた。

これの鋭き刃のような目線を受けても、義弘は平然としている。確かに宗茂との関係修復もしたいが、第一目標は秀秋との人脈確保である。だから、多少強引でもこれを実行させるつもりなのだ。

義弘自身も飄々とはしているが、内心では結構焦っていた。

（この童の威圧感は何じやろうか。）

軍議で秀秋の只ならぬ者だと敏感に察知した義弘は、慌てて宗茂の意見に同意した。因みに、寺沢広高は流れである。威圧感などは感知していない。

さて島津は元来から、天下人になるつもりは一切ない。だが、九州統一には積極的であった。だから豊臣秀吉に渋々降伏するまでは、これを一貫にして実行したのだった。

そして、島津のその野心はまだまだ消えてない。あくまで、表面上の降伏であり心底からではない。いつかは拳兵して九州を我が物とし、もうそんな役職はないのだが九州探題になるのが野望の果てなのだ。だから、同じ九州圏にいる現在の大名達を敵にするのは不味い。それが勇将、もしくは名将なら尚更である。だからこそ、秀秋のご機嫌を取る必要があったのだ。

「そ、そんな訳はありませんよ。」

秀秋はまさかの二人の賞賛に、照れと羞恥で顔を真っ赤にした。大体秀秋は、貶されるのには慣れているが、褒められるのは慣れていないのだ。大名で褒められたのは実兄の木下勝俊と義父の隆景だけだ。これは、身内鼻頂つと秀秋が勝手に解釈されている。しかし、岐阜の隆景に関しては頑として、本心を周囲に言い続けた。自らが死ぬ直前には、秀秋に向かって毛利家の養子を邪魔するのではなかったと悔いた程である。

「いやいや、流石は名将と謳われた義父の隆景公。目のつけようが違うわい。」

「義父上は私に甘かっただけですから……。」「  
好々爺その者の顔つきで義弘の褒め殺しにかかった。義弘が基本的に家臣達にもこの褒め殺しをして、その実力と忠誠心を引き出させるのに成功しているからだ。

しかし、秀秋は意外にも徐々に興奮が落ち着き始めた。その後も

義弘は褒め殺しをしようと話していくが、少しずつ言葉に力がなくなる。秀秋が淡々とした顔つきになっているからだ。

（しくじったか。）

これに内心、義弘は苛立って舌打ちをした。これで信頼されたら簡単だが、秀秋は全く義弘の話術に乗ってこない。こういう時普通の若者なら、名将と謳われる自分に褒められたら有頂天になる。だが、秀秋には逆効果だった。

秀秋は幼い頃から、褒め殺しは何度も経験してる。秀吉の媚びる為に道具のように見られた過去。だから褒め殺しにしようとする態度が秀秋には判断出来るのだ。褒め殺しには悪い過去しかないのです。秀秋は褒め殺しは大嫌いであつた。なので、急速に褒められた嬉しさも冷えていったのだ。

「さて、宜しいか。」

二人を傍観した宗茂が、心が冷めつつある秀秋に自分を注目させた。義弘は好々爺な表情を一瞬だけ歪ませた。思うような結果が得られなかったからだ。これは他の二人は気付かなかった。

ゴホンとわざとらしく咳き込む宗茂に、秀秋は若干だが冷めた目で見ている。それは、褒め殺しをしてくるのを警戒してのことであつた。だが、宗茂はそんな気持ちではなかった。兎に角、自分の心を知って欲しかったのだ。

宗茂は真剣な眼差しで、秀秋に語りかけた。

「小早川殿。貴殿がどう自分を思っているかは某は知らん。だが、その能力、兵力を使わなくて小西殿達は救えんと断言する。貴殿はもう我々の総大将ぞ。だが、今後は貴殿の敵は某の敵になる。貴殿の配下になったのだから遠慮なく命じられよ。某もそれに従う。某と貴殿は運命共同体だ。死ぬのも生きるのも一緒だ。それを忘れるな。今日はもう帰ろう。・・・一つ言っておく

某は愚直故、騙すのは嫌いだ。だから貴殿を裏切らんし、貴殿

を信じておる。」

そういうと宗茂は会釈をすると、早々と退出してしまった。柄にもないことを述べたことが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして。これに残された二人は啞然とした。

先に正気になった義弘は、これ以上は居ても無意味と判断。今日の所はこれでつというさっさと引き上げることにした。顔は悔しげに歪んでいた。何も目的を果たせなかったからだ。だが、悔しげな顔は決して目だけはまだ真剣だった。どうやら、今回は諦めただけのようであった。

部屋に一人取り残された秀秋は、まだ呆然としていた。宗茂の言葉が心に響いたからだ。しかし、時間が経つに連れて、顔が自然と喜びからか緩んでいった。

嘗て、誰もが見捨てられそうな状況に陥ったことがある。その時に正室の古満が若干違うが、これに似た言葉を言ってくれて立ち直ったことを思い出したからだ。

あの時は心底嬉しかったが、今もあれよりは嬉しくはないが、十分嬉しい。

(・・・・。陸総大将、小早川秀秋つか・・・・。)

嫌々だったが、意外に何とかなるかも知れんなと秀秋は初めて思った。陸総大将はかなり重い任務だが、宗茂みたいな名将が信じてくれるならつと自信も少しだけ出る。

二人に友情が疎通した瞬間であった。これに祝福したかのように紅くなった陽が襖越しに照らしていた。

## 第一章七節 李氏朝鮮脱出（後書き）

小西等救出は決した。だが、世の中準備は必要だ。日ノ本軍は撤退に準備を始めた。その間、いやその前から日ノ本では暗雲が広がりにつつあった。

次回、転換！関ヶ原！ 第一章八節 李氏朝鮮脱出  
『暗雲の目、蠢く。』「ぐふふふ・・・」

## 間章 秀秋の経歴表（前書き）

今回は秀秋の経歴設定です。後々のネタばれもありますので、注意して下さい。

## 間章 秀秋の経歴表

7・5 小早川秀秋の歩んだ道

どうも、歴史転換です。この作品を読んでいただけの読者様に感謝しつつ、何とか毎日更新を今の所はしています。さて、今回は小早川秀秋の歴史について述べようっと書いております。前間章にも人物設定がありました。今回は小早川秀秋の設定を詳しく迫ってみようと思います。この設定が後々の本編で重要なことも書いていますし、出来事も間章で改めて書すつもりではあります。その意味では、間章扱いはいけなくのかもしれませんが、なので、今後の章を楽しみにするなら経歴を見ない方がいいのかもしれませんが、では、早速書きましょう。

木下秀俊↓羽柴秀俊↓小早川秀秋（秀秋で全章、名を固定）

産まれた日、一五八二年六月三日早朝。

産まれた直後、親子はさつさと寝た。産声は小さかった。

父は木下家定である。母は菊姫（オリジナル、出番はあるかも知れない。）

幼名は辰之助。だが、あまりに幼名を名乗る期間が短かったので、基本的に呼ばれない。

五男として産まれているが、家定は七人の男の子がいる。子の仲

は基本は悪い。特に長男と次男の仲は険悪である。秀秋は長男の勝俊、六男の俊定、七男の秀規とは仲がいい。逆に次男の利房、三男の延俊、四男の延貞とは仲が悪い。兄弟は秀秋以外は一応は凡將止まり。五男までは血筋で大名になっていると世間では思われている。六男と七男は元服してないので家定の元にいる。最近では豊臣姓を秀秋以外は下賜されたので、その名を名乗る。

親から疎まれていた。理由は特にない。だが、利用価値からある考えを持った。

一五八五年四月に豊臣（当時は羽柴）秀吉の養子に出される。理由は父の家定の要望が煩かったから。このこともあってか家定には五千石の加増があった。この間、豊臣夫婦から可愛がられることはなかった。秀秋の性格は暗く、人間の欲望の黒さに嫌悪感がでる。他の養子の者達の中で一番仲が良かったのは羽柴秀勝である。といっても親分子分の関係。だが、秀秋にとっては嬉しく感じたと同時に、何故か安心した感覚があった。

一五八六年十月にその羽柴秀勝死去に衝撃を受ける。また、この時に身近の死を初体験。性格もより暗く無言になる。

一五八九年一日に丹波亀山城の城主になる。領地は十万石。この時に松野平八重元が筆頭家老になっている。後の小早川家の中での上層部一の古株になる。当時の信頼関係は零に等しい。また、政治なども家臣任せである。

一五九〇年の後北条の討伐に参加。初陣を果たす。だが、武功らしい武功はない。ただ参加しただけ。

一五九二年に現在の従三位中納言に叙任。この際に濃という不思

議な老婆に会う。これが、女の中で始めての優しくされた者だ。当時の秀秋はただ無言で無愛想だったが、濃は気にせず顔は優しく笑いながらも無言に付き合っている。仲も当時は淡白だった。実は濃は織田信長の正室であった鷲山である。現在は京の山奥に天魔寺という名の寺を立てて、ひっそりと暮らしている。その濃の正体は、誰も知らない。濃は美濃からとった名であり、流石に歳を老いたから美は自重して濃つと名乗っている。秀秋とは現在も交流があり、仲は良好である。当初は秀秋の正体を濃は全く知らなかった。現在の生活は困っていないが、秀秋は気にしてか五十石程援助している。

一五九三年八月に現在の秀吉の一人息子の秀頼が産まれる。これにより秀吉が養子達の処分を思考を始める。

一五九四年七月に小早川家の養子として出される。この時は李氏朝鮮の戦は講和中の為に休戦。隆景と秀秋は備後三原城にて面会を果たす。更に正室となる古満と結婚。小早川夫婦からは大変寵愛された。また、この際に先に養子になってた小早川秀包は別家という形で独立した。また、特に秀秋を嫌う者達は秀包の家臣に移籍した。その為、同じ小早川家でも仲は険悪である。この頃から秀秋は少しずつだが明るい一面を信用する者達に見せ始める。養子になったが領地などは継いでないし、当主などにもなっていないので、丹波亀山城十萬石は変わらず。秀秋は隆景に弟子入りして武将の心得や能力を磨き始める。

一五九五年七月一日に秀吉と同じ養子仲間の秀次が処刑される。関白残虐処刑事件である。秀吉の嫌悪感が九割に達している。この時に最上義光の子にして側室の駒姫の助命嘆願に参加。義光のしつこさつと古満の同意。秀吉の嫌悪や駒姫と一回だが面会してみても、相性が良かったことが理由。

しかし、駒姫は八月二日に処刑された。その際に伴天連によると死神の鎌が見えたと言ったことが噂になる。駒姫はこの前日に釣船草を取るように頼むと、それを秀秋に渡すように懇願した。現在、その花は秀秋から古満に渡っていて、押し花として保管してある。

駒姫の首は畜生塚に埋められそうになったが、秀秋が直談判をし、秘密裏に秀秋が葬ることと何とか回避された。秀秋が選んだのは、濃がいる寺である。

だが、これが秀吉の勘気に触れて丹波亀山城十万石を没収される。更に三原城に監禁を命じられる。駒姫事件は表向きは、秀秋が関わっていないことになっている。なので駒姫は畜生塚に葬られたことになっている。

だがこの際に目聡く、小早川家以外の部外者で一人気付いた駒姫の母、大崎夫人がこのことを知って、後に秀秋に感謝状を書いている。また、秀秋と共に一緒になって墓参りもしている。だが、これは同時に遺書的な要素もあつたようで、その後大崎夫人は自殺している。

同じ年の十月に隆景が隠居。秀秋の監禁が許されないことと、最近体調が悪いことが理由。秀秋は固辞したが、小早川夫婦や古満、唯一付いてきた家老の重元の説得に渋々認めた。現在の筑前と筑後・肥前の一部の三十万七千石を引き継ぎ、小早川家の当主になる。家紋も隆景のを変えて、違い鎌に変更する。これは秀吉の秀次処刑の際に、妻子や側室達を惨殺したことの皮肉である。秀吉は隠居を渋ったが、隆景は気に入ってたし、人望や能力を思考すると粗末な態度が出来ずに認めた。だが、筆頭家老に稲葉正成を命じたり、三家老に正成、平岡秀勝、山口宗永を任命などと口を挟む。この時に現在の主な武将達が集結する。また、本格的に小早川家にいた家老達が本家毛利家や別家の小早川家、隆景の身辺につくなど出奔して、上層部が一時空欄になる。

一五九六年、小早川家に秀秋派と秀吉派に二分される。家に不穏な空気が漂う。

一五九七年一月に李氏朝鮮の再出兵を秀吉が決断。秀秋を現地総大将に任命する。秀秋は固辞するものの、聞き入れられなかった。ただし、秀秋自身は出陣せず。肥前の名護屋城にて指揮をする。

一五九七年七月、小早川隆景死去。三原城で最後は問田の大方に看取られて亡くなる。秀秋は三原城に駆けつけて死去の前日に面会した。その後、容態が急速に悪化、慌てて大広間に向かったが死去してしまい看取することは出来なかった。その後、問田の大方は周防国の吉敷郡問田に在住することになる。秀秋はこれに二百石程の援助をしている。本人は千石以上にしたかったが、二百石ぐらいなら・・・と問田の大方に言われたから二百石で我慢している。この後に秀秋家中では三原城の反乱と言われる事変が起きる。秀吉派の出奔である。隆景がいるからこそ秀吉が手を出しかねた。その隆景が死去したからには、遠慮もなくなり家も危うくなることを懸念したのだ。予想通り、秀吉は家が混乱してるにも関わらずに李氏朝鮮に直接行けとの指令が出る。結局、葬式をして直ぐに現地に向かう。

一五九八年一月に蔚山城の戦で活躍する。だが、これに待ったがかかり、小早川家全軍の強制帰国させる。二月に伏見城にて秀吉から現地総大将解任と越後北庄十五万石に国替えを命じられる。隆景がいらないから遠慮なく処罰したのだ。だが、直ぐに国替えは却下された。この時に秀秋は完全に秀吉を憎悪する。また、三成にも憎悪を持つようになる。三月には再び李氏朝鮮に出兵する。

同年五月に再び秀秋は小規模の強制帰国を命じられる。六月に伏見城で秀吉と最後の接見を果たす。だが、老弱してる秀吉の哀願を聞いても心中に一切の悲しみはなかった。八月には再び李氏朝鮮に戻

る。

一五九八年十月十五日に李氏朝鮮からの撤退を命じられる。

秀秋の経歴は以上です。関係を書すと、秀秋の小早川家は本家の毛利家とは仲はそんなに良くはないです。疎遠といった関係です。毛利両川といわれた吉川家とは仲が悪いです。それ以上に悪いのは別家の小早川家です。隆景が死去してからは、秀秋の小早川家と仲がいい大名は秀吉死去の時には木下勝俊だけです。基本的に秀秋の小早川家は馬鹿にされています。

家中の仲はいいです。適度に節度も守っているし、上層部の武将達は忠義心の塊です。また、下っ端の足軽などの秀秋の信頼度も高いです。秀秋を中心に家は動いています。

秀秋の小早川家の方針は『本家毛利家第一にする』です。この他にも『天下を狙わない』もあるが、秀秋はこの天下に嫌々関わって痛い目にあっている（李氏朝鮮の現地総大将）ので先頭に立ったり、総大将などの重要な役割などに関わりたくないつと秀秋は思っている。

詳しい経歴の出来事は今後、間章で書くことになると思います。後、追伸ですが立花宗茂などの有名で名をよく改名する者ですが、現在で有名な名を使用しています。ご理解をお願いします。

## 間章 秀秋の経歴表（後書き）

いつかは家中の家臣達の感情の設定も間章で書くつもりです。

## 第一章八節 李氏朝鮮脱出（前書き）

どうも、歴史転換です。やっと修正を完了しました。ここまですかるとは正直思わなかったです。ご迷惑をおかけしました。

更新が多少は遅くなるやも知れませんが（年末の為）これからも応援宜しく願います。

では歴史シミュレーションなのをお忘れ無く。

## 第一章八節 李氏朝鮮脱出

### 8 暗雲の目、蠢く

豊臣秀吉が死去した頃から、日ノ本は荒れていた。っといって表立ては平穏ではあった。だが、その平穏が偽りであることは、殆どの者達が承知していた。

亡き秀吉は果たして、大名達に何を残したか。そんなのは、負の遺産ばかりだった。李氏朝鮮の出兵なぞ、その筆頭格だと言っても過言ではなかった。殆ど大名達は、口には出さないが憤怒している。いや、嫌悪や憎悪をしていた。唯一の領土確保も、自己気分で秀吉は処断することが多く、あんまり有り難みもなかった。寧ろ、秀吉の機嫌取りをし続けなければならないのが嫌だった。元は農民出であつて、下克上の風雲に乗って天下を掠め取ったものだ。身分制度が厳重な日ノ本の人にとっては、この男が天下人なぞ認知し難かった。だが、そこは時代の流れには逆らえなかったので、各大名達の殆どが渋々従っていたのだ。

十月の初旬の頃、日ノ本の京にある伏見城。十月なのに夏の名残があるのか、夜なのに残暑が照つてて暑い。だが、生き物は徐々にだか風物詩なものに交代をしつつあった。現に夜中のせいなのかは分からないが、蛙の鳴き声が煩く聞こえる。だが、その声は若々しいものであった。進化の過程で得たものを、試したいのだろうか生き生き鳴らしていた。

伏見城は、その秀吉が最後を迎えた城ある。秀吉は死後、密かに阿弥陀ヶ峰に葬られたので、伏見城にはいない。いや、豊臣家に忠

義を誓う者がいないつと言った方が正しいのだろう。

ここには、日ノ本に激震を呼ぼうとしている暗雲の目が城主となっていた。その目を警戒して秀吉は、遺言に大阪城立ち入りを控えることなどを盛り込んでいる。自分の息子の秀頼に手を出させない為である。だが、あまり無礼過ぎると爆発することも秀吉は重々承知していた。だからこそ、自分の隠居場所であつた、伏見城を半ば譲る形にした。だから、この目は堂々とこの城主の態度をとつても、豊臣派の者の別地への移動、つまり事実上の伏見城追放をして、誰も文句は言えなかつた。

そして、その目は伏見城の大広間の最上座で座していた。豪華絢爛な部屋に対しては、その目はことは似合わなかつた。見た目は狸爺つといつてもおかしくない風貌で、田舎くさい雰囲気を出していたからだ。そして身中こそ五尺四寸（約一六二センチ）と結構な高さではあるが、最近気にしている腹も出てるし肥満に近い狸である。だが、その内部からはただならぬものが滲み出ていた。

「ぐふふふ……。」

その目である、徳川家康は最上座で笑っていた。座しているからか、腹の肉が笑いで揺れてるのが分かりやすい。笑っているのは確かだが、目だけは眼光が鋭く決して笑っていなかつた。そしてその笑い方は陰気な雰囲気が出ていた。笑っているが黒い平服がよく似合つた。更に、行灯の灯も足りてないのか、大広間は薄暗かつたがそれがまた極めさせた。

家康は陰気な笑いが止まらなかつた。やっと、あの憎き秀吉が死んだからである。流石に表立ってはこれを宴にはしなかつたが、裏ではこれを杯に、家康は何度も酒を飲んだ。そしてその酒は、美味くて美味しくて仕方がなかつた。それは、これからの天下の味を思つての酒だつたからである。

元々かの者程、秀吉に忠義を誓っていない男はいなかつた。無論

だが、表面上は律儀の仮面を上手く被っており、本性は他には悟られないようにしている。だから殆ど大名達から見れば、家康は豊臣家に忠誠を誓う者はいないと目に映っていた。

だが家康は、昔から忠義や律儀がない訳ではない。昔は第六天魔王つと自称した霸王こと、織田信長の同盟には一切破ることはなかった。時には嫡男や正室を処断させたり、当時の強敵であった武田信玄の引きつけ役にされたりと、信長から無理難題を要求されたこともあった。それに、家康は全く文句を言わずに実行し続けた。

ただし、家康が信長に逆らっても絶対に勝ち目がなかったのも要因にある。近畿、山陽、北陸、山陰、四国、関東地方にも手を伸ばしていた織田家は、当時は飛ぶ鳥も鉄砲で撃ち殺す程の勢いがあった。織田家の支配した地の総石高も、五百万石は軽く超えていた。当時の信長は、最も天下人になるのが近いとも言われていた。一方の徳川家は当時、駿河、浜松、三河の三国であり、総石高も百万石もなかった。

だから二人の同盟とは名ばかりであって、事實は織田家に徳川家は支配されているのも当然だった。だが、これは半分は仕方ないつと家康自身が諦めて納得してたから、文句も殆どなかった。互いの才能の出来が違いすぎることを、家康は重々実感してたからである。だからこそ、この時は天下人になる野心など夢にも思ってたなかった。ただ、生き抜くのに必死だった。

だが、時代は大きく揺れた。一五八二年本能寺の変にて、反逆した家臣の明智光秀に信長は殺されたのであった。当時、信長は家康に堺で豪遊させようとしてた。それを堺で聞いた家康は、光秀の追っ手から逃れるために僅かな家臣達と伊賀越えをして、命からがら何とか敵地から脱出した。

その時に目聡い家康に、天下への野心が芽生えた。家康は信長の嫡男であった信忠も、本能寺の近くの二条城にて光秀と交戦。一時期は存分に暴れたが、結局は多勢に無勢で討ち死にしたことを知っ

ていた。家康はこの信忠は信長の子の中で、唯一の出来の良い息子だと感じていた。もし、信忠存命ならばそのような野心は芽生えなかったであろう。

だが、信忠も討ち死にして織田家は大混乱である。光秀は秀吉に討たれてしまったが、火事場泥棒の如く、織田家領地の甲斐一国と信濃の大半を掠め取った。名目こそ織田家援軍と発言したが、事実はそのことを乗っ取る為だった。

現に、織田家清洲城会議にて、そこ二力国の領地を家康は手に入れたのであった。織田家の救出を手助けをしたという手柄であった。これで徳川家は、一気に百五十万石近くの大大名に成り上がった。この時には家康は天下取りの野心が、完全に開花してた。

だが、時代は家康を選ばなかった。豊臣秀吉の台頭があったからである。家康はこの秀吉に一時は交戦もしたが、結局は降伏するしかなかった。ただし家康は、自己の評価と価値を存分に高めてから降伏した。この為に秀吉からは、信用こそ勝ち取れなかったが牽制は出来たので迂闊に手を出せなくした。

その後は家康は表面上は律儀の仮面を被り、秀吉の配下になった。関東一帯をほぼ支配していた後北条氏を滅ぼしてからは、秀吉が今までの領地を没収し、後北条氏の領地に移封を命じられた時も唯々諾々と従った。家康の内心では無論、故郷を離れることに怒りもあった。それに後北条氏の残党も気になった。しかも、家康一同は関東のことを殆ど知らなかった。そういう点では、前途多難が予想された。

だが家康はここに大きな好機があることを察知していた。だからこそ家康は家臣達が反対をする中、強引にでもここの移封を決定し断行した。

好機とは、まずは領地拡大であった。後北条氏は武蔵、上野、下野、上総、下総、相模、伊豆の七力国を支配していた。関東は米がよく収穫されていた。総石高は約二百五十万石であった程だ。しか

も、移封当時がこれであつて、今現在は三百万石近く実はある。これにより徳川家は、更に大大名となつて戦力を拡大させた。

次に徳川家は、李氏朝鮮の出兵に参加しなくてもいいことであつた。秀吉は天下統一間近から、周囲に出兵を公言していた。家康からしてみれば、馬鹿馬鹿しい限りの暴挙である。だからこそ家康は、後北条氏の残党と新領地の経営を盾にして、秀吉に対して出兵を平然と断つた。これには秀吉も了承するしかなかった。

そして、豊臣家に降伏したものの、家康は決して天下の野望を捨てていなかった。家康は信長なら天下人になることには納得はしたが、秀吉は出生や個人能力は自分に劣つて見えた。だから到底、天下人に秀吉がなるのは納得し難い。ただ運が良いだけだと感じていた。だから家康は運が無かつたから仕方なく降伏したのだと常々思つていた。

それに家康は降伏して豊臣家を内部を拝見すると、更に天下の野心は根強く残つた。豊臣家の内部抗争は表面上にはなかつたが、家康が降伏してた頃から既に始まつていた。

秀吉は、いくら出生を誤魔化した書物を作ろうとも、所詮は農民出である。だから秀吉は、元からの家臣達は零であつた。つまり年季の入つた家臣達がいなかったのである。

だから秀吉は、一から家臣団を形成する必要があつた。秀吉は子に恵まれなかつた代わりに、子飼ひ達に愛情を出して急激に出世させた。それは依怙贖贖つと周囲に言われても仕方がない程であつて、露骨過ぎであつた。そしてその子飼ひ達は、秀吉にとって譜代大名として扱つたのである。

だが、その譜代大名間で亀裂が入つていた。石田三成を台頭としている文治派と、加藤清正を台頭にしている武断派が対立してたのだ。ただし、家康降伏時は大した亀裂ではなかつた。

しかし、家康はこの亀裂に目をつけた。抗争事態は何処でも見られるので珍しくない。だがそれを秀吉は、全く注意もせず静観し

ていた。秀吉は、この両者を競わせる目的があつたので傍観したのだ。

だが、家康がその悪い所に目をつけた。もしこれを根深くしたら後々、豊臣政権を揺るがすことになることになると思った。大体、殆どの大名が渋々、秀吉に従っているのだ。そこで子飼いの大名達が争えば、豊臣政権は保つ訳はなかった。

それを察知した家康の行動は早かった。自分がやっているとは気づかせないように、内部抗争を煽ったのだ。これには、配下の伊賀の忍びを使った。家康には、雇った伊賀の忍びを統率した服部正成がいたので、容易なことであつた。まさに家康は、自らを獅子身中の虫となつて豊臣家を動き回った。

そして、現在。家康の工作は実を結びつつあつた。文治派と武断派の対立は、收拾がなくなっている。つまり、互いに憎悪してしまっている状態であつた。

そして、知恵が今ひとつ回らない武断派の者達を、自分に今後は味方するように家康は動いていた。三成の憎悪に気が回りすぎてる者達を籠絡するのが簡単だったからだ。文治派は武断派を馬鹿にしてる態度が多く、そこまで憎悪は高くはなかった。だから家康は武断派を味方につけようと動いているのだ。

そして一番家康が懸念していた、秀吉の命もいい時に散った。初めは早く殺そうと伊賀の忍びを動かせた。だが流石にこればかりは、伊賀の忍びが陰で工作しようとしたが無理であつた。家康は早々とこれを諦め、秀吉の寿命が尽きるのを気長に待つことにした。元々、待つのは得意分野だし、健康管理には自信があつたからである。

何故、家康が秀吉の命を早く縮めようとしたのか。それはこの両者の対立の、最後の留め具だったからである。傍観しても悪い方向になつたら、流石の秀吉も和解に乗り出す。だからこそ家康は、陰で内部工作を程ほどにして対立を煽らせた。だが秀吉は、その対

立の最高潮一步手前で死んだ。だからこそ、家康にとってはいい時だったのだ。

「今宵も上機嫌ですな。」

伏見城の大広間には、家康の最上座と上座の分かれる段のすぐ側で座しているこの男しかいなかった。不用心だったが、屋根裏には伊賀の忍び達がいて、警護していた。なので、表向きには不用心だが、万全の警備体制であった。

だが、この男には警備はいらない。何故なら、家康が特に寵愛していたからである。その老いた木の枝に等しい体に平凡な顔つきは、どう見ても大した者には見えない。しかし、その知能は徳川家随一といっても過言ではなかった。

そしてこの男は昔、一時は徳川家から出奔したが、現在は心から忠誠を誓っていた。その忠誠心は家康の中では一番を勝ち取り、密談などにはこの男を片時も離さなかった。この家康から、絶大な信頼をされてる男の名は本多正信といった。

正信も家康に話しかけて、黒い笑いをしていた。かの者は元来から陰険であった。その家康とお揃いの黒い平服は、心中からの染み出た色と言っても過言ではなかった。

「ぐふふ……。この家康がこの時をどれだけ待っておったと思うのだ正信よ。」

「はて。上様の考えておられることなど分かりません。」

家康の問いに正信は如才ない返答をした。家康はそれを聞くと陰気な笑いを強めた。その笑いは

上様は天下人しか使えないのである。この世だと秀吉の幼き息子であった秀頼に使う言葉だ。例え秀頼が六歳だろうと、秀吉の後釜はかの者しかない筈である。

だが正信はそれを無視した。つまり、天下人は家康だと正信は遠回しに言ったのだ。これを察知したから家康は、更に陰気な笑いを

強めたのだ。

「正信……。これからはどうすれば良いかの。」

笑いをピタリと止めて真顔になった家康は、飄々として座している正信に聞いた。家康の内心では既に、決定事項もある。だが、この老獪な謀臣の話を聞くのが通例であった。

正信も家康の真顔に笑いを止めた。んーとわざとらしく腕組みをして、正信は考え込み姿を見せた。この時点で正信には案がある。だが、勿体ぶって簡単に話さない嫌な癖があった。家康は普段から、その癖には苦々しいものを感じてはいた。

「……そうですね。上様が今後は大人しくした方がいいかも知れません。」

正信の回答に家康も頷く。家康自身もここまで来た以上は、焦ってはならないと思ったからである。

家康以外にも五大老はいる。毛利輝元、宇喜多秀家、上杉従三位中納言景勝、前田従三位権中納言利家の四人である。この内、秀家、景勝、利家は家康に警戒心を出している。つまり、敵意があるのだ。一人残された輝元は、中立的であって家康に敵意はない。この四人はそれぞれで家康に戦えば、勝ち目は薄い。各領地は、秀家は備前岡山五七万石、景勝は会津若松百二十万石、利家は加賀を中心に北陸八十三万石、輝元は中国地方七カ国の百二十万五千石であった。個人だと頑張つて家康の半分にしかない。

だが、もしこれが協力して刃向かえば話は別だ。家康は忽ち窮地に立たされることになる。特に利家には、各大名達から人望が高いので敵になったら厄介である。焦って豊臣家に敵対行動を起こしたら、即座に敵意のある三人は行動するだろう。だから家康は迂闊に動けないのだ。

「工作も暫し休息か。それに待てば待つ程、此方が有利になる。」

家康はそういうと、正信もこれに頷いた。

待つとは何なのか。実は、最近になって利家の体調が良くない。病気がちで、屋敷で床に伏している状況なのを家康は知っていた。利家は五大老の中で、家康は一番厄介な存在であった。利家が死ねば、家康の行動に重荷は殆ど無くなる。だからここらで、利家が死ぬのを待つ方がいいと二人は感じた。

「それにしても、上様はご健康ですな。アチラでも健康と聞いております。」

正信の横に逸れそうで逸れていない発言に、ニヤリと家康は口元を歪めた。その歪みはネツトリしたものであった。

家康は夜の契りも俄然現役だ。御年五十七歳である。凡人ならば下は引退してしまうか、この時代の鉄砲並みになる筈である。だが家康の下は、現代の連射式鉄砲並に元気なのだ。流石に毎晩とはいかないが、一日間隔で日を開けて、側室と長い夜を共にするのだ。そこの元気な所を正信は言ったのである。

「いやいや、女はいいぞ。・・・さて正信、ここにいない大名達はどうする。」

家康のこの問いには、正信は真剣に腕を組んで思考した。

ここにいない大名達とは、李氏朝鮮に出兵している日ノ本軍である。かの者達の殆どが家康とは繋がりはある。だが流石に今の状況で、家康に味方しろなぞ言える訳がない。かの者達は撤退に精一杯なのだ。家康が味方にしたい武断派の多くは、未だに出兵してる大名が多かったのだ。

秀吉死後直後には、五大老の連名で撤退を命じてはいる。そして五奉行筆頭にして文治派筆頭の三成に撤退の指示を任せている。だがその役目の成果について、全く応答がない。近日その結果を聞く為に、五大老は大阪城に集結し、三成を尋問する予定も入っている。この時に家康はかなり三成を弾劾する予定だ。武断派に対して味方であることを訴える為である。

因みに三成を叩くには訳がある。武断派は家康に好意を向けているが、豊臣家に忠誠心がある者が多い。清正や福島政則などは秀吉を敬愛している程だ。だが、かの者達は三成を憎悪していて、豊臣家のことを忘れてしまっている。なので三成を利用することによって、武断派の目を三成に向けて、豊臣家を見せなくする為に三成を叩くのだ。

「暫しは、内堀に集中した方がいいかと存じ上げます。」

つまり、ほうっておけと正信は家康に進言した。確かに、いない以上は仕方ないつと家康も感じてか、賛成の意を首で頷かせた。家康にはまだまだやることが沢山あるのだ。さつさと話を打ち切った。

正信と家康は、天下取りの野望達成の為の策略を、深夜まで話し合っていた。

## 第一章八節 李氏朝鮮脱出（後書き）

大阪城の大広間で始まる尋問。そこには、日ノ本の重鎮と一人の文官がいた。

次回、転換！関ヶ原！ 第一章九節 李氏朝鮮脱出

『9 大阪城会議』「私は決して・・・。」

## 外章 恋ノ夢ハ永遠力・・・（前書き）

どうも歴史転換です。今回は外章を書きました。これは間章と違って、一話完結ではありません。間章と区別する為に、外章としました。

では、これが歴史シミュレーションなのをお忘れないように願います。

## 外章 恋ノ夢ハ永遠力・・・

1 思イ出ニナリシ者ト、今ヲ生キル者。二人ハ、此処ニ交錯スル

一五九八年、八月の二日。天気は憎らしい程の晴天。真夏でジリジリとした陽が、大地にこれでもかと照らしている。そのおかげで、地にいる生き物全てに灼熱の暑さが舞い降りる。その暑さに多くの生き物がバテてしまっていた。

だが、その暑さを全く気にしないものもある。代表的なのは蝉である。蝉は必死に鳴く鳴く。その音は、蝉が多くを鳴らしてるので何処でも聞こえた。かのものは、必死なのだ。本能的に限られた命を悟って、ここに存在していた証を残したいのだ。その証には存在を語り継ぎしものを生み出すのが一番なのだ。だから必死に鳴く。その永久に語り続こうとさせる決意と悲しさと共に。

その暑い中、京である一団が山登りをしていた。人数は、五人と少ない。五人の格好は山登りを自覚してか身軽で、その中の二人は女であった。普通の女にしたら、ここは少々手強い山登りであった。現に男達も、気温の暑さと山登りで体力が落ちてへばっていた。だが、二人の女はこの何とも思わずに、ただただ階段を歩く。

「やっと着きましたか。」

どうやら、階段を上りきったのは女のような。女の額からはうっすらと汗が落ちていた。結構疲れたように思えるが、顔はまだ正規で満ちていた。

山奥にあるその山門もない小さな寺に、この女、古満はここに用があったのだ。だから普通、大阪城にいる各大名達の正室が、そこ

からの出入りを原則禁止されてるのだが無理をしてここに来たのだ。正室は事実上の人質なのだから、逃げ出すようなことがないよう禁止されてるだ。

ここは古満が初めて来る場所である。前から夫の小早川秀秋には、ここがどんな場所かは聞いていた。そして今まで、ここに眠るある御仁を毎年、墓参りに来てるのも聞いている。その名を聞いた古満は、嫉妬で内心は怒ったこともあった。

何故なら、その御仁は間違いなく、秀秋に心を許し恋をした御仁だ。そして、あろうことか秀秋も古満程ではなかったが、この御仁に愛情を感じた。そのことを古満が知っていたから内心は怒ったのだ。そして秀秋の女としての愛情が、自分以外に向けられたことに對する嫉妬で怒ってることを古満は重々承知してた。だが秀秋の前では出さなかったが、一時期は尾を引いた。

だが暫く経つと、既に御仁が死去してる以上は、一度は御仁の墓参りをしようと思ったのだ。そして、今回は夫は李氏朝鮮の出兵でどうしても来られない。なので、自分が代理で参ろうと都合がいい理由が出来た古満は、思い立って現在この古い小さい寺にやって来たのだ。

古満はうーんと体を反らせた。最近は情報収集や秀秋の代理として家の指示など、事務的なことばかりやってたので体を一部でしか動かしていない。なので、山登りは結構いい運動ではあった。

その登り切った階段にいる古満は下を眺めた。そこからは辺鄙な村が見えた。珍しい鷹が、村の上空を気持ちよさげに独占していた。その下にいる農民達は殆どが女で、水田の米を虫から守る為に悪戦苦闘をしている。女ばかりなのは。男は李氏朝鮮に出兵しているからである。だから男が殆どいないこの村では、女が必死で村を守っているのだ。

「二番で着きました。」

古満が眺めた視界に、割り込んだのは女の顔。古満の右腕であり、

姉のような存在である福であつた。夫は筆頭家老の稲葉正成であるがどうかは知らないが、福もかなり体力の余裕があるようだ。顔は無論だが、暑さと疲労で汗は出ている。だがまだまだ余裕であつた。

「早いですね。」

「これぐらいはどうもありません。……ですが男共はそうは思わないようですが。」

チツと下品に舌打ちして悪態つく福に、古密は顔を引きつらせた。階段だけでも、三百段はあつた筈の道のりだ。普通ならば疲れるのが道理であるが、この二人は特に気にせずに登り切つた。それが若干おかしいことを思つて、古密は顔を引きつらせながら苦笑したのだつた。

因みに彼女等の服は、大変地味の土色で、しかも身軽な服だつたので農民と間違えても仕方がない服装だつた。これは、大阪城を抜け出す際に、監視の目を欺く為にしたのである。現に門番などは、この変装に簡単に騙されてしまつていた。だが二人をよく見れば、どこことなく気品が漂っているので、変装が露呈してもおかしくはなかつた。だがまさか、ここを出ないだろうという概念から監視の目達は、二人を見破れなかつたのである。

その後、二人の護衛兵が三人登り切つた。顔面からだけでなく、体から汗が湧いて出ていた。護衛兵の服はこれも地味な土色の平服だが、護衛兵なのでちゃんと腰には太刀を掛けている。なので、彼等の言い分としては太刀が重いので、彼女等の歩く速度に追い付かなかつたのがある。だがそれでは、二人の護衛兵などとても勤まらない。

ガミガミと護衛兵三人の情けなさを叱りとばす福。それを宥める古満。叱られてシュンと体を縮む三人の護衛兵。それぞれ、顔は福は赤、古満は土色、護衛兵の三人は青に染まつている。五人はそれぞれ共通の、嫌な汗が別々に出始めた。

その一団に近づく老婆がいた。いや、老婆の年齢は六十と高年齢で合っているが、顔にはあまり皺はない。その顔だけで判断すると、五十前半に見える。それに、腰も真つ直ぐで新著婦が高い。身長が五尺七寸（約百七十一センチ）はあるので長身である。そして白髪交じりの頭には暑いのに、白い布地を被っている。どうやらこの寺、天魔寺の神主をしている尼のようだ。

ここは山奥の小さな寺だし、あまり人は立ち寄らない。だから静かな日々を老婆は過ごしている。そんな中で、甲高い女のを筆頭に、寺の参道から何人かの煩い声が聞こえた。本堂で黙禱してた老婆は、少その声を聞き迷惑げに眉を歪めた。騒がしいのはあまり好きではないのだ。

だから何事かと思って、黙禱を止めて外に出た。そうしたら、この寺では多い五人の人間が参道で揉めてた。寺で争うことは大変無粋なものである。老婆は仲裁に動くことにした。

「どうしましたか。」

参道へ向かう足音は全くなく、気配も感じさせないよう近づいた老婆は、五人に向かって急に声を掛けた。甲高くはないが、ハッキリとした声である。

その声に、五人は驚愕して慌てて老婆を見た。五人は老婆が近くこと事態が、全く気づかなかった。護衛兵は条件反射的に太刀の鐔に手をかけたが、尼の姿をしてる老婆と判断すると止めた。敵意も全く感じられなかった。

「もしや・・・濃っ言われる名ですか。」

「はい、濃々と名乗っている尼です。ここの神主をしています。」五人が戸惑ってる中、古満は名を恐る恐る聞くと、濃は能面の顔立ちでハッキリと名乗った。その顔からは不快感が出ていた。

元来、濃はハッキリとしなければ気が済まない、竹を割ったような男勝り性格だった。なので、嫌なことはハッキリと何らかの形で

濃は表す。今回はたまたま、顔立ちであっただけだ。

その濃の発言と顔立ちを見た五人は、寺で迷惑をかけたこともあったので申し訳なさそうな顔をした。しかし、その申し訳なさは寺の出来事でなく、濃の魂の気魄に威圧感を感じたからだ。ただ者ではないのを感じた五人は、怒らせないように濃に勢いよく謝罪した。濃も、そんな五人の謝罪を受け取ると、穏和な顔にした。

この五人をただ者ではないと感じさせた濃っとは誰か。実はかの者は第六天魔王と称し、時代の申し子、戦国の風雲児と全国に名を轟かせた織田信長が正室、鷺山その人であった。濃はしかも、戦国の下克上代表、美濃の蝮と悪名を轟かせた斎藤道三の娘でもあるのだ。だから濃の魂の重さは、決して軽くはない。

鷺山と名乗っていた時代は、基本的に信長の側にずっと寄り添っていた。残念なことに子は一生涯、宿すことはなかった。だから信長の子は、全員が側室から産まれた者達である。

そんな鷺山だったが、信長は離縁はしなかった。鷺山は大変賢く、賢妻であったからだ。だから信長は正室の座を、鷺山にずっと委ねていた。そして鷺山も、そんな信長に対して、鷺山は深い愛情を感じて幸せだった。

だがそれは、永遠には続かなかった。一五八二年、六月に起きた本能寺の変である。信長は毛利討伐のために向かう最中だった。だが実は鷺山も、信長と一緒に本能寺に滞在していた。鷺山は位を任命される予定だったのだ。天皇に位を任命される際、拝謁する為に鷺山も上洛したのだ。目的は違うが合理化した結果、二人は同じ本能寺に宿泊したのだ。

鷺山は当初は、信長と共に果てるつもりであった。だが、信長はそれを拒み逃げるように勧告した。鷺山は生涯で、信長の命を逆らったことがない。なので、泣く泣くその命に従って、鷺山は本能寺から逃走したのだ。謀反した家臣の明智光秀も、男こそ逃さなかったが女は易々と逃した。なので、鷺山の逃走も成功した。

その後、京の山奥にあった寺に鷲山は逃げ込んだ。鷲山は悟っていた。信長あつての織田家であることを。唯一、家を任せられる嫡男の信忠は。二条城に滞在している。本能寺からは目と鼻の先である。信忠も死ねば、織田家は完全に崩壊してしまうことを、鷲山は読んでいたのだ。そして、織田家に自分の居場所がないことも同時に悟った。

逃げ込んだ小さな古い寺には一人、神主をしている老婆の尼がいた。その老婆は、人が出来ていて鷲山に何一つ聞かないまま、老婆は鷲山をここの滞在を許した。この際に出家して、鷲山から濃つと名を改めた。更に年月が経つと、老婆が死んだ。身寄りのない老婆は、濃にこの寺の跡継ぎに指名した。これを濃は受理し、名前を天魔寺と改め神主の尼となった。天魔は信長の天下統一をしようとした魔王の墓があるつと略しての名である。

さて、これで信長の墓は二つあることになる。ここの墓ともう一つ、豊臣秀吉が信長の為に建設した、大徳寺の総見院にある墓の二つである。

秀吉は信長の遺体が無くとも、葬式は豪勢にやった。こうしなければ、夢かあの世で信長に罵倒されるのを心底恐怖したからだ。秀吉は織田家を結局は蔑ろにはしたが、信長は永遠に逆らうことが出来ない主君であることはよく自覚していた。その後、総見院というのを建設し、そこに遺体無き豪勢な墓を作ったのだ。

一方の濃の墓は墓石もない、ただ土盛りのある所に木に念仏を書いたものが中央に刺さっている質素過ぎるものだ。念仏も止めようかと一時は考えた濃だったが、一応は出家した尼なのでつけた。信長が大の仏教嫌いなのを、濃はよく認知してたからである。濃の墓にも遺体はないが、信長の髷が埋められていた。これは本能寺で信長と永遠に別れる刹那、突如信長が切って渡したものであった。濃はそれの一部を、墓に埋めたのだ。

なので、本当の信長の墓は天魔寺の方である。

「して、何のご用事でここまで参られたのですか。」

「夫、小早川秀秋の代理に、正室のこの古満がこのある墓参りに参りました。」

濃の質問に古満は答えると、もうそんな時期ですかつと濃は呟いた。確かに秀秋は、この日に墓参りに来てたのを濃は知っている。だがその墓は秘匿であり、無闇に教えられるものではなかった。

だが、濃は代理である古満を案内しようと決めた。秀秋の正室なら秘匿内容も知っていたいよう。ならば隠しても無駄であるつと瞬時に頭を回転させて案内を決めたのだ。

他の四人は本堂で休憩しておくように濃は進めた。四人は実は誰の墓参りか知らない。古満はいくら質問されようとも、こればかりは決して口を開かなかった。四人は護衛と墓参りの相手が誰なのか気がなって反論した。だが、古満がこれを認めて、四人には待機を命じた。なので、四人は渋々ながら本堂で待つことになった。

古満を一人だけにして、目的の墓へと案内をする濃。この案内間際に古満は、一人の護衛兵が結構な束にして持っていた釣船草という花を受け取った。これは、秀秋が墓参りの際にはいつも携えている花である。そのことを古満も認知していた。なので、代理の以上は同じ花を用意させたのだ。

ジリジリと陽が元気な中、二人はそんなに歩いていないが、少し本堂から離れにある墓の前に着いた。ここの墓は少ない。十しかないのだ。少ないのは、山奥だから敬遠されてしまってるからだ。目的の墓にはのしつかりと墓石があった。そこにはちゃんと死去した名が、墓石に刻んである。

「では、ごゆつくり。」

案内を終えた濃は少し離れた。不用心だが、これは古満がそれを望んだからである。どうしても、この墓に語りかけたかったのだ。そして、それを誰にも知られなくなかった。ミーンミーンつとゼミの

声が木霊している中、古満は墓前で暫し仁王立ちした。

しかし古満は直ぐに動きだして、右手の持ってた釣船草という花を墓前に添えた。墓前に置かれ風で揺らめくその紅色の小さい花は、華麗で綺麗だった。そして、そこには幾ばくかの儚さ出ていた。それが生前に一度だけあった、御仁の姿によく似ていると古満は思った。

その後、墓を濃が持っていた桶に入った水を使って洗ったり、周りの雑草の草などもブチブチと抜いた。時よりブーンと煩い蚊などに苦戦しながらも、一通り終えた古満は墓前の前でしゃがんだ。

（さて、何から話しましょうか。時間はありますから。ゆつくりと考えましょう。）

ヒューっと季節外れの涼しい風が吹いた。その墓には『駒 此処二眠ル』と不器用に掘ってあった。

外章 恋ノ夢八永遠力・・・（後書き）

次回の外章は、過去になります。

## 第一章九節 李氏朝鮮脱出（前書き）

どうも歴史転換です。今年も頑張っていきますよ。では歴史シニ  
ュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章九節 李氏朝鮮脱出

### 9 大阪城会議

十月の二十日。ここは日ノ本の摂津。季節は流石に、十月の中旬の終わりである。夏の色は完全に消えて、秋の真つ最中であつた。だが晴れてても気温は涼しかった、いや涼しすぎていた。

もう十月の中旬の終わりである。そろそろ、秋から試練の冬に備えなければならなかつた。木や草などは夏色を捨てて、秋色になつてはいた。だが中には、もう冬色に備えるものもいた。その捨て去つたものは、秋風によつて舞う。

サラヒューッと吹く悲しき音色の木枯らしは、生物の冬支度を邪魔している。生物も秋を楽しむばかりではない。必死になつて、冬支度をしているのだ。これをサボるとしつぺ返しがくることを、本能的に察知しているのだ。そう、しつぺ返しが死という奈落の底に叩き落とされることを。だから蜂や熊や蛙や蛇などは、必死になつて準備していた。

それは無論だが、人間もそうだ。やつと稲を収穫し終わつた農民は、冬の農作物を植えて始めている。所謂これは二毛作で、稲だけだと生きていけないからだ。商人は秋の儲けの勘定に手一杯で、猫の手も借りたい状況だ。

こういう状況から思考したら、秋は一番生きる物には、忙しい時期なのかも知れない。

そして、舞台は大阪城の大広間。そこには、既に石田三成の尋問の為に、豊臣家の重鎮達が勢揃いしていた。つまり、五大老と五奉行の十人である。因みに、今回は主君である豊臣秀頼は欠席である。

これは、五歳と幼すぎると配慮した為である。なので今回の会議の進行役である、前田利家が最上座に座している。

上座には無論だが五大老がいて、下座に五奉行が座している。ここで、最上座に近くを座してる順を両方共に上げる。上座側に座してる五大老は徳川家康、上杉景勝、毛利輝元、宇喜多秀家の順だ。一方の下座側に座している五奉行は浅野従五位下彈正少弼長政、増田従五位下右衛門少尉長盛、長束従四位下侍従侍正家、前田玄以の順だ。そして尋問される三成は、中央に座している。これが主な配置である。他のも警備の小姓、数十人が各地に配置されている。

（さて、どうなることやら・・・。）

その中で、上座の一番偉い所に座している家康は思った。しかし、家康は天下を奪い取る為に、三成を弾劾する腹でいた。それは文治派の筆頭格である三成を叩き、文治派に対立している武断派を味方にさせるのが理由だ。

それに元々好かなかった三成に、家康が本気に個人的に恨んでいくこともあった。それは豊臣秀吉死後に、家康の暗殺未遂があったからだ。これは、三成が家康の台頭を阻止しようとした謀であった。家康はこれを察知したから回避されたものの、裏で徹底的に首謀者を調べさせた。すると、三成が企んだことが大体の証拠で判明した。これに確証こそなかったが、家康は三成がやったと悟り激怒した。

だからこそこの際に、その恨みも晴らそうと、家康は意気揚々とこの会議に臨んだのだ。家康は顔こそ能面のような表情だが、内心では禍々しい邪気に満ちていた。もうすぐで会議は始まるが、家康は改めてここにいる重鎮達のことを頭で整理した。

まずは五大老の面子からだ。前田利家は、家康の五大老筆頭格に近い存在だ。領国こそ利家は加賀を中心に北陸八十三万石と少々少ない。しかし秀頼の傳に命じられていたり、大阪城の主権は事実上利家が握っている。だから今回の会議の進行役も抜擢されたのである。

る。

更に利家は秀吉と昔なじみであり、豊臣家に忠義が厚い大大名なのである。能力も性格も特に問題はなかったので家康からして見れば、利家が無き秀吉後の一番の強敵と踏んでいた。

だが最上座に座している利家は、神尾は白髪、顔も皺だらけ、体は病弱でガリガリに窶れていた。身長が六尺（約百八十センチ）と高い筈だが、腰が折れてて低く見える。その昔、槍の又左つと異名をとった武辺者の面影はない。その青い平服はよく似合った。

年齢も五九歳と高年齢でもある利家は、体が弱り切っていた。この会議も病魔を押して、何とか参加してはいる。だが、顔入りは真っ青で、体は頻りに震えていた。

（待てばいいだけ、後は勝手に自滅するわ。）

次に上杉景勝は、年齢は四二歳と下りではある。だが領地ならば会津若松百二十万石と、豊臣家の大名の中で第三位の石高を要している。五大老としては、新任だがその石高は油断できない。その小さい体（五尺三寸（約一五九センチ））に比べたらやたらと顔全体がでかい。目はしかし、顔に似合わず細く小さい。しかし、その格好の悪さが、逆に威圧感を与えるのだ。その威圧感をより強くする為か、黒一色の喪服にも通づる平服を着ていた。

上杉家は前の当主であった、軍神の化身つと称された上杉謙信の兵がいる。その兵は昔は、武田騎馬軍団と同じぐらい恐れられてた強者達である。その強さは、家康の三河の兵とも互角以上に殺り合えるだろう。

更に上杉家は、天下の陪臣つといわれる直江兼続がいる。これが何故に天下の陪臣と言われるのかは、その領地にある。上杉領地の内、出羽米沢三十万石の領地を持つ兼続は陪臣一である。その能力も極めて高く、天下の文字は伊達ではない。

なので、家臣団の兵の強さは五大老の中では、家康に続く実力があつた。

（田舎者に何ができる。）

しかし、家康の景勝の評価は低かった。田舎者つというのは、会津は奥州にあるのだ。いくら領地があろうと、奥州は京からは遠すぎる。なので景勝自身も、中央政治には若干だが疎かった。だから現在でも、四苦八苦して五大老の仕事をしてる。

それに、家臣団も一枚岩ではない。兼続を優遇しすぎで、こちらも派閥争いをしていた。景勝は実直であり、無骨で不器用で無口だ。そういう仲介は一切出来ない質なのだ。だからいくら兵が強くとも、それが正常に機能するとは限らないのが現在の上杉家なのである。

次に毛利輝元は、年齢は四四歳と今年は危ない年である。領地なら中国地方七力国の百二十万五千石と、豊臣家の大名の中で第二位の石高を誇っている。身長が五尺八寸（約一七四センチ）のひよる長い体格とひよる長い顔をしている。地味な橙色の平服がその顔を、目立たなくしている。

毛利家自体は特に荒れてはいない。また、毛利家には、二つの小早川家、吉川家、安国寺家の四家が別にある。これらは毛利家からは独立はしてる。その四家の内部は複雑化してしまつて、殆どの仲こそ最悪である。だがいざとなれば、基本的には毛利家当主である輝元を守護する立場にあるのだ。

（あれは味方につけねばな。）

家康は何とか、輝元を仲間に引き入れたかった。輝元自体の素質を買つてる訳ではない。輝元は五大老の中では、一番器量に欠けている男なのである。大将として何より駄目な、優柔不断な性格が災いしてるからだ。決断力のない大将ほど、家臣にとって怖い者はない。そのことは、輝元を除く重鎮達はよく承知していた。

家康は、輝元が自分に嫌悪感を持っていないことを買つてゐるのだ。まだまだ当分の間は、豊臣家の家臣として動かなければならない。そこに政敵だらけだと、何かと動くのには不便だ。だから輝元を味方にしたいのだ。それに、もれなく他の四家も味方につくので、味

方にする手はなかった。

最後に宇喜多秀家は、年齢が三六歳つと一番若く、武将としては絶頂期であった。領地は五大老一低く、備前岡山五七万石であった。しかし身長が六尺三寸（約一八九センチ）と五大老一の大男であった。顔つきも精悍で、器量もあり、猛将として周知に知れ渡っている。派手な赤の平服が、巨体の体を否応なく目立たせる。

何より秀家は、秀吉の猶子であったことが重要なのだ。そして秀吉夫妻に大変寵愛されて育った。だから豊臣家の忠義心は、五大老の中で一である。

（あの温室育ちの若造に何ができる。）

実は家康は、秀家を見下していた。いや五大老の中で家康が、最も馬鹿にしている大名であったのだ。器量なら輝元よりも、俄然秀家が勝っているのにである。

無論それは領地の少なさでもあり、若さからも未熟さも理由にあった。だが一番の理由は、家中が荒れに荒れてるのだ。家中は現在、李氏朝鮮の出兵の費用が、宇喜多家の財政を圧迫していた。家臣団は何とかしようと、俟約質素なども渋々だがやろうとした。だが、秀家はそんなことをお構いなく、湯水のように金を浪費していた。更に正室の豪姫も恐ろしく金を浪費していく。これでは家中が荒れない訳がなかった。

この秀家は温室育ちで、何でも思い通りにならなければ気に入らない性格だ。更に、傲慢で人の話も全く聞かない。なのでいくら家老が諫言しても、怒鳴り返す始末であった。なので五大老の中で、一番家が危ういのは宇喜多家なのだ。

家康の五大老の中で、自分に対しての危険順位は【利家＞景勝＞輝元＞秀家】の順である。利家は無論だが一位であるが、何故景勝と輝元が同率なのか。

景勝と輝元個人なら、景勝の方が大名として優秀である。しかし

それを、家中の混乱と味方大名の多さで、輝元が補っているから同率になったのだ。なので同率となったのである。

そして、最後には秀家がいる。しかし、これは断トツの最下位である。家康からしたら、権力だけが多すぎる世間知らずの坊ちゃんをこう評価するのも仕方がなかった。

次に五奉行の方面に家康は集中した。五奉行は基本的に、文治派の集まりである。なので家康に敵対している状態である。だがそれは表面上であって、内部は複雑化している。

この点は武断派が三成憎しの一枚岩とは大きく異なっていた。文治派は頭が切れるからこそ、一枚岩になりにくいのかも知れない。家康は密かに、こちらの内部にも工作をしていた。だからこそ内部は複雑化してしまったのだ。

まずは浅野長政は、年齢が五一歳と結構な高齢である。領地は甲斐一国二二万石である。これは五奉行の中では最高石高であるので本来なら、五奉行筆頭が正論だ。だが世間は三成を、五奉行筆頭に扱ってるし大名間もそう扱っている。なのでかの者は、五奉行の筆頭ではなかった。身長は五尺（約百五十センチ）と当時の平均値で地味だ。更にその黒い平服は、地味さを表してるようだった。

長政は義姉妹として北政所（秀吉の妻）がいたお陰で成り上がった男だ。能力は五奉行一低いだろう。だが、暗愚ではなく凡愚なので、歳の経験値で何とかこなしている感じた。豊臣家の親族の位置に長政はいたので、領地も多かったのだ。

普段から中央に長政は勤務してるので、現在の領地の経営は嫡男の幸長に任せつきりである。そうでもしないと、捨てられる可能性があったからだ。それに性格は極めて穏和なので、色々な仲介にはもってこいの人材だったので中央に滞在しているのだ。

（これをどう扱うか・・・。）

家康自身は決めかねていた。この重鎮の中で、一番位置付けをする

のが難しいと思ったからだ。

長政は豊臣親族であるので、鉄槌を下さなければならない。だが長政は五奉行の中で、密かに家康を後押ししている。しかも幸長は武断派である。しかも、長政は文治派ながら武断派に信頼されている。これは豊臣家に長く在籍しているので、秀吉子飼いの大名達からは長老的存在として扱われているからである。

だから家康が処断を誤れば、味方を大きく損ねる恐れがあるのだ。それに味方をしている長政を無闇に処断したら、自分に対して武断派は疑心暗鬼に陥るだろう。だから扱いに大変困っていた。

次に増田長盛は、年齢が五三歳とこれも結構な歳である。領地は大和郡山二十万石である。これは五奉行では第二位の領地である。身長は四尺七寸（約百四十一センチ）と小柄で、抜け目ない顔をしている。その怜悯な性格は、青い平服で表していた。

能力は偏つて、中央の政治にはもってこいの人材だが武はからつきし駄目だった。その点は文治派の能力の特徴でもあったが、その特徴に見事長盛は該当している。

（獅子身中の虫だな。まあ儂の役にはたっておりが、いずれは……）

家康は長盛のそう思っていた。

秀吉が死んだ直後から、長盛は家康に密かに近づいていたのだ。長政の場合は、死ぬ前から家康に何かと仲介をしていたので可愛げがあった。だが長盛は、明らかに自分の領地を守るために近づいた。家康は長政に、最低で隠居させるぐらいの処断を思考していた。その後は武断派の幸長を当主にさせるなど、浅野家を取り潰すつもりは更々なかった。

だが増田家は、必ず取り潰すことを既に決めていた。あまりに露骨に近づいた長盛が気に入らなかったのである。更に、増田家は甲賀の忍びを土地柄上、多く召し抱えている。家康の召し抱えてる伊賀の忍びと甲賀の忍びは、昔から敵対関係にあるのだ。なので甲賀の

忍びの優遇を、家康が許す訳にはいかなかったのだ。

次に長束正家は、年齢が三六歳と一番若く、油がのりきった歳である。領地は近江水口一二万石である。身長は四尺九寸（約一四七センチ）と少し小柄である。顔つきはノツペリとしている。その青い平服は、少し冷たい性格に合っていた。

五奉行の中でも正家は、豊臣家の財政や蔵入地の管理を担当している。なので政務は五奉行でも一・二位を争う程の切れ者である。だが文治派の特徴に漏れず、正家も武関係はからつきし駄目であった。

（あれは叩き潰すしかない。だが惜しいな。）

家康は、正家を買っていた。その手腕は、各大名達も認める腕だった。だから家康も天下を取ったら、正家を何らかの役職に就任させたかった。

だが正家は性格は冷たいが、豊臣家の忠誠心は厚い。だから家康には、完全な敵対心があるのだ。なので仕方なく家康は正家を叩き潰すつもりでいた。

次に前田玄以は、年齢が五九歳と五奉行一年齢が老いている。

領地は丹波亀山五万石と五奉行一少ない。かの者は僧でありそれを買われて、朝廷の橋渡しや寺院の管理などを任されている。

そんな重要な役職ながら、何故に領地が少ないのか。それは僧は野心もつべからずと日頃から玄以が言っているからだ。玄以は無欲であり、出しゃばることを一切しない。それもあって五奉行一野心がない男とも言えよう。

（あれには死なれては困るな。）

家康は何故かこう思った。

実はここ最近、玄以は寝込みつぱなだったのだ。一時的に危篤状態まで陥る始末である。今回は病を押しての参加だが、先程からゴボゴボと重い咳が止まらない。身長は五尺七寸（約百七一センチ）

チ)と五奉行一の長身が、咳き込みでまるで目立っていない。顔も白の僧衣と同色に見える。利家も病を押しての参加だが、明らかにこちらの方が容態が悪く見えていた。

家康はどうしても玄以には生きて欲しかった。玄以は文治派でも武断派でもなかった。現在も頑として、中立な立場を貫いている。それに、公家や朝廷や寺院などの人脈もある。万が一敵対しても、たった五万石では何も出来ないだろう。だから家康は、玄以だけは敵対しても特に処断するつもりもなかった。その中立と人脈を利用したいからだ。

そして中央に座して尋問される石田三成は、年齢は三八歳と絶頂期こそ過ぎたがまだいける歳だ。領地は近江佐和山一九万石である。この他にも石田家は、別家で何家かある。

五奉行筆頭にして文治派筆頭格であるから、政務は一・二位を争う程の能力がある。だが文治派に漏れず、戦闘は苦手である。ただし文治派の中では、苦手というぐらいの腕前はある。つまりからつきし駄目ではないのだ。

現に三成の配下には、軍師兼家老筆頭の島清興(通称・左近)や、猛将家老の蒲生郷舎、曾称高光、村山越中などの高名な武将達がいる。だから五奉行の中では、ずば抜けた戦闘力を要している。しかも家中も安定している。だから戦闘にいざなれば、石田家は大暴れするのは必至である。

(あれは利用価値があるが、あまり調子に乗らせないようにしないとな。まあ問題はなからう。この嫌われ者にはな。)

家康も先程のことから、三成が五奉行の中では一番警戒する相手ではある。だが如何せん、三成には大きな問題があった。

三成は恐ろしく人気が無かった。他の大名達から内心、殆どが三成を嫌っていた。三成の性格は恐ろしく自分に真っ直ぐであった。嘘を嫌い、政務では一切の情を切り捨てる。

しかも多少の野心家であり、豊臣家の家臣達の中で権力が欲しか

った。なので、政敵や自分が思う通りに動かない大名は、片っ端から威圧し処断していった。その苛烈な行動をしても、豊臣秀吉の一の寵愛を受けていたのでそれを盾にして断行した。そのお陰でか、多くの大名が減封したり改易にされたりした。

現に清興は元筒井家、郷舎は元蒲生家、高光と越中は元小早川家であり他家の家老衆であつた。これ等の家は、三成の手で何らかの処断が下された家である。ただし、高光と越中は秀秋を見限つての出奔であり、少しだけ事情は違う。

そして石田家はこの他にも、自分で処断した家から出奔した家老や武将達を雇つた。だからこそ家は強化したが、他の大名達からはそれがより気に入らない。だから一層、三成は多くの者から憎悪の目を向けられた。特に武断派からは、憎悪だけで殺せる程の憎しみを抱かれている。

現在は尋問にこの場にいる三成は、やや緊張している。内容も既に、前もって聞いているからだ。平服は青色だが、若干だが顔もそれに近い顔色であつた。その身長五尺二寸（約百五二センチ）の体を少しだけ震えている気がした。

家康の五奉行の中の、自分に対する危険順位は【三成＞正家＞長政＞長盛＞玄以】の順である。しかし、一番から二番以降の危険度は離れすぎている。二番以降は似たり寄つたりで、玄以は特に害すらないと家康は思っている。

この五大老と五奉行を合わせた危険順位は【利家＞三成＞景勝＞輝元＞秀家＞残り五奉行】の順だ。家康は三成を天下の為に利用はさせてもらうが、三成をそれ程までに評価もしていた。政務や外交などはこれ程に、厄介な相手はそうはいないからだ。だから三成をこの重鎮からは、二番手に危険指定を家康はしていた。

「では揃つたので、李氏朝鮮撤退についての会議を始める。」  
家康は色々と思考してたら、いつの間にか利家が会議の開始を告げ

た。ピーンつと雰囲気も緊張感が支配する。空気もそれに連動して、まだ十四時なのに冷たい空気を出していた。流石の家康も、会議に集中する為に無駄な思考を遮断した。

今回は李氏朝鮮撤退について、重鎮が集まって会議をする為に、ここ大阪城の大広間に集結した。報告状況なども兼ねるが、主な題材は何故に遅れているかである。秀吉死後の直後に撤退を発して、二ヶ月が過ぎていた。だが全くその間、三成は重鎮達に報告すらしていない。なので重鎮達は無理矢理にでも、三成を尋問させて聞くつもりなのだ。

利家の発言に一齐に大名達は平伏する中、三成は内心で焦っていた。確かに三成は報告しなかった。だがこれは、李氏朝鮮に出した使者がまだ帰国していない。だから撤退状況は何一つ分かっていないので、使者の通達結果が分からないのだ。三成は基本的にこれまで、事柄の過程を報告することをしなかった。つまり結果主義なのだ。だからしなかったが、それは秀吉が生存してたからこそ出来た特権だ。だからこうして三成は、尋問される立場にいるのだ。

それに三成は、少々立場を危くする事柄があった。それは使者を李氏朝鮮に送るのが、九月初旬と遅れて出したことである。秀吉死後直後に五大老が三成に、至急使者を出すように五大老連名書を出しているのにである。実は秀吉死後直後から三成は、内安定や秀吉の死を秘匿にさせることを優先させることに集中してしまった。なのでうつかり、使者を出すのを忘れてしまったのである。三成は月が変わって九月の初旬になって、やっとこの事柄を思い出した。流石にうつかりではすまされる訳はない、重要な問題である。三成は慌てて、使者を李氏朝鮮に派遣した。

その際には兎に角、使者を急がせた。だが使者からの報告はない。因みにこの時点で使者は、李氏朝鮮からの即時撤退の説得に失敗。必死にいい訳を思考しながら、日ノ本に帰国してる最中である。

重鎮達の視線は三成に集中している。そんな中で三成は尋問には

一部、自分に不都合なことは隠して報告した。三成は嘘は嫌いだ、それを貫いて処断される程の肝はなかった。だから遅れは天候が悪かったことや、波が悪かったので航海に支障が出ていることにした。だがこれには重鎮がきな臭さを感じた。三成の口調がはつきりしないのだ。三成は普段は、スラスラと流暢に事柄を報告するのだからである。しかも顔はやけに青く、汗も大広間は冷たいのに吹き出ている。時より、李氏朝鮮の現地総大将である秀家が詳しく質問しているが、その回答の切れ味は悪い。

徐々にだがそんな三成の態度に、大広間は邪険な空気が漂い始めた。その空気に景勝は眉間の皺を深くし、輝元と三成を除く五奉行の面々は顔が硬直していった。

「ですから、私は・・・」

「ええ石田。お主に任せて早二月が経った。李氏朝鮮なら使者は、二月もあれば行き帰りも出来よう。なのに何故に出兵した大名達は仕方なしに、使者も帰国しておらんのだ。お主・・・怠慢しよったか。出兵してる大名達のことを捨てるつもりか。」

「私は決して、そのようなことは・・・。」

長々と三成のいい訳がましい報告に、遂に家康は焦れて怒鳴りながら詰問した。それに三成は即座に反論したが、顔色は更に青くなつた。家康が三成の核心を言ったからである。三成は普段から高い位置にいるので、尋問や逆境には弱かった。そしてそれを見逃さなかったのは、家康と利家だけだった。

露骨に苛立った表情で家康は、チツとその気持ちで代弁する舌打ちをした。本当は親指の爪を噛みたかった。これは家康が昔からの苛立った時の癖である。だが流石に、親しくない人前ということもあつて何とか自重した。

「まあ落ち着かれよ徳川殿。だが三成。我らもこれには疑問がある。だからお主には、この会議が終わった次の日には、博多に向かわせる。そこで改めて撤退の指揮をとれ。ただし今年中に出兵した大名達を帰国させなかつたら・・・分かるな。」

苛立っている家康を、利家が冷静にいつて落ち着かせた。そして発言が終わると、三成に向かって扇子をトントンと首を叩く。この態度には大広間の緊張感は、一気に最高潮に高まる。三成の命はとらないと利家以外は思うが、何かしたの代償を示しているのは必至である。

（潮時か・・・）

本気で苛立ってはいるが、内心で家康は計算していた。三成を叩きすぎると後で煩い。それに無理な処断は、三成の利用価値も無くなる。三成にはある程度の地位がなければ、武断派から憎まれないのだ。

だから家康は渋々な顔を作りながら、首を頷いて見せた。冷静になることと、利家の発言に反論がないことを示したのである。これに他の重鎮も黙って頷いた。これ以上話し合っても意味がないと悟ったのだ。

三成からしたら、首の皮一枚だけ繋がった。だがこれを失敗したら、中央の政治から消されることは重々承知した。三成は平伏しながらも、体の震えが止まらなかった。

「ではこれで会議を・・・」

「お待ち下さい。」

利家が終えようと発言しようとした矢先、三成は平伏しながらそれを制した。

「なんじゃ。」

「最近、徳川殿に不審な噂が出ております。太閤殿下が天に逝かれてから、良からぬ噂が出ていますが、徳川殿自身はどう思いますか。」

この三成の発言は正しかった。そして家康は余計なことを出しゃばったと思うぞうになった。

世間では既に、家康が次の天下人という後押しの声が広がっていた。実は家康が召し抱えている伊賀の忍びに、そう噂を流すよう

に仕向けたのである。だから全国で家康待望論は広がっているのだ。一斉に重鎮達の目線が、家康一人に集中する。特に利家、三成、景勝、秀家、正家の五人の視線は鋭い。かの者達は、反家康である面々だからだ。その他の四人は若干だが狼狽えている目をしていた。家康は内心で、三成に対する憎悪を強めた。だがそんなことは、無論だが一切顔には出さない。重鎮達の目線にも怯えることなく、家康は惚けた顔をして言った。

「それなら儂も耳にしておる。全く、亡き太閤殿下から五大老筆頭を命じられた儂からしたら傍迷惑だ。私は今でも上様の一家臣として忠誠を誓っているというのに。」

野心なぞこれっぽっちもないつと言わんばかりの発言に、三成は力ツツと顔を赤らめた。これ程の大嘘を平然とつく、家康の太い神経にである。その他にも秀家や景勝や正家も同じ顔をした。出来ることなら、この事柄を尋問したかった。だが一切の証拠はない。だからもうこれ以上、家康を詰問することは出来なかった。

一方の家康も惚けながらも、目は全く真剣で鋭かった。両者とも譲るつもりはない。その為に大広間の邪険な空気が、一層極まった。大広間に不気味な沈黙の睨み合いを両者がしている中、利家が発言した。

「これ以上は収拾が付かなくなるので、会議を辞める。三成は出兵した大名達のことだけを考えよ。徳川殿は今後より一層の忠誠心を見せるように期待している。両者ともよいな。」

利家は確かに、家康の行動を怪しんでいた。だがそれ以上に、会議の進行役としての義務を果たしたのだ。

この両成敗的な発言に、家康と三成は同時に苦虫を噛んだ顔をした。そしてそれを受け取った。こうして大阪城会議は幕を閉じたのであった。

## 第一章九節 李氏朝鮮脱出（後書き）

大阪城会議は終わった。その深夜、三成は怒り狂うしかなかった。次回、転換！関ヶ原！第一章十節 李氏朝鮮脱出

『10 三成の決意』「決めたぞ」

## 外章 恋ノ夢ハ永遠力・・・（前書き）

どうも歴史転換です。少々ペースダウンしてます。  
ですが頑張って書きます。

では歴史シミュレーションなのをお忘れ無く。

## 外章 恋ノ夢八永遠力・・・

2 男、事情ヲ知ル。ソシテ、女ノ居ル所ニ出發ス。

時は一五九五年の七月十七日。李氏朝鮮に出兵した日ノ本軍は一時期の平穩を満喫していた。それというのも、豊臣秀吉が李氏朝鮮の出兵を控えているからだ。

これは秀吉が李氏朝鮮と、講和を模索し始めたからだ。そして講和の話し合いの前提に、互いの兵を引かせるのが条件だった。なので秀吉は、出兵させてた大名達を撤退させたのだ。日ノ本軍は疲弊しきつてたので渡りに船で、我先にと撤退した。

出兵した日ノ本軍の大名達は、荒れた領地を回復させるのに躍起であつた。だがそこには、故郷の日ノ本にいる安心感を喜びながらであつた。

そしてここは、摂津の大阪城に設けてある小早川秀秋の屋敷。そして舞台は屋敷の寢室である。ここには秀秋と正室の古満が向かい合つて座していた。秀秋はこの屋敷に来てから、三日目になる。

秀秋は去年に小早川隆景の養子になつた。そして秀秋は、その隆景の養子になつてから一年が経っていた。秀秋は養子前は、何事も後向きに思考する性格だった。秀秋のこの性格は、劣悪な環境が作り出したものである。

だが養子に出されてから、秀秋は劇的に変貌した。何事も前向きにはいかないが、大体のことは前向きに物事を思考するようになっていた。そして今は、自分の全てのことを高めようと努力している。

学は義父の隆景、隆景が派遣した近侍取締役の清水景治に、武は

家老の松野重元に頼み込んで師とした。普段は隆景と秀秋は、それぞれ違う城の城主をしている。だから景治に、隆景が書物を送る。その書物を参考に、景治が秀秋に教え込む。なので学の師は二人いるのだ。武は重元一人だったが、これは秀秋が最も信頼していて、一番強い武将だと感じてたからである。

そして現在、秀秋は十三歳となり努力の成果が著しく成長していった。だがその成長はまだ伸び盛りであり、どこまでその成長が伸びるかは誰も分からなかった。それはさておき秀秋は、外面が立派な青年となりつつあった。

秀秋は普段、居城の龜山城にいるが、今回は正室の古満に会いに来たのだ。古満とは結婚して一年目なので新婚ホヤホヤであるのが、まだまだ雰囲気になじめなさが残っていた。だから政務もそこそこにして秀秋は、大阪城の自分の屋敷にやってきたのだ。正室だから仲良くなりたいが一心であるからだ。

七月の中旬だから暑かった。それに加えて外は天気も雲一つない。天は陽の独り占めをしていて、その陽は高々と独壇場で踊っていた。その熱血な形相の踊りに、地にいるものには暑さを与えていた。

地にいるものは、その陽に負けないように活動していた。ある意味意固地になっっている気もするが、そこは動かなければ明日は来ないから仕方がなかった。

そして戦好きのものが横行していた。そう、甲虫である。かのもの達は、自らを極限で鍛え抜く。無論だが、他のもの達に負けぬようにでる。そして、現在は眠る筈だが、何故か活発に行動している。そして何処でも樹液を独占化したいが為に、戦をしている。だがそこには、甲虫達自身も面白さを感じてるようで頻りに武器を鳴らす。その激しい武装音色に、他の生物も樹液を求めてワラワラっと集まっていた。

「良く眠れられましたが、大丈夫ですか。」

「ああ問題ないです。古満殿も同じく寝てたではありませんか。」  
「ぎこちなく笑う秀秋に、古満もぎこちなく笑い返した。」

秀秋はまだこの頃は、人間不信は続いていた。小早川家に養子に出される前は、秀秋は秀吉の道具当然な扱いだった。その道具として扱われた傷が、秀秋は癒していないのだからである。

養子になって直ぐのことである。義父になった隆景が無理矢理嫌がる秀秋と初めて共に風呂（蒸し風呂）に入った時に、秀秋を見て息を呑んだ。秀秋の体は服で隠されてたから分からなかったが、あちらこちらに擦り傷と切り傷、そして青痣があつたからだ。秀秋は前々から隆景との風呂を頑なに断っていたが、その痛々しい体を見せなくなつたのだらうと分かった。

隆景はその体について、何も聞かない訳にはいかなかった。その結果、他言無用で秀秋は能面な顔つきで淡々と答えた。この体は秀吉につけられたと・・・。

秀吉夫妻に養子と出された秀秋だったが、その夫妻には全く愛情を注がれなかった。いや寧ろ、嫌悪されていたと言つた方が正しいかの者達は、秀秋を事あるごとに黽つていた。鞭や扇子、太刀の峰で打ち据えられた秀秋の体は、まさにボロボロであつたのだ。

これを聞いた隆景は、そうかつと無表情で言つと、さつさと風呂に一緒に入つたが内心では憤怒していた。子にやっていいことではないからである。隆景夫妻は結局、実子が産まれなかった。だから子を想う心は一際強い。そして秀秋を可愛がる隆景にとって、こんなに悔しいことはなかった。そして秀秋に愛情を与えなくなった。

その後の一年間、筆秋は様々な人から愛情を注がれた。なので秀秋は親しい人間には明るい一面を見せ始めたのだが、まだまだ完全に人を信用していない。これは残念ながら、隆景夫妻と古満なども含まれている。だからこういう密接な所で人と話す時は、秀秋の態度はかなりぎこちないのである。

一方の古満は、そんな秀秋の事情を隆景夫妻から聞いている。ま

だ若いからつと秀秋が、頑なに夜の活動をやりたがらないのも古満は理解した。そのボロボロな体を見せたくないからだつとも理解した。

だがそのことで、秀秋に対する愛情が強くなった。秀秋の全てを知り、その全てに愛情を与えたいつと想った。しかし秀秋はまだ心の整理が出来ていないのか、人間関係には躊躇している。古満は焦らずこれに合わせることで、秀秋の焦りや不安を解消しようとした。だから古満もぎこちないのである。

暫しの間、二人は特に記述する必要もない会談していた。流石に秀秋も、話していく内にぎこちなさが徐々にだが取れてきた。笑いも引きつった顔ではなく、少し無愛想だが微笑するような顔になっている。

一方の古満もそれに合わせて、ぎこちなさを取っていく。笑いも綺麗というより、可愛さが目立つ微笑で秀秋に対応する。微笑に秀秋もやっと、はにかむぐらいの笑いをしてくれるようになったその刹那。

「失礼します。最上義光様が殿との面会を希望なされます。」  
出入り口の襖で近侍が、二人のそんな雰囲気をぶち壊した。  
（最上殿か。まさか今、面会に本当に来るとは・・・。）  
秀秋は顔が引きつっている古満に気づかず、ただ思考した。

最上従四位上出羽守義光は、年齢が五三歳つと老けている。領地は出羽山形二四万石である。奥州でかなりの名家として栄えたこともあつてか、奥州での存在感は非常に高い。なので誇り高く、少々傲慢さがある性格をしている。

義光は羽州の狐と称されている。これは義光が謀略家として名が通っているからだ。これは敵を暗殺したり、毒殺したり、奸計を使つて分裂させたり、の行動が多いからだ。その成功率も非常に高く、かの者は冷酷残忍な男と思われていた。

そんな義光と秀秋の関係は皆無であつた。居城が近畿と奥州ではあまりに離れているからだ。だが十五日になつて突如、義光がどうしても面会したいと秀秋に書状を送りつけた。しかも一度に、かなりの書状を出している。秀秋は当然だが、義光の行動に内心不審がつた。だが返事には、分かりました。なら近々につと無難な返答を書状に書いて出した。その後も義光から必ず面会しますなどの書状が五・六枚来た。義光は大阪城にいたのか、返事が異常に早かつた。そんな書状を見た秀秋はますま不審がつた。

十六日には今日にでも面会しないかと書状に出してきた。随分と急な話だし、何処か焦っているような感じが見て取れた。何故なら字が、殴り書きで汚かつたのだ。昨日の字と比べたら、恐ろしく下手な字である。しかも書状は、前書きや後書きも一切無い質素なものだつた。この時は秀秋は、屋敷の維持などの話し合いで忙しかつた。今日は忙しいのでつと断る書状を、見慣れてしまつた義光の近侍に渡しておいた。その後は、いつ会えるのかなどの書状が相次いだ。これには流石の秀秋もウンザリして、近々に必ずお会いしたいと書くだけに止まつた。

そして現在の十七日の朝十時。夫婦が仲良くなろうと対談している中、義光本人がこの屋敷に来たのだ。今日は義光に面会する予定は無論ない。義光が勝手にやってきたのである。

「分かつた。応接間にお通ししておけ。後、さつさと掃除もな。」秀秋は特に会いたくはなかつた。だが来てしまつた以上、無下に追いつ返すのは無礼過ぎる。仕方なしに秀秋は、近侍にこう命じさせた。その声には、若干だが苛立っていた。それは折角の夫婦の談話を、まさかの来訪で邪魔されたからである。

近侍が去つた後、二人の間に気まずい空気が漂う。ジリジリツと寢室からは嫌な熱風が押し寄せていき、その気まずい空気の援軍としてここに入ってきたようだ。

「何の御用時だろうか。」

「分かりませぬ。ですが最上殿は用心深いお方。そのお方が何の御用もなしには会いませぬ。」

「そうよな。所で古満殿、貴方も一緒に面会してはどうですか。」

応接間は十畳あまりの部屋で、屋敷の中では一番広い部屋だ。畳もここだけは贅沢に、二月に一回で交換させている。なので畳から常に、畳臭がジワジワと暑い空気と共に漂っていた。

そしてその部屋の空間には、三人の人間が座していた。秀秋夫妻と義光である。二人は青い寝服から、青の平服にと着替えをすました。そしてふたり仲良く義光に対面する形で座していた。

「これは最上殿、お初にお目にかかります。私が小早川・・・。」  
「秀秋殿ですか。儂の名は知ってはいるな。なら無駄な話しは省略してもらいたい。二日前、関白殿下が太閤殿下に切腹を言い渡されたのがご存じであろう。」

義光の強引な話の向け方に、秀秋夫妻は困惑を隠し切れなかった。義光が応接間に入って座してから、いきなりの本題である。この困惑も無理のない。嫌な緊張感が部屋を漂う。正面には歪の茶碗が水を盛っているが、三人ともそれには手をつけない。夏でジワジワと暑い空気が流れるのに、あまりの緊張感で存在すら忘れられていた。その夫妻は、老狐にそっくりの義光を凝視した。なる程、その顔と謀略家の雰囲気からか怪しげなものを感じとれた。その雰囲気を促すように、義光の黒い平服が似合っていた。普段ならばかの者は、心から信用したら痛い目に遭うような雰囲気であろうと夫妻は感じた。

だが現在の義光は何処か落ち着きがないようである。義光が座してから直ぐに、ソワソワと胡座をしている足を頻りに動かす。顔色も少々だが青く、目に隈がハッキリと分かる。義光に何かその身に異変が生じてる事柄が発生したのが、夫妻はハッキリと分かっってしまう程の様態なのだ。

秀秋は義光に指摘された、豊臣秀次の切腹のことを無論だが認知している。一五九五年七月十五日、紀伊の高野山に蟄居を命じられた秀次がこの日に切腹した。享年二七歳と若かった。

切腹の理由として、秀吉に謀反疑惑があること、殺生関白つと残虐行為をしたということ、文治派と対立してたこと、秀吉に息子の秀頼が産まれそれに関白を継がせたかったことなどが世間では噂になっている。

秀秋は前二つの理由は、絶対にあり得ないつと確信している。秀次は肝が小さい男だ。恐ろしく度胸がなく、いつも強者にはオドオドしている。これは秀吉の養子時代に、秀秋が感じ取った性格だった。だから秀吉の勘気を被る行為は絶対に出来ないつと思った。あんな蚤の心臓がそんな大それた事は無理だと・・・。

殺生はどちらかというと、兄弟の豊臣従三位権中納言秀保だと秀秋は思った。この男も先日享年一七歳で亡くなつてはいるが、文字通りに残虐の限りを尽くした。妊婦の試し切りなどは畜生そのものであった。これは日頃から言われたことだったので、諸侯では有名だった。だが秀次は最近になって、急にこの話が出てきた。だから信憑性にこの説は欠けているつと秀秋は結論つけた。

文治派との対立は、事実である。秀次と文治派筆頭の石田三成の仲は邪険である。そしてその三成には、天下の中樞の頂点になりたいたい野望もある。だから言うこと聞かない秀次が鬱陶しく感じてはいる。だが秀秋は、理由にはなるが決定打にはならないつと思った。三成も肝はあまり大きくない。それに三成が豊臣家を、大混乱させることを積極的に行うとはあまり思えなかった。

秀秋は最後の理由が、秀次を殺した最大の理由であり決定打だと確信している。秀次自身は凡将ではあるが、そこその実力があつた。そこが今後の秀頼の為に秀次を殺したくなつたのだろう。

秀秋からしたらこの事件は、大変不快であつた。仲は良くはなかったが、同じ養子仲間であつた。その養子があんな無惨な殺し方があるのかつと報告を受けた時は憤りを感じた。一時期は跡継ぎに任

命しときながら、自分の私情で天下を動かす秀吉に改めて憎悪を覚えた。

そして豊臣家は、秀吉だけで持つことになるつと読んだ。これで主な血筋はいなくなつたからだ。多くいた養子は死亡したり、秀秋みたいに他家に新たな養子に出された。秀吉の血筋は、凡将の小さい大名しかない。血筋ぐらいに信用が高い者はいない。秀吉にはもう頼りになる大名はほんの一握りになってしまったのだ。これを秀秋は読んでいたのだった。

「ええ、無論です。」

「なら続ける。太閤殿下が妻子、側室などを聚楽第で幽閉したのも知ってるか。」

秀秋は頷いた。古満もこれに続いた。秀次は正室がいて、かなりの側室がいる。子も五人と子持ちで、これが育つたら豊臣家は安泰の道に進んだであろう。

その者達は、秀次の政庁にして居城の聚楽第（一部世間では聚楽城と呼ばれている）所に、まとめて幽閉されているのだ。これはここに秀次が住んでたし、二人も知っていた。

夫妻のその様子に義光は少しだけその後、言葉を詰まらした。どうやらかなり大事な話らしい。だがここで夫妻は焦らず、義光の言葉をジツと待った。額からは様々な理由だろうか、汗が三人とも滴り落ちていた。

「その幽閉した者達を太閤殿下は皆殺しにするらしいのだ。」

これには夫妻は息を呑んだ。義光はこの言葉を言つと、何故か涙目になっている。そのあまりの秀吉の残虐行為に、三人は憤りを隠せなかった。坊主や尼になるのは仕方なしだと夫妻は考えてたが、まさかの皆殺しである。これには緊張で顔も強ばつたものになり、義光を見る。

その義光の顔は、真っ青になっている。その真っ青になった顔でありながらも、義光は言葉を震えさせながら続けた。

「その幽閉には僕の娘、駒がいる。駒はまだ十五歳で、しかも側室になる寸前に関白殿下が蟄居された。まだ駒が京に着いて、間もないのに死ぬのはどうしてもおかしい。」

義光はそう言うと、漸くだが夫妻も義光の目的の意図が分かった。その側室未満の駒に関してここにやって来たことをである。

ここで補足すると秀次が蟄居されたのが七月の八日で、駒は十日に聚楽第に着いた。なので駒は秀次の顔すら全く知らないのである。だから側室になる寸前だったのだ。

義光は確かに冷酷残忍だ。多くの血筋の者も、邪魔なら容赦なく処断した。だがそんな義光は、子には愛情を感じているようである。子にはかなり甘かった。

特に駒は、義光夫妻が可愛がった子だ。あの秀次に側室に行かせたくなかった。だがそれは、駒が奥州一の美人だと聞いた秀次が強引に側室にと書状などで脅した。義光夫妻も関白殿下には逆らえず、泣く泣く側室に出した。

そしたら、今度はそのことで命を取られる。これ程に義光夫妻にとつて、馬鹿げた話はない。だからいち早く情報をとった義光夫妻は、駒の助命嘆願に乗り出した。秀吉は世論を気にすることを認知してる二人は、多くの大名などから書状で連判書を書かせようと動いているのだ。

「だから、是非この助命嘆願に名前を書いてもらいたい。」

義光は懷からその書状を出して秀秋に手渡した。そして手渡しをすました義光は、躊躇なく平伏した。

因みに、義光の正室である大崎夫人は同じ大阪城の屋敷に滞在している。無論だが、豊臣家の人質としてである。この夫人が助命嘆願の書状を書いて、その書状を義光が手当たり次第に大名達に手渡す。そして書状に大名が手書きで名を書くことによって、その助命嘆願書は完成するのだ。

秀秋はその書状をじっくり読んだ。その横に居る古満も同じく見

せるようにして、二人は沈黙しながら一句逃さないように慎重に見た。その間の義光は平伏を止める気配がない。どうやら秀秋が名を書くまで、それを止めない決意がそこから滲んでいた。

書状を見ている秀秋は、読み進めていく内に困惑し始めた。最近の秀吉は、私欲で天下を動かすことが多い。その秀吉がもし、その者達を処刑すると決断したら必ずするだろう。そしてそれを妨害した者達には、秀吉が今後に嫌がらせをするのは容易に思考出来る。だから賛同しない方がいいのかも知れない。

だが秀秋は秀吉を嫌悪しているし、このような何の意味もない残酷行為も胸糞が悪い。それにここで固辞しても、平伏する義光が簡単に諦めないのは、一昨日からの書状でよく分かる。秀秋は丹波亀山十萬石で、豊臣家の中ではそれなりの大名だ。そして一応は秀吉の養子だったし、義父の隆景は五大老（この当時、隆景死去後は上杉景勝が任命）である。その隆景は、大阪城のは滞在していない。なので秀秋の書状は、後ろに隆景の意志があることを示す役割もある。つまり代理の書状である。だから義光はどうしても、秀秋の直筆で書いてある助命嘆願書が欲しかった。そしてそのことを秀秋は、漸く悟って厄介な事柄だと困惑した。

（うーん、どうしようか。）

書状を読み終わった秀秋は書状を足下に置いた後、ジッと平伏している義光に対しての答えに窮した。一步でも読みを誤れば、小早川家に傷がつくからだ。まだ養子になって一年だが、秀秋にとっては小早川家しか居場所がない。その小早川家が改易されたら、自分も死ぬから慎重になるのは仕方なかった。

そうこうして思考すると、秀秋からは尋常ではない汗が噴き出ていた。それは脳を回転数が異常に早い為に、体がその熱を冷やそうとしているからである。こういう時は、同じく足元の茶碗に入っている温い水を飲めばいい。しかし秀秋にそんな思考をする余力は一切無いのか、その茶碗の水は全く減らなかった。

「殿、宜しいですか。」

必死に思考してた秀秋に、横に座している古満が声を掛けた。仕方なしに秀秋の視線は平伏している義光から、横に座している古満に向けた。

その古満も、秀秋と同様に思考していた。そして古満ならではの答えを導き出したのだ。その答えを秀秋に聞かせることで、秀秋の助けになるのではないかと思った。だから声を掛けたのである。「このような大事な事項は、即答しかねてるのは当然なことです。しかしながら、私個人的なことでは、駒殿の助命嘆願書に自分の名を書きたく思います。」

「有り難い。」

古満の後押しに、義光は平伏しながら感謝を述べた。平伏している義光は涙が出そうになっている。その影響なのか、義光の声は少し小さく震えていた。

だが義光に何の返答もなく、古満は秀秋に話を続けた。

「殿、宜しければ駒殿に面会なされてみれば如何です。ここから京まで、早馬なら二日もあれば着きましよう。最上様の返答はそれからでも遅くはないと思いますか・・・。」

「うーん・・・。」

古満の意外な提案に、秀秋は思考してみた。

（確かに、これ程の件になれば時間が欲しい。駒殿の居る京の聚楽第までは二日、それだけあれば答えがまとまる。それに張本人の顔も見てみたいし、意見も聞きたい。それならば・・・。）

「最上殿。私は一度、京に行ってくる。駒殿の顔を拝見して見たいだけだ。嗚呼、別にそれでかの人には出さないから安心なさって下さい。その後に、この助命嘆願書を京で決めたい。なのでこの助命嘆願書はお預かりしますので、今日はこの辺で・・・。」

「・・・分かった。今日は帰ろう。良い返答を待っている。」

義光はそう言うと、平伏を止めて一度夫妻に一礼して屋敷を後にした。義光は確かに、秀秋の名の助命嘆願書は欲しい。だが他にも多

くの助命嘆願書を渡す大名達はいる。なので良い頃合いだったと義光は判断し、あっさりと帰ったのだ。ただし、良い返事がなかったら、またここに来るのは明白だったが。

「さて、直ぐにでも出発したい。古満殿……。」

「分かっています。少々お待ちを……。」

そういうと古満は、慌ただしく応接間から出た。秀秋の出発の支度をする為である。近侍等に任せてもいいが、古満は自分で用意したかった。なので慌てて出て行ったのである。

（さて、どうなるのかな。）

秀秋はそう応接間で一人、ポツンと座して思考した。そして思考しても仕方ないつと直ぐ打ち切って、秀秋も自分の支度を始めた。時刻はもうすぐで正午になろうとしていた。

外章 恋ノ夢ハ永遠力・・・（後書き）

外章は何話か全く検討がつきません。では今度は駒と秀秋の初対面です。

## 第一章十節 李氏朝鮮脱出（前書き）

歴史転換です……。どうも私情が……。つと言いつきはしません。ただ暫くは更新の度合いが分からない状況なのでご理解下さい。ではこれが歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章十節 李氏朝鮮脱出

### 10 三成の決意

「ええい。あの糞古狸が。」

憤怒しながら、そう悪態を言うのは石田三成だ。その神経質な顔は、怒りで真っ赤に染まっている。青の平服を座しながらも、ブルブル怒りで震わせているのが見て分かる。その様子から三成は、かなり怒りで体を支配されているようだった。

「殿、もう少しお静かに・・・。」

「む、そんなに大きかったか清興。」

その悪態を言う大きさが気になってか、対面して座している石田家の筆頭家老である島清興が、三成に向かって諫言した。顔も発言の過激さに青ざめている。そして襖などに気配を探った。そして無いつと分かると、ホツとした顔になり、青の平服越しに胸を撫で下ろした。

現在、大阪城は夜の闇に包まれている。この日ノ本一豪華で、これ程の要塞はないと言われる大阪城も、夜の闇には勝てない。なので、かなり地味になっている。

しかし城下町の住民は、まだまだ騒ぎ立てている。亡き豊臣秀吉がお祭り好きもあってか、この城下町は簡単には地味にならない。闇に抵抗するように住民たちは、持っている行灯や松明や提灯に灯とかけて、明かりを灯す。そして住民たちは互いに助け合うことによって、その闇に人は打ち勝とうと騒いでいる。その点では人というのは、抗う生き物だがあまり意味がないことをしておるとも言えよう。

先の尋問が終わってから三成は、直ちに家老達に命じさせた。出発の準備である。無論だが、行き先は博多である。九州の北端にある博多は、三成の体では一月程度ぐらいの月日がかかる。だから直ちに命じて、明日にでも出立を考えての行動であつた。

そして夜には、出立の準備は完了した。この準備とは、何も持ち物などだけではない。行き先の宿屋や、船の移動を考えているのでその手配。また博多には早馬で、豪商に書状を渡すことによつての場所の確保。更に李氏朝鮮の日ノ本の戦前基地、肥前の名護屋城にも向かう予定なのでその手配。等等、三成はこの手筈を家老達や下人が用意してる中に全て終わらした。武勇はからつきしないが、こういう手筈で、三成に勝利出来るのはそうはいないだろう。

明日の出立に向けて三成は、夜になつて最も信頼している家臣である清興を部屋に呼んだ。これは出立などの準備に関する最終確認の為である。これについてはあつさりということが進んだ。特に問題はなかつたからである。

だがその話しが終わると、三成は先の尋問に愚痴を言い始めた。その暗き言い様に、部屋が若干暗いぐらいの明るさとあつている。ジリジリッと行灯の灯が、その暗き雰囲気又何とか盛り上げようとしてはいるのだが・・・。

三成の愚痴は主に仕事が多すぎるつとの内容であつた。だがこれは的を得てる。三成は豊臣家重鎮の中では、最も忙しく働いているつと言つてもいい。秀吉の死後の後始末、稲の収穫状況の把握などのことを殆ど一人でこなした。三成は自分が、五奉行の中で一の才覚があると自負している。いや傲慢にも他は役立たずだと感じていた。だから一人でやつた方が早いと三成の合理主義が躍起になつてやつた。それが早く効率が良いつと信じて。

だがこれには流石に、三成自身の無理が生じ始めていた。確かに三成は、五奉行の中では一の才覚はある。しかし無理が祟つてか効

率は下がったし、尋問では問題点も指摘された。

更に石田家の領地も最近では、家老達にかかりつきりで三成は全く見ていない。三成からしたら、自分の領地なのだから自分で管理したい。それも出来ない程に三成は忙しいのだ。

そして三成は愚痴が一通り終わると、今度は憤怒しながら吐き捨てるように、ある人物を批判し始めた。古狸つと悪態を言われているその人物、徳川家康にである。

元々三成は、この家康の野心と陰険さに警戒していた。家康は必ず天下を取る為に動くつと。だから何かと三成は、家康に対して難癖をつけた。それによって、家康の力の源である領地を減封しようと目論んだのだ。この点は、亡き秀吉も実は狙ってはいた。

だが家康は秀吉が存命中は、表では忠臣その者であった。だから難癖も難なくかわし、家康の領地は全く減らすことは出来なかった。そして秀吉死後に、三成は嫌々だったが暗殺を召抱えている忍びに命じた。これに唯一事情を話した清興が反対したが、三成はそれを黙らせて実行させた。暗殺なぞ汚いやり方は、三成自身も嫌悪している。だが三成は私情を抑えて、豊臣家の癌を取り除こうとしたのだ。

だがこれには家康が察知して、暗殺は未遂に終わってしまった。これを聞いた三成は忍びに怒りを当てたが、これは仕方なかった。家康は伊賀の忍びであり、長年召抱えてるだけあつての実力がある。三成の忍びは流れ者であり、中途半端な実力であつた。しかも人数も圧倒的に少なかった。なので暗殺なんて、とてもじゃないが不可能なのだ。

さて三成の家康に対する批判は壮絶だった。もしこれが他人に聞かれたら、間違いなく三成の立場はグラつくだらう。三成は自分に当てられた、大阪城の本殿にある一角の部屋だから気が緩んだのだらう、あまり批判に対する遠慮はなかった。だから清興はこれを半

ば慌てて諫言したのだ。

この清興は、三成の為なら死ねる忠臣である。嘗ては当時、大和を支配していた筒井定次に仕えていた。しかし清興は、この主君と仲が悪かった。それこそ現在の文治派と武断派と同じぐらい、この二人の仲は悪かった。なので清興は出奔した。

その際に秀吉の弟である亡き秀長などを経て、現在の三成の下で落ち着いた。この際に一五九二年のことであり、二万石と家中一の筆頭家老になった。この恩義に清興は感動し、三成の手足となっているのだ。その三成がこんな批判で危うくなるのは、清興は阻止するのは当然であった。

その清興、三成の忠誠心は狂気染みてるつと言ってもいい。だがそれとは別に、その筆頭家老にして兵法家として名高い清興は、徹に三成を評価していた。三成は天下を担う能力は問題ない。しかし人としては欠陥があり、頂点に立つ器ではないつと。そこは流石は清興であり、その目はどんな鼻屑でも容赦はなかった。

その清興だが今、一番の危惧していることがある。それがこの三成が、家康に対する怒りが尋常ではないことである。三成が、家康の暗殺を命じたことを唯一知った清興は驚愕した。あの馬鹿正直の三成がやる戦法ではないからだ。その時は無論だが諫言をしたが、三成は全く聞き入れなかった。

その三成が今度は、何かとんでもないことをやりそうな気がした。それも滅茶苦茶で危険な発言と決意を言いそうで……。そう思考すると、背中から嫌な汗が染み出た。

「決めたぞ。」

批判していた三成が、突如に言葉内容が変わった。その顔を見ると憤怒からではなく興奮で赤らめているのを清興は分かった。清興は何か頭がガンガンし始めた。汗も背中だけでなく、体中から染みで始めた。夏でもないのにである。それは本能的に何かの警告を、清興の体でしていたのだ。

「清興、私は決めた。これはしなければ豊臣家の繁栄はない。」  
「・・・・・・・・。」

清興は何か言おうとしたが、三成の鬼気迫る気迫に沈黙した。だが清興は、嫌な予感が止まらない。三成の発言に集中してか、固唾を呑んで黙る。だが体は若干だが震えていた。

暫しの間、行灯の灯の微かな灯音が支配した。三成はその重き雰囲気の中、静かにだが確かな口調で清興に宣言した。

「家康、いやあの古狸をこの手で討つ。この手でだ。」

三成は言い終わると、ニヤリつと笑みを口元だけ浮かべた。他の顔の部分は、真剣そのものである。三成は真剣に家康、いや徳川家を潰そうと宣言した。

清興は発言終了後の暫しの間、口をアングリつと開けたまま啞然とした。この主は何と法螺を吹いたのだろうか。馬鹿馬鹿しいのも程があるつと清興は第一印象に感じた。徳川家と石田家は、十倍以上の領地がかけ離れている。それに豊臣家の地位や朝廷の官位も、家康の方が上を行く。また両者の人柄は兎も角、能力も家康の方が格段に上だ。

だから清興は啞然としたのだ。どう思考しても、現段階で戦をして勝てる訳がなかった。そこはいくら臆慮しても、清興はそう判断せざる得なかった。

「無謀にも程がありますぞ。殿、そのような世迷言はお止め下さい。」

「ええい。煩いぞ清興。私はもう決めたのだ。あの古狸を討つ。」  
顔が青ざめながらの清興の諫言も、興奮状態で真つ赤にした顔をした三成には全く無意味であった。ハァーつと深いため息を吐く清興に、三成は不快そうに見た。不快なのは、この重鎮の同意が得られないかったからだ。

清興も賭け引き抜き的心情ならば、家康討伐は賛成だった。あの得体の知れない家康を野放しにすれば、主君だけでなく豊臣家の明日はないだろうっと感じてたからだ。

だが清興のそんな自己の心情は後回しである。今は、この暴走している三成を諫言しなければならぬ。あまりに無謀な内容に、筆頭家老であり兵法家として反対せざる得なかった。

その後何度も清興は諫言したが、三成は全く聞き入れなかった。

寧ろ三成は、清興の態度に苛立つて罵ったりしている。その感情は三成にはある意味では珍しい。常に冷静沈着を重んじている三成は、今は感情に任せて行動しているからだ。

フツと諫言していた清興は思った。ここまで頑なに家康を討つと宣言している三成は、果たして勝算はあるのだろうか。もしかして、徳川家討伐に対しての策略があるのかも知れない。ならば、その策があるかを聞く必要があった。

「殿、何か策でもあるのですか。」

「ない。」

はつきりと断言する三成に、清興は呆れ果てた。聞くんじやなかったと心中で思った。三成は感情でただこう宣言したかったと、清興はこれで三成の心情が分かった。

「だが私が拳兵したら、豊臣家の忠義にある者達が味方になる。そうなればあの古狸如き、この三成の敵ではないわ。」

うんうんつと満足そうに頷く三成。そんな自己陶醉している様子に、左近は舌打ちをしたくなった。それは三成の思考内容は、全く当てにならないことを清興は認知しているからだ。

三成の評価はかなり悪い。三成が豊臣家を背景に、露骨に権力を振り回す姿を見ているからだ。その傲慢で冷徹で欲深い三成は、ある意味では現在の三成が思う家康以上の不快感を持たれている。多くの大名達がこの三成を批判したく思っていたが、反抗した者は三成は容赦がなかった。このことも、三成の人気を下げる要因であった。

清興は拳兵したら味方になる大名を思考してみた。その三成に味

方をする者は、五大老の上杉景勝と宇喜多秀家、それに親友の大谷從五位下刑部少輔吉継に婚姻関係のある真田從五位下安房守昌幸ぐらしいが清興の頭の中には浮かばなかった。

この者達は三成に感情的に、好意に受け止められている者達だ。この者達ならば三成の挙兵の際に、必ず手助けはしよう。その顔触れも全ての人が有名で、決して悪くはない。

吉継は亡き秀吉に百万の兵を任せてもいっという称された勇將だし、昌幸はその老獪な頭は家康を超えるつと称された智將だ。

特に昌幸は一回、徳川家と戦をして勝利している。一五八五年に家康はこの真田攻めに7千あまりの兵で攻めた。この時は圧倒的に不利だった昌幸は、たった二千の兵で上田城に籠城。これを見事追いつめてみせた。だから家康は、この真田家は毛嫌いしている。この昌幸が仲間になれば、家康も不安がるだろう。

だがこの顔触れ以外は、特に仲がいい者が居る訳ではない。それに五大老は兎も角、吉継は越前敦賀五万石、昌幸は信濃上田三万八千石と大名としては小さい家だ。四家の石を合わせると百八十五万八千石である。これに石田家を加えても辛うじて、二百万石を超える。

五家を合わせても、徳川家の総石高に超えていない総石高である。それにも三成が挙兵したら、家康に味方する大名達が現れよう。そうなれば、二百万石なぞ簡単に握り潰される恐れがある。現段階では挙兵なぞ夢のまた夢であるつと清興は計算した。

「策が無ければ無謀です。それに無闇な挙兵は私闘になります。私闘は現在は禁じているので、お止め下さい。」

「ふん。挙兵の大儀などはいくらでもなるわ。」

「殿……。」

「味方になる大名の工作は私がやる。お前は戦術を考える。ああ条件として、野戦で堂々と戦って勝ちたいからそれを念頭に入れろよ。」

清興はまた無茶を言われた。今度は体もその発言の重さに震えた。だが三成は茶を頼むが如く、清興に簡単に言つてのけた。三成からしたら当たり前なことだ。自分に戦の才能がないと三成は感じていた。なので石田家一の兵法家である清興に任せただ。

しかし徳川家は野戦の強さは、日ノ本でも指折りの強さであつた。現に秀吉生存中の豊臣家と対峙してた時の小牧・長久手の戦では、徳川家は三倍近くの敵を圧倒した。このことが徳川家の最大の強みでもある。秀吉ですら、家康の野戦に齒が立たなかつた。

それに昌幸もあくまで籠城戦であり、決して野戦に持ち込もうとしなかつた。その徳川家と野戦で勝つのは厳しい内容である。

それに戦術も考えるとは面倒なことだ。何でかという、味方がまだ不確定であるからだ。頭数すら分からないのでは、戦術は立てられない。

（だがここで拒否したら・・・）

「分かりました。不肖、この清興。徳川家打倒の戦術を考えてみます。」

清興に反論は許されなかつた。三成の性格を熟知しているからだ。三成は臍を曲げたら、簡単に戻らない性質だ。そして臍を曲げたら最後、その者をあまり信頼しなくなる。それだけは清興は避けたかつたので、渋々だが承知せざる得なかつた。

青ざめながらも頷く清興に、三成は満足そうに横柄に頷いた。

「おお・・・。清興。やつてくれると信じてたわ。」

「ただし、戦術関係は確実に味方になる大名が決まり次第ということだ。」

「・・・分かつた。そこはお前に一任する。お前はここの大坂城に留守番として残すから、その間はよくよく思考してくれよ。」

三成の言葉に、清興は頷いた。三成は清興に任せたい以上、戦術関係に口出すつもりはないからだ。

こうして、三成は家康、いや徳川家を討伐する為に動き始めた。

だがそのことを一番望んでいたのはその家康だというのは、二人は全く気付かなかった。

## 第一章十節 李氏朝鮮脱出（後書き）

三成が決意してた丁度その頃、また家康も激怒していた。  
次回、転換！関ヶ原！ 第一章十一節 李氏朝鮮脱出

『11 家康の予想』「三成めは・・・」

## 外章 恋ノ夢ハ永遠力・・・（前書き）

どうも歴史転換です。ペースは落ちてますが、更新は続けますよ。昔は毎日更新していた体力は、今現在は持ち合わせていません。今回は、軽い死体の表現がありますので、ご注意ください。では、これが歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 外章 恋ノ夢八永遠力・・・

### 3 男ト女、此処ニ初対面ヲ果タス

時は一五九五年七月十九日の夕暮れになる。京の聚楽第に向かつて、大阪城の自分の屋敷から駆け出した小早川秀秋は、予定よりも早く聚楽第の大門前に到着した。

秀秋は移動方法として馬に乗っていたが、馬はかなりバテているようでハアハアッと息使いが荒い。馬の鼻や口からは水が出ているし、目は充血している。秀秋は此処に到着を早める為、かなり馬に無理をさせていた。それこそ寝るのもそこそこの強行移動だった。

馬に降りた秀秋は、馬の顔を左手で撫でた。馬はハアハアと言いなながらも、愛想良く左手に顔を擦りつけた。

（後で、馬小屋で休ませねば・・・。）

秀秋もこの馬を不憫に思ったが、そこは仕方が無いと割り切っていた。秀秋以外にも付き人に近侍を四人引き連れたが、その近侍はまだ到着していない。この秀秋の馬はそれなりの馬だったようで、徒歩のかの者達には追いつかなかったのだろう。秀秋のお供は一人も居なかった。

仕方なしに秀秋は、そこから近くにあった木の傘に腰を置いた。行儀が悪いことである。馬はその木に括りつけて、馬を座らせた。

秀秋が待っている間、ジリジリッと嫌な汗が吹き出た。夕暮れと曇りもあってか、陽の暑さは感じは弱い。だが、そこから逆に湿気が酷く、青の平服がベッタリと汗で纏わりつく。この感じが、秀秋にとって堪らなく嫌であった。

（しかし、いつ拝見しても豪華すぎるな。）

秀秋は目の前にあるその聚楽第を見ると、常々そう感じてならなかった。

聚楽第は切腹させられた豊臣秀次の政庁であり、邸宅であり、そして城である。此処で秀次は基本的に政治をしていた。城というのは、ここには天守閣がある本丸があつたり、城の外などには堀が深く掘つてあるなどの造りがあるからだ。それに此処には常に、一万余りの兵が滞在していて戦闘はいつでも出来るように待機している。なのでそのことを念頭に置くと、邸宅つというよりも城つと言う方がある意味シツクリ来る。

その聚楽第だが、建築としてはかなり豪華に仕上がっている。各地の所々に、瓦に貴重である金箔を貼つたり、材木なども最高級の物で仕上げている。その豪華さは大阪城にも匹敵するぐらい、この聚楽第は豪華絢爛であつた。

この聚楽第の豪華絢爛な所は、秀秋は生理的に嫌悪している。これは何故かというと、虐げられた秀吉夫妻の住まいが同じ豪華絢爛さの大阪城だつたからだ。あの辛いつつという感覚すら鈍つて感じなくなつた居場所を、秀秋の脳裏に浮かばせるのがこの聚楽第なのだ。この他にも敬愛と親愛している養子先の、小早川隆景夫妻が大変質素だということも加わる。なのでこの聚楽第に秀秋は滅多に訪れない。他にも諸所の理由があるが……。

（それにしても、秀次のあの顔……正に醜かつた。）

秀秋は暫し待つた後、漸く来た近侍四人を門番に対応させてから、今度はそう思った。四人の近侍は全力疾走したからか汗だくになりながら、仁王立ちしている甲冑姿の門番に対してここに来た説明をしている中、秀秋は先程の光景が頭の中で広がっていった。

秀秋一行は、寝るのもそこにして急いだ所為で、昼には京に到着していた。秀秋一行が京の都に着くと、京の都の町人が何故か慌しく騒いでいた。このことが秀秋は気になった。秀秋は早速、近

侍の一人に原因を調べさせると、秀次の首が三条河原で晒されているつとの原因が分かった。

そのことを秀秋は知ると、直ちにそこに向かうことにした。京の聚楽第と三条河原は、そんなに距離は離れていない。場所はどちらかというと、京都御所の近くにあった。因みに京都御所とは、天皇殿下が御住まいになられている場所である。なので聚楽第ともう一つその近くにある二条城は、この京都御所を監視と守護の役目にもなっている。

さて三条河原の大橋には、沢山の人が押し合っていた。恐ろしい人込み皆が思っているのは、晒されている秀次の首を見たいが為である。秀次の首は粗末な木の台に乘せられていて、そこに二人の監視の兵が武装姿でいる。万が一、首を盗む輩がいるかも知れんつとの当たり前の行為である。

秀秋もどうしても秀次の首が見たい。流石に、人込みに馬に乗っている秀秋はこのまま突っ込むのは不味いっと思ひ、近侍の内の二人に馬を預けた。馬を降りた秀秋は、残り近侍の二人を引き連れて、その晒された首を間近に見る為に動いた。

今日はあまりいい天気ではなかった。そのことを秀秋は天に感謝した。それはというのも、人込みに突入した三人は、その人込みの熱気に包まれたからだ。その熱気は天候が悪かった所為で、ギリギリ我慢が各人が出来る範囲内であつたからである。

秀秋は先頭を突き進んだ一人の近侍の活躍により、最前列に陣取ることが出来た。前には秀次の首が丁度、真正面になるような場所であつた。秀秋の左と後ろに、近侍が周囲に警戒して秀秋を警備している。右は秀秋が太刀を腰にぶら下げているので問題はない。

（秀次・・・）

秀秋は意外に冷静な頭で、晒されてる秀次の首を見た。

秀次の首級は、全体的に腐っていた。この七月という夏の初旬もあつて、その腐敗は早々と進行してしまつたのだ。だから最前列からは腐乱臭が漂っていて、基本的に皆が顔を顰めている。顔は多少

は死化粧をしているから、色は綺麗に見れないことはない。血も流してるから色白なものも、綺麗に見れる要因になつてはいる。

だがその顔は、苦悶に満ちた顔だった。その顔からは執念と未練が溢れんばかりに醸し出していた。まるで、自分が死ぬのはおかしいと弁論している顔であつた。

その顔を見た秀秋は、秀次の名を心中で呟いた後にしかめっ面になつた。それは周囲が顰める理由とは異なる。秀次の哀れさと侮蔑、秀吉の嫌悪と侮蔑の感情からであつた。

秀次と秀秋は、秀吉の養子仲間だが仲は悪かつた。秀次は強い者には腰は恐ろしい程に低い。だが弱い者には威張り散らす男だった。秀秋は弱い者だったので、秀次は何かと秀秋を馬鹿にしていた。威張つて鼻につく行動も多かつたからだ。

だから秀秋は、秀次の死にはあまり悲しみはなかつた。だが秀次に対しての哀れさはこの首を見て、まず秀秋は心を支配した。

秀次は自他認められてる凡将である。だがその秀吉の過度な期待に、何とか秀次は答えようと必死の努力をした。その所為か、何とが見れるぐらいに成長はした。そのことは世間も認めてる。なので豊臣家安泰つと言われていた。

だが実子の秀頼が誕生すると、秀次は用無しつと言わんばかりにこつなつた。関白が太閤に切腹されることは本来は前代未聞であつた。太閤とは、関白を隠居などをした際に他の人物に譲つた人のことを称しているのだ。だから太閤とは、政治の表向きは官位ではない。だから政治だけで判断したら、関白の方が偉いのだ。

その関白を秀吉が躊躇無く、何ら障壁もなく殺した。しかも、理由は悪逆非道つと先程から人込みで囁きあつてる。

しかし秀秋は、秀吉が実子に関白にしたいが為の狂言だと信じてる。大方、秀吉の付き従う忍びにでも噂を流布したのだろうつと秀秋は思った。そうしたら秀次を処断しやすくなるからだ。

こつ思考すると秀次を哀れんだが、それを悪化させた無能さを秀

秋は侮蔑した。実子が産まれたら、さつさと関白を辞職すれば良かったと秀秋は思ったからだ。もししたら、秀吉は喜んでそれを認めさせるように動くし、辞職になれば殺すことのなかったろう。最悪で出家ぐらいに収められた筈だつと秀秋は空想の中で結論つけた。その等のことを思考すると、秀次のその表情は醜く感じてならなかった。秀秋は人とは最後の時、その表情は今までの事柄の満足度を表すつと隆景に聞いたことがあった。それを隆景から聞いた秀秋は、そうかも知れないつと頭に刻んだ。そのことで秀次の顔は醜く、こつはなりたくないつと秀秋は心中で呟いた。自分なら満面の笑みで、最後は死にたいつと秀秋はこの時に頭でそうするように信号を送ったのだつた。

しかし秀次をこつも虫屑のように処刑した秀吉には、秀秋は嫌悪と侮蔑を感じた。天下とは一人では経営なぞ到底無理だと秀秋は承知している。

今頃は丹後亀山十万石ながらも、経営運営を自らもし始めていた。その大変さはよくよく身に沁みた。まだまだ若いからつと経営運営の殆どが、家老の松野重元等が仕事をしている。その際に秀秋は、独り善がりやで政治を出来ることは不可能つと悟った。

だが秀吉は最近の政治は、どうも一人相撲でしかないように感じてならない。そう秀秋は思うと、胸糞が悪くなった。この粗末な首も、秀吉の手の平で踊らされた末路だ。

(・・・・・・・・・・)

秀次に哀悼を示す為に一礼を心中でした秀秋は、さつと踵を返した。もうここには用は無いつとそう感じたからだ。残された秀次は、直も観客に訴えていた・・・。

だから聚楽第の主である秀次はもういない。その主無き聚楽第だが、その豪華絢爛な所からかなりかけ離れていた事柄があった。それは秀秋一向が聚楽第の中に、漸く通された時に秀秋が直ぐ察知した。

秀秋が周りを見た限り、人が馬鹿に少ないのだ。いや、これは誤っている表現だ。聚楽第の中にいるだろう非戦闘員が少ないのだ。

ここの聚楽第には全国の多くの大名達の屋敷が存在する。そこには、駒のような娘を側室に出した大名の屋敷も存在している。そこには普段、近侍や侍女や小姓などの者達が滞在している。無論だがその留守や、側室になった娘の手助けの為にである。

しかし秀秋は直ぐに理由を看破した。既に多くの大名達は大方、大阪城の屋敷に移住を命じられたのだと。現に秀秋一行が歩いている際、何軒かの屋敷を横切った。その屋敷の人の気配は、秀秋は全く感じられなかった。

これは秀秋の想像は大体は当たっていた。現に秀吉は秀次処刑の際に、処刑に関係ない大名達の屋敷に居る住民に直ちに立ち去るように命じたのだ。

だからどうしても非戦闘員が少ないし、屋敷の活発な動きもなかった。あるのは逃亡阻止の見張りだろうか、警備兵が先程からウロウロと動いていた。

先の門番から、先導役を任された足輕に歩きながらここの事情を聞くと、勿論だが正室と子は本殿に居る。だが、側室は各実家の屋敷に幽閉されていると聞いた。すでに女の処刑の話は、ここの聚楽第で知らない者はいない。秀吉は最後の餞として、慣れている実家の家で最後の刻を待つように指示した。ある意味、何とも残酷な餞別である。

秀秋一行が着いたのは、殆ど陽が山に向かってしまった時刻になっていた。着いた場所は、駒の実家である最上家の屋敷である。屋敷には所々だが、灯が照ってるのか明るい。その明かりは、何処か哀しげだが雄雄しく灯を照らしていた。

（・・・遅くなってしまったが、事は急ぐし仕方ない。）

夜中に訪れるのは、かなり親しいか急ぎぐらいである。これ以外で訪ねたりしたら、かなり失礼に値する。だから秀秋は、門の前で心

中でそう言い訳染みた釈明をした。

そして先導役の足輕は、さっさと秀秋一行を案内すると持ち場を離れた。その足輕は去り際に、屋敷の入り口に仁王立ちしている二人の門番に、秀秋一行の来訪の事情を話した。内容は兎に角、ここに居る駒に会合したいつとのかかなり話しを省略していた。

この下手な説明に二人の門番は、当然ながら秀秋一行を凝視し、内心でかなり不審がった。万が一逃亡を許したら、自分たちの首が刎ねられるからだ。なので二人の門番は、近侍を此処で待機するように命じた。秀秋一人では、何ともならんと感じての要求だった。

因みにこの時、秀秋の評価は悪かった。つと言つても、秀吉の寵愛が無くなったつとの評価だけである。なのでまだ若いので、凡将以前の男だと評価されていた。なのでこの頃は、馬鹿にする者も確かに居たがまだ無関心が大半を占めていた。

この門番の横柄な要求に、近侍達は揃いも揃って憤怒して抗議した。四人の近侍達は、秀秋を守る近衛兵になりたかった。

ここで説明すると近衛兵とは秀秋の戦の際には、秀秋本陣の周りを守備で固める兵である。もし戦になれば、秀秋の指示があれば率先して前線に参加が出来るし、何より秀秋の守護としての家の憧れでもあった。

一方のこの四人が所属する近侍とは、戦でも数少ない者しか選ばれず、しかも戦闘には主の秀秋自身の危機でないと、近時は戦に参加は許されない。基本的に、戦では秀秋の周辺だけを守備するのが仕事だ。

だから近侍と近衛兵だったら、出世が出来る度合いが全く違う。だからこそ家で、武人になりたい若い者は近衛兵に必死になろうとしている。

だが、まだそこまではこの四人の実力は達していない。だからこのお供になった四人は、何とかして手柄が欲しかった。覚えを良くして、今後は近衛兵に昇格したかった。

近侍の猛烈な抗議に、門番の二人も流石に押された。なので一人

だけ近侍を連れるのを認めた。だが、ここから大変だった。これ以上の譲歩は門番の二人はないと断言した。

決定したのは結構、時間が経ってしまった。この時、秀秋は干渉は一切しなかった。ただただ、その無益すぎる争いをジッと見ていただけだった。

「いらつしやいませ。では、こちらにどうぞ。」

門に二人は入ると、目の前に立っていた一人の老婆が声を掛けた。顔からしても、体からしても、髪からしても老婆にしか見えない。容姿はだから綺麗では決していないが、平服が調った淡い赤なのがいいのか、そんなに悪く感じなかった。

「失礼ですが、駒殿の付いています侍女ですか。」

「はい、そうですが何か。」

いえ、何もつと秀秋が言つと、老婆は此方が玄関ですつと言つとさつさと歩き始めた。この老婆の言葉だけならば愛想がいいが、態度や口振りはどこか棘があるし、高圧的に感じた。

（全く、これが最上家か。先が思いやられる・・・。）

秀秋は若干だが、心中でため息をした。これならば、駐在所に連れて行かれた三人の近侍と立場を入れ替わりたかった。それが駄目なら、その三人と供に連れられた馬でも良かったと支離滅裂なことを、途中から秀秋は思考した。

玄関に入ると、誰もいなかった。そういえば、玄関の庭の手入れもしてないみたいで、ここには人の気配が殆どないと秀秋は読み取った。

（余分な侍女などは、既にここから退去させたようだな。）

秀秋は確信した。何故なら、玄関が物が溢れていたし、その物の上には塵が大量にあったからだ。もし人が来れば、それを見たら気分が悪いだろう。だがそれは、人が訪問する訳がないと高を括るつてたからであろう。

だが今回、急に訪問者が来た。掃除しようともとても間に合わない。現に老婆の態度は、玄関に入ってから急かすように変わっていた。

「どうぞどうぞ、駒様は応接の間に居ります故、ささどうぞ。」

「分かつてますよ。おいその物はこの御方にお渡ししろ。」

秀秋が近侍に声を掛けた。近侍は背負つてた袋から、野菜と酒を取り出すと老婆に手渡しに渡した。これは秀秋一行が秀次の首を見た後、お土産に調達したものだ。

「これは・・・有難う御座います。近侍の方は、別部屋をご案内しましょう。それはここにも置いて下さい。」

老婆は喜んだ。そのこともあつてか、態度に傲慢さと急かすことは無くなった。現金な者なのか、はたまたチャツカリしてるのか分からない老婆だ。

「此方に駒様が居られる応接の間である。近侍の方はお隣の部屋ですが、宜しいですか。」

「はい、分かりました。大人しく待機してくれよ。」

「はっ・・・。」

近侍と老婆は、隣の部屋に入つていった。どうやら会合中の間、あの老婆が近侍の話し合いをするようだ。暇潰しも、作法の一つだからこれは当たり前だ。

（ここに駒殿が・・・うつ緊張する。）

秀秋は一瞬だけ躊躇したが、余り時間をかけなかった。こちらは当然の来訪者であり、待たせるのは失礼だからだ。

出入り口の襖をガラツつと空けた。そこには、一人の女性が大入しく座していた。そう、駒は一人でこの応接の間に居たのである。

外章 恋ノ夢ハ永遠力・・・（後書き）

本当に初対面だけです。次回は二人を会話を入れます。

## 第一章十一節 李氏朝鮮脱出（前書き）

本当に申し訳ございませんでした。長々（約2年以上）も更新しませんでした。理由はあとがきにて。

では、これが歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章十一節 李氏朝鮮脱出

### 11 家康、動く

石田三成が遂に、自ら家康討伐を決意したその時、同じく自分の屋敷に戻った家康は苛立つていた。正座したかの者は、いつもの苛立った癖で右手の親指を爪噛みが止まらない。その際には、本人も気にしだしている贅肉が震えていた。行灯の灯りが照らしているその姿は何処か滑稽だったが、部屋の雰囲気は鉛の如く重く冷え冷えとしていた。

「ええい、あの小童如きに……。この家康がああも言い返せんとは。……。」

憎憎しく口癖の如く言う家康。先程から同じ事を愚痴っているのを聞いている、痩せ細った謀臣の本多正信は内心で、鉛の如く重いため息を吐いた。

今日の会議が終わってから晩飯をそこそこにして、家康は正信を呼んだ。そして先程から、三成の悪態を言い続けている。正信はそんな愚痴を一刻は拝聴している。ため息も胸中で吐きなくなるのは仕方があるまい。

無論だが、正信がそんな愚痴を聞きに呼ばれた訳がない。だから愛想良く頷く訳でもなく、ただただコツクリコツクリと居眠りがちに聞いている。しかし、内容はしっかりと耳に入れている。

（大殿の本性が丸出しだわ。）

家康の愚痴を聞いている正信は、家康のあることを危惧していた。世間では家康は、何事も待つのが当たり前という気長体質風潮があるが、正信からしたらそれは違つと断言が出来る。

それは当たっており、本当の家康は短気である。だが家康は、若いときに今川家に人質時代があった。我が儘を許される環境でない生活を送ってきたからこそ、家康はある程度の我慢出来るだけだ。しかもそれは、こちらに必ず利がある場合のみだ。だから秀吉の死、信長の無茶難題などにも耐えた。そこに利があるのを確信していたから・・・。

だが今回も確かに待てばいいかも知れないが、あまり待つ必要性が薄い。それに家康に重みになる人物がいない。秀吉、信長、武田信玄などの名將はもうこの世にはいない。

現在では、自分こそ天下一の実力者だと自負している。ある意味ではこれは傲慢かも知れないが、世論ですらもそう思っているのだから仕方ないことだ。

（焦らずにいけばいいのだが・・・。）

正信はそう思いながら、コクコクつと首を面白可笑しくただ動かした。

「ちっ・・・。」

正信がそう思想している刹那、家康が舌打ちをした。正信全く聞いてないことにいい加減、家康が苛立ったからだ。家康からしたら、ああまで苛立ったのは近頃なかった。秀吉の死や世間の評価。更には大阪城の事実上の伏見城占拠つとこれまでいいこと尽くめだった。

人というものは、いや権力者というものは、いいことばかりだと嫌なことには、機敏に過度に嫌がる。家康もその気分だった。

だが、正信はそんな家康舌打ちをされても、全く居眠りをしていて起きない。それがいつもの阿吽の呼吸だからだ。

正信からしたら、甘い蜜ばかりだったのも毒だと感じた。最近、何事も上手くいきすぎる。策略家つとして、家康を諫言するには丁度良い材料だった。それが劇薬になっても・・・。

家康は正信に重い口調で告げる。

「正信、予定を早めるぞ。」

（やっぱり……。）

家康の一言に、正信は家康の思考が容易に読めた。劇薬になるのを避けたかったが、その可能性は一気に高くなった。

家康の気持ちこそ理解は出来るが、正信は胸中でため息を吐いた。ここで下手に動いたら、家康の今までの地位や名譽は失いかねない。徳川家の地位は、微妙な所にある。都から離れているが、関東250万石以上の大大名。家臣も有能で、兵も強いと評判の三河兵だ。だが豊臣家からは、常に警戒されている。

それこそ、ここは我慢をすべきでだと胸中ではあった。

「では、如何しましょうか。」

しかし、正信は胸中とは逆の言葉を発した。その顔はやや呆れたように歪んだ。

正信は元々、家康が幼き頃から仕えた男だ。一時的だが徳川家から出奔したものの、家康の癖や性格を家臣一詳しい。その点では本人の家康よりも熟知している。

その正信は、ここで反対しても家康はそれを受け入れる訳が無いと確信していた。そればかりか、ここで反対したら臍を曲げる。

ならばこそその発言であった。正信は仕方なしと前向きに次の言葉を待った。

「諸侯の策謀、汝に任せる故にまとめた報告を近いうちにせよ。」

「はっ。」

正信は承知したものの、おやつと感じた。当の本人は、家康から過激な命を命じられるかと思っていたからだ。諸侯を友好を深めよとか……。これで劇薬にはならなかったと正信は胸を撫で下ろした。

しかし家康からしたら、確かに三成に憤怒してても頭脳はまだ冷静だ。もしここで自分が強引に動けば、また色々と煩くなるのは必死だ。ここは待つのが利つたと……。無論、渋々なのだが……。

だからこそまずは、近頃してた策略を一通りまとめる。そして次の一手を打つ。着実に慎重らしい家康の命だった。

（まだ早い、だがこの後はじっくりと料理してやる。そう・・・じっくりとな。）

家康は現在一人である。居た正信は、この空間から既に退出させた。正信自身もそれにすぐ従った。報告をまとめる為である。

既に正信は、何人かの諸侯大名と密談をしていた。無論だが、家康の指示である。そのことも報告とあると、すぐには出来ないから何も異論なく退出したのだ。

家康は一人で酒をぐいっと飲みながら、動くであろうのを三成を想像した。今日の会議で、必ずや三成は動くと確信した。あの三成の伶俐な顔に、不快感と怒りが隠せなかったのを見た。そこは、会議でもしっかりと家康は、冷徹に物事を判断できた。

（後少し、後少しで・・・。）

その後を想像した家康は、にんまりと口を歪めた。体からはアルコールとは別に、高揚したからか汗が出た。季節は冬に近いが、今の家康はまるで無縁である。

寒さの風が、僅かに行灯の灯が当たる中、家康は女を呼んだ。自らの高揚感を発散させる為である。既に頭には、三成の怒りはサッパリ消去していた。

## 第一章十一節 李氏朝鮮脱出（後書き）

改めて謝罪します。申し訳御座いませんでした。

ここ約二年は、就職して環境に馴染むのと、サービス業特有の不定期休暇で気力体力がありませんでした。

元々、つい最近にログインしました。この作品を消去する為に・・。どうせもう読まれてないだろうっと思っただら、本当に少ないですが、まだ読者様が読まれてました。

ここで消去したら・・・。そう考えて、何とか更新しました。汚い文、誤字、短い、話が進んでない・・・すいません、予め謝罪します。誤字等々は報告されたら、なるべく早く直させていただきます。

ここでお知らせ。

次回の更新から、かなり不定期になります。

あとがきに次回予告をなくします。内容は作者の愚痴？等々にします。

サブタイトルを変更します。現在だと『第一章 李氏朝鮮の脱出』は判断しにくい為。

外史や間章を不定期にします。なので次の更新が外史・間章とは限りません。以上です。

この冬での風邪は極悪ですから、お気を付けて。ではまたの物語でお会いしましょう。

## 第一章十二節 李氏朝鮮脱出（前書き）

やっと更新・・・しかも約半年かかって。極め付けに話しが進んでない。っああ読者様の視線が痛い。

では、これが歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章十二節 李氏朝鮮脱出

### 12 荷物の整理

日ノ本軍が李氏朝鮮の即時撤退を決定してから翌日。各日ノ本軍の大名達は、急速にやらねばならぬことが一つ増えた。それは、現在保管している各荷物整理である。

各大名達は故郷の日ノ本から色々とり寄せた物や、ここで強奪や調達した物が数多く持ち合わせていた。流石にこれを全てポーンと現地にうち捨てるのは大変勿体がないと、急いで荷物整理に追われることとなった。

それは無論、釜山城にいる小早川秀秋も例外ではなかった。かの者も、家臣達に急いで荷物整理を命じている。かの者の場合、他の大名達とは少々だが事情が異なる。現地での強奪品が一切無く、李氏朝鮮の現地総大将解任の前、現地の民が自ら差し出した品物の整理が主であった。

秀秋が現地総大将の時は、李氏朝鮮の一部だが民に慕われていた。それには理由がある。秀秋が一貫して政策を李氏朝鮮の民の困窮を救う重視したからだ。初めこそ民達から不審がられたが、解任間際には、その純粋な秀秋の真心が一部の民は理解した。

そして、そんな秀秋だから日ノ本軍を自体を信じようっという民も集まり始めた。これには秀秋は感激した。自分がしたことに誇りがここで初めて起きた瞬間だった。

そしてそんな味方をしてくれる民達に、秀秋は積極的に話をしてり聞いたりした。いくらかしが現地の語源しか話せない秀秋は、もっと互いに心が通じたいから通訳を探した結果、何と家臣の村上吉

正を起用した。実は吉正、こういうことを予知し、李氏朝鮮語を密かに習得していたのだ。これには秀秋は驚愕したが、吉正は右筆としては当然つと愛想無く答えるだけであつた。だが秀秋は迷い無く即座に、自分の通訳専門に抜擢した。大体、通訳が不足していたし、吉正はよく知つてゐるから信頼も出来た。だからこそ吉正を起用したので。

秀秋巡回時は常に、通訳の吉正と見回りとして警備隊長の柳生宗章を傍らに、何度も民達の話聞いた。中には無論だが、秀秋に容赦なく罵倒や怒号をいう民達もいた。そんな民にも秀秋は怒らずに、ただ聞いて冷静に対応した。自分が怒れば、二度と民達が心を開かない恐れがあるからだ。

民達の信頼を、徐々にだが勝ち取つた秀秋。その結果、戦乱に巻き込まれて貧しい民達だつたが、秀秋に敬愛するようになり貢ぎ物を送るようになった。秀秋は固辞したが、民達がどうしても半ば強引に受け取らせた。これには秀秋は苦笑して頂いた。

その大事な貢ぎ物を整理しなければならなかつた。中にはどうしようもない道具も沢山あつた。しかし秀秋からしたら、貧窮してる民が何とか送つた気持ちを汲み取つて、全てを日ノ本へ持つて帰国したかつた。

だが急ぎ撤退、事実上は逃げ帰るようなものだ。それに秀秋は、最早一大名の身分であつて、現地総大将ではなくなつてゐる。このことが更に日ノ本軍には向かい風となつてしまう。

それは新たな現地総大将の宇喜多秀家の政策は、一貫して李氏朝鮮の民達を弾圧したのだ。これにより秀秋が折角築き上げた日ノ本に対する友好関係も一瞬にして崩壊。再び民達とは険悪化してしまつてゐた。しかも裏切られたつと民達は前より反発が起きてしまつてゐる。

身軽にしなければ、こちらも危ない。各自は必要最低限の物だけを持つて、日ノ本へ帰国する方針に、秀秋は命じられる羽目になつ

てしまったのだ。

秀秋はこの方針に従うしかなかった。無論、内心では泣く泣くである。そして、そのどれが必要かの決めつけは、信じてくれた気持ちを踏みにじる行為そのものであった。それが秀秋にとって今何よりも辛く悲しかった。

釜山城付近は、今日は生憎の雨だった。しかも、ただの雨ではなく土砂降りであった。ザーザーと煩く秀秋の部屋ばかりか、釜山城全体を奏でている。夏のネットリした感じの雨ではない。もう十月の半ばの終わりである。だからといってサツパリもしていない。雨はシットリとした感じであった。どちらも人にとっては、あまり好まれない感じである。

チャプチャプと土には一時的の湖が出来ていた。そこに、蛙が丁度良いつといわんばかりに泳ぎを披露している。実にいい平泳ぎであった。その平泳ぎに完成の雨音が鳴って、蛙は調子に乗ってまた泳いでいた。

そんな整理には決して合わない天気だったのに秀秋は、自分の部屋を整理していた。こういう事は家臣達か下人に任せればいいのだが、秀秋は頑なに拒んだ。ここは自分が整理したいのだといって、秀秋は一人で黙々と作業をしている。

秀秋の部屋にはまだ幾つかの貢ぎ物があつた。それは秀秋が特にここでの思い出深い物ばかりだ。秀秋の部屋にあるのは全部そうである。初めて貰った茶碗、なけなしのお金で買ったという硯。子供達から貰った綺麗な石や30年ぶりに作ったというお祖母さんが作った笠。

秀秋部屋以外の他の物などは、筆頭家老の稲葉正成や吉正などの目利きがある者に任せた。だがこの思い出深い物には自らが選択しなかった。だから手伝いを拒んだのだ。

秀秋の部屋はかなり綺麗になっていた。いや、物が無くなっていると言った方が正論だろう。既に朝からやって、現代ならおやつの時間にさしかかっていた。部屋自体は地位の低くなつた秀秋には、小さな部屋を与えられたので広くはない。畳、八畳ぐらいの広さであつた。なので寧ろ、ここまで時間が掛かるのがおかしいぐらいだつた。

だが、それは一つ一つ貢ぎ物を手にとって、悩んでる時間が長かつたからだ。掃除などの時間は、あまり時間を掛けていない。品物をどうしようかと悩んでいる時間が圧倒的に長かつたのだ。

悩んだ結果、手放さざる得ない物は、先程から下人などと呼んで廃棄させている。なので、全体的には綺麗にはなっている。埃なども部屋中に目立つが、整理中ならば仕方がない。この状況は他の整理中である、他の大名達の部屋も全く同じだつたのだから。

「んー。ちつと休憩するか。」

ゴキゴキつと方の骨を鳴らし、廊下から薄暗く見える空を眺めて歩きながら秀秋はそう呟いた。左手には箒を持っている。どうやら、ゴミなどを外に出してたらしい。

一瞬だが、ふつと水を頼もうかと下人に声を掛けようと思ったが止めた。たしか、部屋の竹筒にまだ水が入ってた筈つと思ひ直したからだ。それに、下人も急ぎの退却で忙しいのは間違いない。そんなことは呼ぶのは我がままだと思つたのも止めた要因だ。

秀秋は廊下で慌しくすれ違ふ人の挨拶もそこそこに、自分の部屋に付くと襖をガラツと開けて箒を部屋に放り込んだ。畳にガラツと落ちた箒に合わせて、どつと埃が宙を舞う。まるで少々早いが雪のようである。秀秋はしまつたつと内心で思ひながら、眉間に皺を寄せた。美しいのは違いないが、それは不快感を湧き出させるのに十分な光景だからだ。

だが、結局はここに入らなければならぬ。仕方なしに入室した秀秋は早速、自分の着てる黒い平服をパンパンと軽く叩いた。どう

やら服に着いた埃が若干だが気になったようである。黒は掃除で汚れを目立たない為だったが、今では逆に目立ってしまったようだ。

埃を払い終わった秀秋は、箒を入り口の襖に立てて、そのまま入り口の襖は開けっぱなしにした。無論、埃を部屋から出す為である。ガラんとした中央に、秀秋はそこに年寄り臭く座した。んーふうと背伸びをして、またゴキゴキと肩を鳴らす。

秀秋はその後、机の上に置いてあった竹筒の中の水を飲んだ。ゴクリッと喉腰にいい音はした。飲みながらがちゃつと暇つぶしに、腰に掛けてた二振りの刀を片手で持った。普段からこの二振りは欠かさず腰に抱えている。これが無いと、少し不安になる程であった。

この二振りは、初めから秀秋が所有してた訳ではない。元々は、亡くなった秀秋の義父、小早川隆景が所有してた物なのだ。つまり遺品である。

一つは、小早川家代々に伝わる太刀であった。鎌倉時代の光忠という備前の名刀工が作った太刀であった。大きさは二尺（約六十センチ）。太刀・銘光忠、名を影炎かげろうという。この太刀は、正当な後継者である小早川家の当主にしか持てない誇り高き物なのだ。その切れ味は数百年も経つのに、一向に鋭く妖艶に光る。秀秋も蔚山城の戦いでこれで何人も切った際に、刃こぼれ一つもなかった。いや寧ろ、太刀が赤く染まり燃えているようで美しかった。

秀秋はそれを、隆景が亡くなる前日に譲り受けた。この際に秀秋は、隆景の誇りと小早川家の魂の尊さを受け継いだ気がしてならなかった。この太刀を通して、隆景が自分を見守っているように秀秋は感じていた。だからこれを手放すのは風呂か、寝る時か、公式の場で警備上離さなければならぬ時ぐらいである。

もう一振りは、秀秋にとっては水軍としての誇りであった。元々、小早川家は海沿いにあった家だったので、水軍の将としての名が強い家なのだ。

その水軍の誇りといってもいいのが、この脇差である。長さも1

尺（約30センチ）と陽炎の半分しかない。これは船上では波もあることから、上手く足場が固定しないことが多々ある。その際に臨機応変に素早く行動することが第一である。なので、この脇差はある。名を水守<sup>みなもり</sup>という。

この太刀は元々、小早川家になかったものであった。そこにはとある武将が纏わる。その名は鶴姫といい、数少ない戦場に出陣した女傑だった。この女傑、まだ戦国時代中間、1540年代に大活躍した。

当時、中国地方覇者の大内という大名がいた。西ノ京と言われるまで本拠地の山口は栄華を築き、まだ毛利家は大内家の一配下に過ぎなかった。西の大内はこの時、権力の絶頂期だった。

鶴姫は、この大内家と死闘を繰り広げ何度も勝利している。鶴姫は当時、伊予（愛媛県）大山祇神社の巫女に過ぎない。だが、その豪族である河野家の一族でもある。その際に、出陣が出来ない主君の代わりに出陣したのだ。

鶴姫は戦の際、大内武將の小原隆言を水守で討ち取っている。鶴姫にとって最後の戦も勝利で締めくくったものの、恋人や家族が相次いで討ち死にしてしまう。それに絶望してしまった鶴姫は、遂に自殺してしまった。

その水守は、流れに流れて小早川家に来た。先代の小早川隆景は、養子に來た秀秋にすぐこれを譲った。当時は互いに信頼関係はなく、形式で渡された太刀。だが秀秋はかなり惚れ込み、守り刀として持ち続けている。

攻の陽炎・守の水守。秀秋にとっては大事な大事な魂である。

（ん・・・。）

スラッと音がして、鞘から抜いた陽炎。何となく抜き、そのまま微動だにしない秀秋。陽炎は暗い部屋の中でも怪しく光る。その妖艶な美しさに、秀秋はただ見惚れていた。

人間は時に一点に集中していると、些細なことからその集中が途切れることがある。例えば、試験勉強中に掃除がしたくなるなど・・  
・。秀秋の場合、それが自らの魂を見ることがだった。最早、秀秋の頭脳には掃除がなくなっていた。

## 第一章十二節 李氏朝鮮脱出（後書き）

まずは、すいませんでした。まさかあの後に転勤を言い渡されるとは。やっとこちらの環境にも慣れました。

さて、秀秋の武器ですがオリジナルです。実際には所持してません。何故に二振りか。それは秀秋の軍旗がアレだから。名だけで一月かかりました。筆者にネーミングセンスを下さい神様。

更新ですが、次はいつになるかは分かりません。気長に待つて頂くと幸いです。今年中には最低します。

## 第一章十三節 李氏朝鮮脱出（前書き）

大変、お待たせしました歴史転換です。話は全く進んでいませんが、ご了承ください。

では、歴史シミュレーションなのをお忘れなく。

## 第一章十三節 李氏朝鮮脱出

### 13 幼き者の訪問

幾たびの時間が流れたであろうか……。秀秋は座したまま、ただ己の太刀をじつと陽炎を眺めていた。秀秋にとってはこの一瞬は、瞬きをするぐらいの出来事である。全く時間など関係なかった。

そして外は、いつの間にか曇天を切り裂いて光がいくつかだが地に注いでいる。曇天の僕である雨はいなくなっていた。それを蛙が残念そうに、水溜りから動きを止め眺めていた。それを刹那の油断を逃さず、何処からいたのだろう、蛇が疾風の如く襲い掛かった。蛙は一瞬にして、食われたことに気づかず、その生を終えた。蛇はこれに満足せずに、さっさと移動を開始した。来るであろう、冬の支度をする為に……。この世は弱肉強食なのだ。蛇は思っているに違いない。その姿を鋭い眼光で木の上で見物してた驚を知らずに……。

なにやら前触れもなく、急に廊下からドタドタと足音が聞こえた。その反動でか、キシキシと古ぼけている廊下が悲鳴が聞こえる。だが足音については、何処も誰も大急ぎで整理しているのだから特別な訳ではない。現に秀秋がボーッと影炎を眺めている時も足音はあった。無論だが、秀秋は全く気にしなかった。

だが、今回の音は何か違う、そう何か……。秀秋は耳で聞き取り、そう感じ取った。何事の場合でも己の勘は重要である。勘が鋭ければ鋭い程に、物事の迷いもない。あの有名な第六天魔王こと織田信長がいい例である。かの者の鋭き勘がなければ、戦乱の寵児とはならなかっただろう。

秀秋はすつと影炎を鞘に元に直すと、身なりを軽くだが整えた。ふーっと深呼吸を入れる。これから来る何かに、落ち着いた心で整えてことに備えようと考えたからだ。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

秀秋はただスツと息をし、座して待った。心は何時の間にか、無に近い心境まで達した。秀秋のその体を、天から射した赤き灯で染まる。それは、秀秋が心を無にしつつも、今から来るであろう何かの期待感を表していた。

「殿、宜しいでしょうか。」

尋ねてきたのは右筆の村上吉正だった。言うとズカズカと部屋に入室するや否や、秀秋の前で座して対面した。その間の入室礼法は一切抜きだ。普通の大名家なら、烈火に激怒するだろう。なのに吉正は涼しい顔をして、秀秋をただ真っ直ぐに凝視していた。全く気にしていないようだ。

この秀秋に向かったの対応は、吉正にとっては当たり前になっている。何回か小早川家三大家老（誰かは間章の人物設定にて）に無礼だつと非難された。しかしこれに対し秀秋は、用件をすぐ淡々と言う姿勢に好感を覚えた為に許可した。

秀秋は基本、回りくどいやり方を嫌う。元来、報告などはどうしても良くしようと口調が変わってしまう。吉正の対応は、その無駄と私欲を無くした過程である。なので秀秋は許可したのだった。

さて秀秋は、この来客の吉正の粗方ではあるが、大体の用件が読めていた。それは吉正の対応ではなく、発した言葉に隠されたのを看破したのだ。吉正は「時間」という語源を使わなかったことである。

(急ぎだな。)

「ああ、構わん。して、どうした。」

秀秋は、内心で気を引き締めつつ尋ねた。もしかしたら、何か異変が起きたかも知れないからである。

「実は……。」

「ヒデアキ・サマ……。」

吉正の会話を遮って、後ろからひょこつと女子が顔をだした。見た目からして十二歳ぐらいだろうが、かなりみすぼらし服をしている。顔色もあまりよくない。

吉正は顔を苦々しくして、告げた。

「……こういうことです。」

「おたあ……。」

秀秋は久々に見たその知人、おたあに思わず顔を笑みで崩した。

おたあは李氏朝鮮の生まれの子である。戦争孤児として生きていたが、とある縁で小西行長の保護を受けている。これは丁度、半年前ぐらいの出来事である。

まだ基本的にまだ片語ながら、日ノ本の言葉が使える。また、遅く話したらちゃんと言葉の意味も理解できる。幼いことを差し引いても、かなりの頭の良さである。丁度、頭にほとんど使われていない引き出しに、どんどん物を入れるが如くである。

又、みしばらしい服なのは、一番これが身軽だと愛用してるなど、活発な者でもある。時たま勉強に飽きたつという木に登り、そこで昼寝をグーグー満喫するというぐらいである。

そんなおたあと秀秋は、ひょんなことから知り合った。ある日、いつものようにおたあは、勉強が飽きて木で寝ていた。

おたあは昼寝をする時は木の上だった。これは体の身を守るための知恵だった。こうしたら、下からも気にしななければならないが、基本的に下だけ気にしたらいい。上・横は鳥や蛇を相手にするだけで、一番厄介な人と相手にする可能性が少ないのだ。だが同時に逃げ場は限定されてしまうが、おたあはそこまで考えてない。ただ、その時は今に必死だったから。

するとおたあは下から声を掛けられた。

「そこは気持ちがいいのか。」

その声こそ秀秋であった。小早川家はこの時期、釜山城に現地総大将の宇喜田秀家の与力となっていた。秀秋は総大将から解任され、一大名になり下がっていた。

（あつ確かヒデアキサマ・・・。）

おたあ自身は秀秋を認知していた。それに、何度かだが遠目で見てもいる。おたあは一瞬だが驚きで答えが返せなかった。だが、おたあはお礼が言いたかった。それは、秀秋に恩義を感じていたからだ。秀秋が現地総大将の頃、戦争孤児についても対策をだした。基本的に現地の民には捕虜、略奪は一切禁止。これに孤児も当てはまる。そして、孤児にはなるべくなら寺社に斡旋する方針であった。

おたあはそれに当てはまった。寺社とは残念ながら何かが当てはまらず、脱走することとなった。この時に秀秋のことを僧から聞いた。釜山城周辺で生きたおたあは何度か秀秋を影から見た。食い物に困っていると、日ノ本軍の物だと日ノ本軍から食糧を渡された。秀秋は周りの反対を押し切って、よく民に食糧を分け与えた。後にこれは秀秋が日ノ本軍に叩かれる要因の一つだ。

注意『は李氏朝鮮の言語です。

『あつ、あの・・・。』

（しまった。うっかり。）

緊張してしまっているからか、おたあは李氏朝鮮の言語を話してしまった。しかも、下から眺めながらである。周りからしたら無礼極まりない行為に等しい。更に、おたあはその見た人物はかなり名高い人だと本能的に悟った。

（どうしよう・・・。）

打ち首になってもおかしくない。やっと未来が切り開いたのに、ここで潰えるの・・・。そう思うとおたあの顔はサァーっと青ざめた。（朝鮮語。それに、困惑してるのか・・・。）

おろおろしていると更に考えがまとまらないその様子に、秀秋は

思考した。ここに、あのようなことをする女子はそうはいない。日ノ本にも希少であろう。まして日ノ本軍に、朝鮮語を流暢に話せる女子がいない。精々、敵つい男ぐらいだ。

（考えても仕方ないか。）

『そこは、気持ちいいか。』

秀秋は地元の人間だろうつと結論はした。だが、深く思考するのは止めた。まずは、目の前で困惑している少女をどうにかしようつと決めた。

秀秋は、朝鮮語を言葉を柔らかく言った。まだ歳もそんなに老けてないので甲高い。だから、なるべく聞きやすいように、ゆつくりと言った。

因みに秀秋は、訛ってる現地語は聞き取れないが、日常会話がり立つぐらいの朝鮮語は話せる。これは秀秋が自ら現地の民と会話したいが為である。しかし一方で、商人や捕虜との会話も率先して情報収集する為という裏の事情もあった。これによって秀秋が現地で活躍してたのは、誰も知る由もなかった。

おたあは、はっとオロオロとしてた顔と目線を秀秋に向けた。秀秋は顔も久方ぶり、表で笑みを浮かべた。一大名になってからというものの、秀秋の政策は悉く廃止された。参加している日ノ本の大名達に、無能やら木偶など罵倒を受けた。別にそれぐらいの罵倒は慣れている秀秋だったが、流石に表では顔を無表情としていた。なので、久々の笑みは何処かきこちなさが浮かんでいた。

（笑ってる？無理して・・・？）

おたあは秀秋を見て感じた。笑みの中の意味を。

笑うとは、非常に曖昧なものだ。笑うと嗤うと漢字からして種類も豊富、見た目も笑いを威嚇にすることもある。相手が笑っていた場合、まずは相手を洞察する目がなければならない。じゃないと、相手の心理とかけ離れた答えになる。そしてそれは、相手とすれ違いに繋がってしまう。

おたあはさつと木から降りて秀秋の前で柔らかく笑って言った。

『はい、気持ちがいいですよ。』

あの後、おたあは秀秋に感謝を伝え、秀秋がこれに莞爾として笑って答る。それ以降は城で顔を会わせたら話しをし、木の登りかたを秀秋はおたあに教わったりと「友」として付き合いをしていた。

「久方ぶりじゃな。」

秀秋は吉正の後ろで立ち竦んでるおたあにそう呟いた。おたあもその呟きにすぐに頷いた。秀秋は座してる吉正の隣に座布団を敷かせて、おたあに座らせた。そんな隣に座された吉正は、それを苦々しく見ているだけだ。

ここ最近、秀秋は色々忙しいのもあつてか、おたあと全く会わない日が続いていた。おたあ自身も、行長の進軍の際に道先案内として働くこともあった。今回はたまたま従軍に参加しなかった。

「吉正……。火急の用とは。」

「これでございます……。」

おたあを目で一瞥すると、吉正は重いため息を吐いた。そうした後ではこれでつと言うとさっさと出て行ってしまった。その速さは、秀秋が声を出す間もなかった。

（吉正、子が苦手にも程があるぞ。）

秀秋はそう苦笑しつつ呟いた。おたあはいそいそと秀秋と対面の為移動していた。

さて吉正と言う男は、小早川軍の知恵袋である。だが、知恵袋といつても謀が大半を占めている。吉正自身も陰湿な所もあつてか、その役割を十二分に発揮している。その姿は薄気味悪い狐に見えると一部家中から揶揄されている。

その吉正が最も嫌うのが、意外に子そのものである。嫌うというより苦手というのが正解だろう。吉正曰く、動きが読めないからであるらしい。秀秋はそれを直接問いただした時に納得した。

子と言うのは、感情豊かで単純な者が大半である。だが吉正は、

時に神出鬼没でありその無垢故の発想展開に恐怖しているようだ。謀は常に、現実と結果だけが求められる。その為に長い年月が過ぎても、結果がついてくればいいのだ。だが、子の無垢でその唐突な理想家な所がある。

主に謀を仕事をしている吉正にとって、子は非常に厄介な存在でしかないのだ。特に自分の後ろめたさやみすばらしさの闇が照らされているようで…どうも苦手であった。

「ヒデアキ・サマ・イイ？」

「・・・っああ、問題ないよ。」

おたあが秀秋に声をかけると、秀秋は即座におたあに集中した。実は、秀秋自身も子は苦手である。これは秀秋が過去、不遇な日々を思い出すからである。

過去の話は今、話すことではないだろう。

だからこそ、おたあに秀秋は集中している。というよりも、子に話すときは常に集中している。集中することで、過去の自分と切り離す為に。子の考えと意思を理解する為に。

おたあは顔を緊張した面持ちだ。緊張してたのは、公式の場で二人が会うのは初であった。だがおたあは、どうしても秀秋に言いにくいことがあった。だからここに居るし、今からその内容ゆつくりと静かに話し始めた。

## 第一章十三節 李氏朝鮮脱出（後書き）

何とか投稿しました。まさかのまた転勤になって、今回はインターネットカフェで投稿しました。

半年でまた転勤……。会社は俺を殺す気かっと思いつつ……。言い訳ですよね。遅れて申し訳ございませんでした。

次の投稿は、来年以降が濃厚です。どうも仕事が忙しすぎるってのが理由です。こんな歴史転換ですが、見捨てないで下さると非常に励みになります。

後、この場を借りて、まさかのお気に入り二桁になったことを喜んで喜びました。本当にありがとうございます。これから何とか完結まで行くように頑張っていきますので、宜しくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5562f/>

---

転換！関ヶ原！

2011年11月17日19時19分発行